
It might be there

シクヴァル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I t m i g h t b e t h e r e

【Nコード】

N 7 5 6 4 K

【作者名】

シクヴァル

【あらすじ】

【ARMORED CORE for Answer】ORCAの理想は潰えた、人類の未来は閉ざされたまま。その檻の内側で示されたのは、衰退による再生と、破壊による再生

なおこの小説の大部分はボケでできています

基本的な用語・企業説明（前書き）

最低限で済ませています

基本的な用語・企業説明

『国家解体戦争』

国家支配体制に危機感を抱いた6つの巨大企業が引き起こした世界戦争。僅か30機足らずの最新兵器に各国軍隊は成す術もなく壊滅、企業支配体制を確立させた

『リンクス戦争』

企業間で発生した経済戦争。最終的にいくつかの企業が壊滅し、深刻な土壌汚染を残して終結した。世界初のネクスト同士による戦闘が発生

『ORCA旅団』

オルカと読む。全人類に対し宣戦を布告しクレイドルの根底を脅かしたが、ウィン・D・ファンションとfa主人公によって阻止、壊滅した

『クレイドル』

汚染された大地から逃れるために建設された航空プラットフォーム。巨大な航空機であり、アルテリアと呼ばれる地上施設からエネルギーを受け飛行する。人類の過半はクレイドルに住んでいるが、その維持のために地上は更なる汚染に晒されており、未来の存在しない『現実を忘れるためのゆりかご』である。この体制全体を称してクレイドルと呼ぶ事もある

『企業連』

統治企業連合（とか何とか）。すべての企業が参加し、世界の平和維持が目的であるが、当然の如く形骸化している。政治力の高いオメルサイエンスの意を代弁する事が多い

『カレード』

企業連直轄の傭兵組織。ほぼすべてのリンクスが所属し、各企業の依頼を自由に受けられる事になっているが、例によって形骸化しており、実質的企業所属のリンクスが大半を占めている。ORCA旅団の騒動（とfa主人公の無双）により多大な被害を被っており、現在、ランキングシステムとオーダーマッチ（タイムマン勝負）は停止している

『アーマードコア』

人型兵器の総称、人型でない場合もある。パーツの換装による圧倒的な汎用性を誇り、通常兵器とは比べる気も起さない性能差を持つ

『ノーマル』

ノーマルAC、コジマ技術を用いないアーマードコア。ラストレイヴンまでは最強の座にあったが、今となってはただのザコ敵A

『MT』

マッスル トレーサー。アーマードコアの原型となったザコ敵B

『ネクスト』

国家解体戦争において各国軍隊を圧倒したハイエンドタイプのアーマードコア。AMSと呼ばれるOSシステムによりハイレベルな機動を可能とし、コジマ粒子を機体周囲に展開する防衛装甲『プライマルアーマー（PA）』やそれを瞬時に拡散させる『アサルトアーマー（AA）』により凄まじい戦闘力を誇る

『リンクス』

ネクストの搭乗員。AMSによって機体と一体化する事から、Link（繋がる者）と呼ばれる

『コジマ粒子』

小島さんが発見した粒子。放射能レベルの汚染効果を持ち、地上荒廃の元凶。要するにミノフスキー粒子。緑色

『VOB』

『ヴァンガードオーバードブースト』の略。外付けブースターによ

る超加速によりマツハ2というありえない速度での移動を可能とする。基本的に使い捨てで、使用済みのVOBはパージされた後バラバラに分解される

『A F』

アームズフォート。ネクストをすら凌ぐ戦闘力を持つ超巨大兵器でfa主人公のカモ。アホほどでかい外見のトンデモ兵器だが、パイランカーでとっつかれると瞬時に崩壊する

・GAグループ

『GA』

グローバルアーマメンツ、環太平洋経済圏の最大企業。スタンダードミリタリーカンパニーを提唱し、無骨な実弾兵器に定評がある。食料市場でアルゼブラ、化石燃料市場でインテリオルと利害関係にある他、トーラスとも仲が悪い

『クーガー』

GAの完全子会社。ロケットエンジン系の企業であり、コジマ技術において出遅れていたが、最近はその差を埋めつつある

『MSACインターナショナル』

GAの完全子会社、電子技術系の優良企業で、GAの企業価値の何割かを占める

『有澤重工』

GAグループの企業。とにかくグレネード好きであり、一撃必殺の大口径砲がメイン製品。社長有澤隆文は優秀なリンクスでもあるが、乗機『雷電』はとある致命的な欠陥を持っていたため、fa主人公に撃破された

『BFF』

バーナードアンドフィリップスフォンダクション（かなあ…）、欧州の巨大企業、狙撃兵器が優秀。リンクス戦争で首脳部を失ってい

たが、G Aの支援により再興、そのまま子会社と化す。でも所属リンクスは（色んな意味で）G Aに優っている

・インテリオルグループ

『インテリオルユニオン』

レオーネメカニカとメリエスの合併によって生まれた欧州のハイテク企業。レーザー兵器で圧倒的なリーディングカンパニーであり、開発兵器は大体がとても歯茎。化石燃料市場でG Aと対立している

『アルドラ』

アルブレヒトドライス、インテリオルユニオンから独立したアクチ
ユエータ複雑系の開発元。職人的精巧さのある兵器に定評がある

『トールス』

f aの変態企業、壊滅したG Aヨーロッパとアクアビットを母体と
し、インテリオルの支援によって立ち上がった。コジ
マ技術に高い専門性を発揮する。オーメルサイエンスと競合関係に
ある他、旧宗主たるG Aと仲が悪い

・オーメルグループ

『オーメルサイエンステクノロジー』

西アジアの軍事企業、政治力に優れる。技術的独立性の高さで知られていた他、リンクス戦争後にレイレナードの技術者を取り込み、コジマおよびネクスト技術で巨大なアドバンテージを獲得した。トラスと競合関係にある

『ローゼンタール』

財閥系巨大資本グループの一翼を担う総合軍事企業。汎用的で器用貧乏な兵器を生産する。デザインは象徴性に優れ、世俗的認知度は極めて高く、同社最高のネクストである破壊天使は素晴らしい素敵

性能を誇る

『アルゼブラ』

南アジアの総合企業。強固な量産体制と、特異な発想の兵器で知られる。食料市場でG Aと利害関係にある

『テクノクラート』

ロシアの企業を母体とした軍事企業、兵器のほとんどが旧式であり、技術水準は総じて低い。支配企業の実質的最底辺をなす

・その他

『レイレナード』

リンクス戦争で壊滅した企業。純軍事的にネクスト技術へ傾倒しており、機体はPAを重視した構成である。戦争終結に伴い、多くの技術者がオーメルサイエンスに取り込まれた。ネクスト『03-A ALLIYAH』は旧式だが未だ実戦に堪え得る

『アクアビット』

レイレナードと提携していた中東の企業。コジマ技術の独自確立に成功し、高い専門性を発揮していた。壊滅後はGAEと合流しトーラスを立ち上げた

『GAE（GAヨーロッパ）』

GA（GAアメリカ）傘下にあった欧州の企業。アクアビットと提携しており、リンクス戦争はGAのGAE肅清に単を発する。トーラスの母体

『アスピナ機関』

ネクストの制御装置AMSの開発元、オーメルと関係が深い。カードにリンクスを登録する事によって実戦データを取っているが、AMSから光が逆流するとかしないとか

機体紹介

師匠 『アルヴイド・ヘックション』

頭 047AN02

コア CR-LAHIRE

腕 A-11LATONA

脚 LG-LAHIRE

FCS 061AN05

ジェネレータ GN-SOBREIRO

MB CB-JUDITH

BB GAN02-NS-S-B・CG

SB AB-HOLOFERNES

OB KB-JUDITH

右腕 047ANNR

左腕 ER-0200

右背 061ANSC

左背 061ANCM

肩 BELTCREEK03

二段も多段もできなくなつてオールSは取れるんだ！というのを信条にしてる人。弾切れした重砂を持ち続けるという特性あり。

以下性能値は1・20参照

『アンフィスバエナ』

頭	HD - LAHIRE
コア	CR - LAHIRE
腕	AM - LAHIRE
脚	LG - LAHIRE
FCS	OMNIA
ジェネレータ	GN - LAHIRE
MB	CB - LAHIRE
BB	LB - LAHIRE
SB	AB - LAHIRE
OB	KRB - LAHIRE
右腕	AR - 0700
左腕	063ANAR
右背	SAPLA
左背	DEARBORN03
肩	051ANAM

『アンフィスバエナ』はヨーロッパ地方に伝わる伝説の生物、名称はギリシア語で「両方」を意味する。

『メリーゲート』

頭部	G	A	N	0	2	-	N	S	S	-	H
コア	G	A	N	0	2	-	N	S	S	-	C
腕	G	A	N	0	1	-	S	S	-	A	
脚	G	A	N	0	1	-	S	S	-	L	
FCS	Y	E	L	L	O	W	S	T	O	N	E
ジェネレータ	G	A	N	0	1	-	S	S	-	G	
MB	G	A	N	0	1	-	S	S	-	M	
										C	
										G	
BB	G	A	N	0	1	-	S	S	-	B	
										C	
										G	
SB	G	A	N	0	1	-	S	S	-	S	
										C	
										G	
OB	G	A	P	-	A	O	.	C	G		
右腕	G	A	N	0	2	-	N	S	S	-	
										W	
										R	
										0	
										2	
左腕	G	A	N	0	1	-	S	S	-	W	
										B	
右背	M	A	R	I	A	S	0	2			
左背	W	H	E	E	L	I	N	G	0	3	
肩	M	U	S	K	I	N	G	U	M	0	
										2	

『ヴェーロノーク 2』

頭 H 0 1 - T E L L U S

コア C 0 1 - T E L L U S

腕 0 4 7 A N 0 3

脚 0 4 7 A N 0 4

F C S 0 6 3 A N 0 5

ジエネ G A N 0 2 - N S S - G

M B G A N 0 1 - S S - M L · C G

B B G A N 0 2 - N S S - B · C G

S B G A N 0 2 - N S S - S · C G

O B S 0 1 - V 3

右腕 GAN01 - SS - WGP
 左腕 047ANNR
 右背中 VERMILLION
 左背中 061ANCM
 肩 061ANRM

『ヴェーロノーク 3』

頭 H01 - TELLUS
 コア C01 - TELLUS
 腕 047AN03
 脚 L01 - TELLUS
 FCS 063AN05
 ジエネ I - RIGEL / G
 MB GAN02 - NSS - M・CG
 BB GAN02 - NSS - B・CG
 SB GAN02 - NSS - S・CG
 OB S01 - V3
 右腕 GAN01 - SS - WGP
 左腕 PG03 - SPICA
 右背中 BM05 - LAMIA
 左背中 BM05 - LAMIA
 肩 SM01 - SCYLLA

『ファーブニル』

頭部	HD - JUDITH
コア	CR - LAHIRE
腕部	AM - JUDITH
脚部	LG - LAHIRE
F・C・S	FS - JUDITH
MB	S04 - VIRTUE
BB	LB - LAHIRE
SB	SB128 - SCHEDEAR
OB	KB - JUDITH
ジエネレータ	GN - SOBRERO
右腕武器	01 - HITMAN
左腕武器	EB - R500
右背中武器	TRESOR
左背中武器	MP - O700
肩武器	LALIGURAS

『ファーブニル』は北欧神話及びドイツ北部のゲルマン神話等に登場するドワーフ

『ランドグリーズ』

頭	0 3 - A A L I Y A H / H
コア	0 3 - A A L I Y A H / C
腕	0 3 - A A L I Y A H / A
脚	0 3 - A A L I Y A H / L
F C S	I N B L U E
ジエネレータ	0 3 - A A L I Y A H / G
M B	S 0 4 - V I R T U E
B B	0 3 - A A L I Y A H / B
S B	0 3 - A A L I Y A H / S
O B	0 3 - A A L I Y A H / O
右腕	X M G - A 0 3 0
左腕	X M G - A 0 3 0
右背	E C - 0 3 0 9 M B
左背	R D F - O 7 0 0
格納	L A R E x 2

北欧神話のワルキューレ、『盾を壊す者』

『ダガーアーク改』

頭	H 1 1 - L A T O N A
コア	C 1 1 - L A T O N A
腕	A 1 1 - L A T O N A
脚	L 1 1 - L A T O N A
F C S	L A U R A
ジエネレータ	A R G Y R O S / G
M B	M B 1 1 - L A T O N A
B B	B B 1 1 - L A T O N A
S B	S B 1 1 - L A T O N A
O B	A R G Y R O S / A O
右腕	L R 0 4 - A V I O R
左腕	R G 0 3 - K A P T E Y N
右背	P C 0 1 - G E M M A
左背	H L C 0 2 - S I R I U S
格納	P G 0 3 - S P I C A

中古の P S 3 内で眠っていた機体、原型は留めていない。

『セレブリティ・アッシュ』

頭	HD - HOGIRE
コア	047AN01
腕	AM - LANCEL
脚	047AN04
FCS	063AN05+
ジェネレータ	GAN02 - NSS - G
MB	GAN02 - NSS - M・CG
BB	GAN02 - NSS - B・CG
SB	GAN02 - NSS - S・CG
OB	GAN02 - NSS - O・CG
右腕	GAN02 - NSS - WR
左腕	LABIATA
右背	RDO1 - SIRENA
左背	BM05 - LAMIA
肩	GALLATIN02

「WHITE - GLINT for the beautiful world」

頭 WHITE - GLINT

コア WHITE - GLINT

腕 WHITE - GLINT

脚 WHITE - GLINT

FCS 063AN05

ジエネレータ GN - LAHIRE

MB DUSKAROR - CORB

BB BB11 - LATONA

SB S02 - ORTEGA

OB GAN02 - NSS - O . CG

右腕 GAN02 - NSS - WR

左腕 LABIATA

右背 RD01 - SIRENA

左背 BM05 - LAMIA

肩 GALLATIN02

N a m e l e s s s o l d i e r s m a k e a l l f i n i s h .

視界が赤い

『 ちら 大 』

通信機がノイズ混じりの声を送ってくる

『生……本社の……』

半壊した機体は通気性が良好なようで、破口から別の機体が覗き見えた

無骨なデザイン、GAだろうか。色は、赤い

『今助け………』

ブツンと音がして、通信機が完全に死んだ

「ッ……」

さっきまで何をやっていたんだったか

戦って負けたような気がする

眠い

出血による身体機能の低下が進んでいるようだ

少しして、機体を持ち上がった

「生きてるー！？」

破口から女性が覗いている

女性

死に体だが、見栄を張って親指を立て

それから意識が落ちていった

-
-
-

数年前、赤いきつねと緑のためきなるネクストが存在した

いや、それはどうでもいい

数年前、敵に命請いをしたネクストが存在した

いやそれもどうでもいい

企業戦士アクアビットマンは悪魔超人G Aマンと激しい戦いを繰り
広げていた

すべからくどうでもいい

数年前、ある反体制勢力がクレイドルを脅かした

うん、これだ

全人類の危機に対しあるリンクスたちが立ち向かい、撃破した

多くの命は守られ、今なおクレイドルは空を飛び続けている

『その場凌ぎ』とはよく言うが、先の事など一端の傭兵にはよくわからない事で、食いぶち稼ぎが精一杯である

そうだ、依頼はどうなったんだろう

オーメルサイエンスからG Aの施設を占拠するよう言われていたよ
うな気がする

先月に装備を新調したおかげで、成功させないと財布がやばかった
りするのだが

「……ッ……」

目を開けてみる

「あ…起きた？」

眼前に巨大メロン2個が映った

「!?!?!?」

ビクンと痙攣する

「わっ……大丈夫?どこか痛い?」

視線をもつ少し上に向けると、あったのは女性の顔

20代前半に見える。明るい緑色の髪で、腰まであるだろうか

再度視線を下へ

メロンではなかった、人の胸部だった、巨大な

「傷は…開いてないみたいだけど。今医者を呼ぶから」

側頭部を触ってくる。それにより女性が接近してくる訳で

「見えてる?」

はい、とてもよく

「お……俺はどこから攻めればいいんですか?!?!?!?」

「?」

ドアの開く音がした

「ようやく起きたみたいだな」

中年、しかしわりかし若そうな男が部屋に入ってくる

「そうなんだけど何か苦しそうなのよ」

「あー……まあ今から医者呼ぶから我慢してもらっしか無いが、原因は他にあると思うぞ」

壁に付いていた電話機を手に取り、誰かと話し始めた
といっても2、3言喋ってすぐ切ったが

「やっぱり頭？骨にヒビが入ったとか言ってたけど」

「詳しくは粉碎な。でメイ、いい加減そこといてやれ」

ようやく女性が離れた

「まずだな、ここは北米大陸、GAの施設内だ」

「は……はあ……」

「機体の方を少し調べさせてもらったが、一条陸19歳、1年前に
カレードに登録、オーメル寄りの独立傭兵。で合ってるか？」

「はい…間違いなく…」

オーメル寄り、というか、機体の大半がオーメル製だからだろう。企業が自社製品を信頼するのは当然の事で、結果的にオーメルから依頼が多く入っていた。それだけだ

「砂漠の真ん中でぶっ壊されてた事は覚えてるか？」

「……なんとなく…」

G A施設に襲撃かけようとしてたのだが

言わない方がいいだろう、今まさにいるここらしいし、未遂だし

「どんなのにやられた？」

「いや……なんか思い出せない…」

「……まあ頭やられたんだから当然か、気にすんな。それよりも現状を説明するが」

と

ダンディっぽい中年男は紙つぺらを1枚取り出し、見せてきた

「これ、機体の修理代な」

ああ、わざわざ直してくれたのか

えー

0が10個と少しくらいあるな

「……なん…だと…？」

「ちなみに修理費だけな、手間賃は入ってないぞ」

「いやおかしいそれはおかしい！！新品が1セット買える値段じゃん！！」

「当たり前だ、独自補修可能だったのが武装と内装系だけだったかな。オーメルの知り合いに連絡取って足りない部品を送ってもらった。全取っ替えの方が楽だったような気もするが」

さいですか

「GAがBFFのフレーム使ってれば同情割引が効いたんだが」

面目ありません

「うわ……こんなに…？」

「ネクストの相場なんてこんなもんだ、わかったらやたらめったら機体壊すなよ」

どうやら女性の方は企業専属のようだ、パーツの値段を知らないとは

さつき『メイ』と呼ばれてたような

「単純計算でミッション十数回分つてところか。今のところは借金
つて事になってるが、返済できそうか？」

「できると思います…?」

「まあ無理だろうな」

言って、死の紙はしまわれた

一段落ついたようなので、上体を起こす事にする

特に痛みはなかった

「最新技術の治療法…というか人体実験みたいなもんだったが、もう完治に近いだろ。治療費は気にしないでいいらしいぞ、治療じゃなく実験だったからな」

「……………」

ナニカサレタヨウダ

「で、不幸中の幸いは、お前のここ襲撃が未遂で終わったあたりだな」

「ん…!？」

「オメールに連絡取ったって言っただろ。本社には報告してないが」
筒抜けだったようだ

それを承知で保護してくれるとは、なんと優しい

「未遂って事は隠しちまえば存在しないと同然だ、GAの依頼を回す事もできる。借金返すまでタダ働きだな」

「…仕事貰えるんすか？」

「借金は回収しないといかん。ま、お前さんの預金残高を確認しないで勝手に修理しちゃったこっちにも過失はある」

とどがつまり、GAに組しると

だがそれは

……断る理由が思いつかない

「よろしくお願いします」

「ああ歓迎しよう。とりあえず、俺は『エノク』と呼んでくれ」

「……メタトロン？」

「TACネームだよ、要は偽名だ。そっちは『メイ・グリーンフィールド』」

緑髪の女性を指差し言う

ついでに、某合作小説に同姓同名のキャラがいるが、あれはどうしても名前を思い付かなかったための苦肉の策であり、直接的な関係がない事をここに宣言します

「よろしくね」

「あ…こちらこそ…」

しかし大きい

大きいってアレが、メロンが

とか考えていると、白衣のおっさんが入ってきた

「詳しく話は明日な、今日はゆっくり休んでくれ」

ゆっくり、ね

こいつ医者じゃなくて技術者たる完全に実験結果見てるぞこんなんでゆっくりできるかっての

-	-	-
-	-	-
-	-	-
-	-	-
	-	-
	-	-
	-	-
		-
		-
		-

グローバルアーメンツ社

環太平洋経済圏、ぶっちゃけて言うと南北アメリカ大陸と日本をすべてひつくるめて一つにしたようなものである。国家解体戦争直後はネクスト技術において完全に出遅れており、慌てて作ったネクス

ト『SUNSHINE』はよく粗製と評される

しかしリンクス戦争においては、アメリカ由来の底力とある傭兵により勝利を収め、世界最大の座を守り抜いた

今日の前にあるのは『NEW・SUNSHINE』で、AMS適性（機体と脳をリンクさせる適性）の低いリンクスでも一級の戦力となれるよう設計されている。デザインはかなり無骨な直線美だ

その無骨機は緑色塗装で統一され、左肩のエンブレム、円の中に点2つと半円弧1つという笑顔が目立っている、かわいい

両腕に重ライフルとバズーカ、背中に16連垂直ミサイルとレーダーを装備。攻撃力は高そうだが、世間の評判はあまりよろしくないとのこと

機体名『メリーゲート』。メイの乗機だ

「最初は私が協働…ていうか見張りにつくから、裏切らないようにしてね」

「あ…はい…」

ちょっと余談なんだけど

4のリンクスにメノ・ルーっていたじゃん？

あの人の『お願い…諦めて…』ってセリフに「あ…はい…」と返してそのまま核ミサイル喰らった自分って何なんでしょうか

同じことやった人手えあげてー

「おーいお前からこっちこーい」

自称エノクが呼んでいる

行ってみると、パソコンが1台起動していて、GAのロゴマークが浮かんでいた

GAの依頼はあまり受けた事が無い。どうも機体特性がウケなかったらしい。そのあたりに関してはやはりオーメル寄りと言える

「作戦を説明する」

「は……YARCAの方でしたか!!」

「うるせえ黙れ、俺はBFFの人間で趣味はノーマルだ」

YARCAはORCAの派生系である。『やるか』と読み、特殊な男達ゲイザンの集いとされる。非公式である点に留意のこと

「目標はオーストラリア、循環型電源施設メガリスの奪取だ。ここは少し前に破壊されて停止状態にあるが、最近になってオーメルサ

イエンスが修理しているらしい。要は横取りしようって訳だが、かなり強固な防御網を敷いていて通常戦力では接近すら不可能だ」

モニターに筒状の施設が表示された

高さ300メートルを超える巨大施設である。元々はインテリオルユニオンの所有物で、何回か破壊されながら、地上に残された人間にエネルギーを供給していたはずだ

しかし、自分で壊して自分で直すというのはどうなんだろう

「仰々しく言ったが、要は敵陣に飛び込んで殲滅しろ、というだけの話だ。簡単だろう？」

「接近が困難な件については？」

「あくまで通常戦力の話だ、ネクストには関係ない。迎撃範囲外の超高空から落とすから好きに暴れてくれ、ただしメガリスは壊すな」

モニターが切り替わり、大雑把な敵情報が表示された

ノーマルAC複数。メガリスを囲むように連装高射砲が配備されていて、後は戦闘車両。結構な数があるようだ

「了解したら機体に搭乗、輸送機に積まれる。細かい事はオペレーターに聞くように」

「……………『こんなところか』は？」

「言わん、ふざけてないでさっさと行け」

「いや言ってくれないとやる気が出ないっす」

「お前、今までどんな生活してたんだ？」

「この際『俺がネクストだ』だけでも」

「キャラが違っだろう、というか作品が違っだろう」

しばらくうだうだ言っていたら、強制的にコクピットに詰め込まれた

「大分狭いな、窮屈じゃないか？」

「軽量機体なんてこんなもんで……ってか投げ入れるって何なんすか……」

頭から着地した陸である

ライールの胴体部、コアは細い。空力特性がどうだか言っているが、ここまでやる必要は無いんじゃないか

更にパーツが高い。壊れやすいにも関わらずだ

いや壊れやすいってレベルじゃない、紙だ、ダンボール製装甲だ。被弾すればそれが致命傷となる

その代わりプライマルアーマー、コジマ粒子装甲はかなり厚いが

そんな感じの愛機『アンフィスバエナ』だった

「それとだな」

「？」

正しい位置に座りコクピットを閉めようとしたが、エノクが乗り出してくる

「大丈夫だとは思うが、最初のミッションで相手がオーメルサイエンスってのは、誠意を見せろって意味だ。うまくやれよ」

言って、離れていった

誠意も何もあんな喋り方がくそムカつく連中に所属してると思った事は無いのだが

むしろ憂さ晴らしだ、丁度いい

『メリーゲート、準備できたわ、行きましょう』

緑の機体が動き出す

「……………」

ああ、この声は聞いた事がある

半壊したコクピットで聞いた声だ

赤く見えたが、目に血が入っていただけで、緑色だったらしい

「えー…今更だけど、助けてくれてありがとうございます」

『へ…？…あ…うん。いいのよ、助けて当然だから』

当然か？

「……………ま、いいか」

深く考えない事にする

今は借金返しに精を出さなければ

The spear of Georgios

『オペレーター、ベネッタ・コーエンです。よろしく願いします』

戦闘システムを起動させる

ジェネレーターがコジマ粒子の生成を始め、機体各所から緑の粒が噴き出してきた

現在はメリーゲートと干渉し合って整波できないが、もう少し離れ

れば粒子がプライマルアーマーを形成してくれる

『まもなく目標上空へ到達します。戦闘、準備してください』

「今やってるよう」

ガコン、と、機体が傾いた

メイのメリーゲート、陸のアンフィスバエナ共に下を向き、投下準備が整えられる

『投下と同時に対空レーザーによる攻撃が予想されます。EN防御性能は大丈夫ですか？』

「実弾防御よりなんぼかマシってレベルだな」

『では避けてください』

何か淡々としたオペレーターだ

ライールは防御をすべてプライマルアーマーに依存した特化機体だが、レーザー兵器はPAを貫通する

薄い装甲では2、3発が限界だろう

その代わり、速度はたいぶ出る。よほど気を抜かなければ固定砲の砲撃などには当たらない

『じゃあ行くわよ。うまく盾にして…って言いたい所だけど、EN

兵器はどうしようもないのよね』

まあ

GA製ネクストは本体装甲も分厚いが、排熱効率の関係か、レーザーには弱い

大体はパーツの換装で補える。しかし企業専属ではそうもいかないのだろう

『投下します。衝撃に備えてください』

ハッチが解放される

高い、高所恐怖症なら失神する高度だ

『ご武運を』

ガコツと、アンフィスバエナが支えを失う

プライマルアーマー形成、重いメリーゲートが先に落ちていった

それを追い越す

「お先に！！」

背中の上ノズルに動作を指令

コジマ粒子が後ろに噴出し、アンフィスバエナの落下を加速させる

『わっ!?!』

縦方向ベクトルでマッハ1が出た

巨大な筒、メガリスが眼前に広がり、それを囲むようにガラス張りの施設。対空砲が各所に配置されていて、数は1、2……30ほど
それが一斉に光り出した

『外周施設は破壊して構いません、本体のみに注意してください』

光線が尻を追ってくる

しかしロックが間に合っていない、当たる気は起きなかった

「攻撃開始します」

右背中のグレネードランチャーから弾が発射される

『反対側をやる、そっちはよろしくね』

「うい」

地上で花が咲いた

対空砲一つをグレネードで爆散させ、オーバードブーストを切る

レーダーに映っているのはノーマルAC3機と対空砲5つ。頭部に付加された最低限のものではこれが限界か

「敵陣はどうなってる？」

『施設内にノーマル10機、および連装レーザーが残り28。遠距離より戦闘車両が接近中です。先にレーザー砲台の破壊を推奨します、特にあなたは空中戦専門でしょうから』

抑揚はあるが、やけに素っ気なかった

が、言っている事は正しいので従う事にする

速度特化の軽量機体といっても、地上戦では限界があるのだ
制空権を確保しなければ話にならない

「了解」

着地、衝撃で床が粉碎されたが、機体にダメージは無し

とりあえず近くにいたノーマルを、ライフル2丁で穴だらけにした
次いで武装切り替え。近接伸管ミサイルのロックを対空砲3つに合わせる

『上を先ね、任せて』

「無理しないでいいですよ」

『大丈夫、これくらいならなんとでも』

反対側でミサイルが舞った

連動合わせて48発、とにかく派手である。GAのミサイル兵器は物理法則を完全無視しているというかなんとか

見ている間にミサイル群が対空砲へ突撃する

こちらの3つと合わせて9基、ボボボボ！と視界から消え失せた

それを見てか、後ろからノーマルが速度を上げ接近。搭乗員は血気盛んらしい

「邪魔くせえ！」

ブースターを一気に吹かす

本来なら吹っ飛んでどっか行ってしまうような加速をAMSによる高度制御で安定させ、180度を一瞬で旋回した

間髪入れずグレネードを発射

1機に直撃、爆発して残り1機も吹っ飛ばす

その間にもう一度ミサイルが打ち上がり、対空砲6つを破壊した。
残り13

『戦闘車両接近。ザコにもなれないような相手ですが、数はありますよ』

「わかってる」

ブースターに火を入れ、僅かに浮く。同時に前進

それだけでも500km/hは出ているのだが、更に加速、クイックブーストを点火する

一瞬だけブースターが異常な噴射を見せ、機体を前に吹っ飛ばした瞬間的にマッハを記録

加速Gとか考えないように

「時間はあとどれくらいだ？」

『約1分』

のんびりやってる暇はなさそうだ

速度そのまま、上昇して対空砲射界内に入った

『機体壊さないでくださいね、借金増えるので』

「うるさいな！」

カモが来たとばかりに砲口を向けてくる

「全部避ければいいんだろ！」

ゲーム的な話になるが、多段QBという技がある

左スティックを多方向に入れつつ右トリガー乱打すると、クイックブースト中にクイックブーストして更にクイックブーストしていくという超速カクカク機動が可能となる

でもライールでやったら素でどっか飛んでくから気をつけよう

『うわ…』

反対側のメイが見ていたようだ、レーザーを振り切りつつ超高速接敵する様を

防御優先のGA製ネクストは重く、そのためクイックではなく通常推力による移動を重視している。今のような物理法則無視な機動はあまり見ないのだろう

三六 クイック機動の最高峰はこれです

『酔わない？』

「慣れました！」

対空砲を順に蜂の巣へ変えていく

ライフルの弾倉を使い切り、瞬時に交換、合計8基目を撃破。また
メリーゲートのミサイルが6基持つて行き、残り3

『増援来ます、注意を』

ちよつとありえない数のミサイルが飛んできた

48連でもありえないというのに、100に届いていそつだ

『おや…想定より多いですね』

「すました声で言っな!!」

肩からフレアをぶちまける

第1波はそれでいなし、2波をクイックブーストの急加速で振り切る

フレアのチャージ間に合わず、3波の何発かが命中した

「ちっ…!!」

振動、しかし被害は無い。ミサイルの運動エネルギー、爆発、破片
すべてをブライマルアーマーが遮断している

代わりにコジマ粒子減衰、ジェネレーターがチャージを開始

間髪入れずに残りの対空砲へ銃口を向け、使用不能に陥らせた

「第2戦入ります!!」

『オーケー!』

まあ、もう苦戦する理由はどこにも無かったが

『敵陣、鶴翼に広がっています。挟み撃ちに警戒を』

「無理」

『ですよね』

元々、正面から撃ち合うのがGAの基本理念だ。ちまちま回り込んでいては意味が無い、というか回り込める速度が無い

「メリーゲート、突っ込むわ」

ブーストを吹かす、緑色の機体がのっそり動き出した

空中を飛び回っているアンフィスバエナと比べると相当な鈍速、ただし威圧感だけはある

床との摩擦で足から火花を散らしながら、前方のノーマルACへバズーカを照準、発射

着弾点から2つにちぎれて沈黙した

『ミサイルランチャーを先に潰します』

空中のアンフィスバエナからグレネードが撃ち出される

着弾を確認したかしないかで、クイックブーストを乱発しながら敵陣奥へ飛んでいった

「中の人大丈夫なの？あれ」

『プライマルアーマーに質量減少と空気抵抗緩和、プラス衝撃吸収効果がある事になっています。設定上では』

どれだけ万能なんだコジマ粒子

まあ、PA無しでも普通に動けたりするのだが

『攻撃来ます』

軽く上昇して段差を飛び越え、施設外へ出る

直後に戦車砲が飛んできた

「敵総数はわかる？」

まずプライマルアーマーに着弾、大部分の威力が削がれ、本体装甲で弾き爆発

この程度で仕留めたとは思わなかったのだろう、煙が晴れる前に追加弾を送り込まれた

『約50両、詳細を調べるなら少し時間を頂きますが』

「うっん、数だけわかればいいわ」

ガンゴンガン！と、直径十数センチの砲弾がぶち込まれるが、衝撃以外何の影響も無く

お返しにライフルとバズーカを乱射してやった

『残数46、44、40。反対側でグレネード連射してるのがいますね、残り32』

数があるとはいえ、所詮車か

マシンガンを連射する装甲車にライフル弾をぶち込み、突っ込んできた戦車をバズーカで粉砕。ミサイル車両にはミサイルを撃ち返した

2方向から攻められ、陣形は完全に崩壊している。やられにきたよ
うなものだ

申し訳ないが、このまま全滅してもらおう

『指揮車両、潰しました』

右横にアンフィスバエナが着地する。当然の如く損傷無し

こちらの機体ダメージは10%程度だろうか。機体特性上どうしても被弾は避けられないので、この差は仕方のない事である

最後の残りに2機揃ってライフルを浴びせ、それでリーダーはクリアになった

『敵部隊の全滅を確認。メガリスも被害ありません、お疲れ様でした』

仕事終了、やり残した事も無し。後は帰還するだけ

『どうやって帰るんすか？』

「ええとね、飛行場のある所まで自力で行くの」

『……………』

なぜそんな所だけアナログなんだろう、この世界

「三大萌え嬢が無事全員生き残ってくれて大変嬉しく思う」

「……そうですか……」

アーマードコアという作品はストーリー性が非常に希薄であり、凄まじい難易度も合まって物語の真相を理解できる人間は少ない。まあ基本的にドMがやるゲームなので難易度はどうとでもなるだろうが

わずか42個ばかりのミッション内ですべてを語れというのも無理な話だろう、しかし大衆の目から見ればただの手抜き作品である

それがなぜ人気かというのは、そこに個人の想像を許容する幅があり、プレイヤーごとのフロム脳^{ストーリー}があるからだ

しかしそれにも限界はある

例えば のセリフはロイ・ザーランドですとか言ったら、作者は世界のACファンからすごい勢いでフルボッコされるだろう

勝手に想像してもいいが、最低限の枠は守らなければいけない

で、話を戻すが、場所は北米大陸、砂漠のど真ん中

「このへんか？目印になるもんが無いんでよくわからないが」

『GPSを確認してください、もう少し西です』

砂の海を渡るのはネクストが2機

前方を走っている機体はオーメルサイエンス製のライール。しかし純フレームではなく、腕と頭部に同社旧式ネクスト『ユデイト』のものが使われている。武装はマシンガン＋レーザーブレード、それと背中に散布型ミサイルとプラズマキャノンを積んでいた

「いやすまん、どうも目に頼りすぎる癖があつてな」

ランク1、オツツダルヴァが死亡した現在、オーメルサイエンスの最高位リンクスはランク12という有様であり、グループ内ではリンク5にローゼンタールがいるが、トップが自分でないというのは気に入らないらしく、現在、オーメルはリンクス育成真っ最中である

混成ライールに乗るのはその過程でオーメルに雇用された元独立傭兵で、名前は『リゲル・バスティーユ』、機体名『ファーブニル』

『とてもリンクスとは思えない癖ですね…』

で、残り1機。インテリオルユニオンのネクスト『アウロラ』フル装備、武器腕と呼ばれる腕部一体型武器で、人型の手を持たない。
オートシーカー
ASミサイルのみを装備した完全支援機となっている。名前は『ヴェーロノーク』、リンクス『エイ』プール』

「そうか、なら案内役がいてよかったよ。違う企業なのにすまんな」

『いえ、インテリオルからの依頼だけでは頭が回らないので、条件付きで許可を貰いました』

「ああ…そう」

『何故でしょうね、報酬が弾薬費で消し飛んでいくんですよ』

「そりゃ機体に問題があると思うぞ」

いつもいつも報酬分以上に働いてしまうというか

全国のリンクスよ頑張り所だ、パイル装備で貢いでくれ

『そろそろ目的地です』

「おう。…ってかなんかジェット音がするな、GAか？」

『え…』

レーダーを確認、何も映っていなかった

「上見ろ上」

遙か上空、成層圏あたりに点がひとつ

輸送機だろう、あの高度では追加レーダーを装備しないと捕捉は難しいと思われる

「機械に頼るのもいいが、頼りすぎはよくないと思うぞ？」

『……以後気をつけます……』

『……下に何かいますね』

「え？」

輸送機に積まれて帰路についている途中、オペレーターが呟いた

何かいるといっても、輸送機の壁に阻まれて何も見えないのだが

『ネクスト2機、放置もできません。とりあえず通信を試みるので、交渉材料として出てください』

「…弾が無いんだが？」

左手のBFFライフルなら若干残っていた。それ以外はほぼゼロ

機体が機体なので、継続戦闘能力は度外視されている

『あなたのガレージから武装を回収しておきました、今から換装します』

「あ…そう…」

不法侵入だろうそれ

安いレンタルガレージだったが、『一条陸』で登録しておいたため特定されたようだ

次から実名は使わないようにしよう

『というか、お金の無い若手にしてはズいぶん装備が充実していますね』

「あー、先月にまとめ買いしたらこんな事に……」

『…ご利用は計画的に』

格納庫側面からアームが伸びてきて武装を引っぺがされた

一度壁の中に引っ込み、戻ってきたアームには菱形の腕武器が2つ
形式番号『07-MOONLIGHT』。超高出力レーザーブレードだった

「……え…両腕!？」

『なにぶん急だったもので』

「無理がある!!殺るか殺られるかの2択しかない!!」

『何を弱気な。漢ならブレオンで突撃なさい』

「漢ってなんすか!!!!!!」

とか言っている間に装着完了、機体を下を向き始める

『戦闘になったらすぐ行く、困くらいにはなれるから』

「どっちにしろ5秒でカタつくと思いますがね……」

仕方なくシステムを立ち上げ、プライマルアーマーを張る。相手が
パイルバンカーだったら何の意味も成さないだろうが

『投下します』

アンフィスバエナが切り離された

時刻が時刻なので太陽は綺麗な橙色、砂漠によく映えている

数秒間落下を続けると、真下にあった小さい点が大きくなり、人型兵器のシルエットへ

『こちらグローバルアーマメンツ社。地上走行中のネクスト2機へ、そこにいる理由を説明願います』

落下速度をブーストで相殺し、着地

うまいこと進路を妨害したようだ、アンフィスバエナ前方で停止した

『やはりGAか。でもライールが出てきたぞ、どうなってんだ？』

『私が知る訳無いでしょう』

すごい怪しまれている

相手はアンテナ頭なライールとテルスのマイナーチェンジ機。2企業混成の模様

砂漠の真ん中で何をやっていたのか

『こちらオーメルサイエンス。ここには調査でやってきた、そつちに危害を加えるつもりは無い』

機体をデータベースと照合してみる

出てきた名前は『ファープニル』及び『ヴェーロノーク』

『数日前にライールが1機このあたりで消息を絶ったんだが、何か知ってな……ライール……?』

LAHIRE

丁度良く、目の前にいた

『……恐らくそこにいるそれですね。砂上で大破していたものを保護、雇用しました。本人は独立傭兵と言っているので問題は無いかと』

『なるほど……期待してたような面白い話じゃなさそうだな。オーケー、助かった、依頼主にはそう説明しとく。偉いさんは深読みしてたようだが………両腕ブレードだと!?!』

驚かれた

『へっ、こんな奴がまだいたとはな。面白い、手合わせ願おうか!』

決闘を挑まれた

「ちょっと待てー！ーッ！ー！ー！ー！」

『問答無用――ッ!!!!!!!!!!!!!!』

2機のうちファープニルが、右手のマシガンをポイ捨てして突っ込んでくる

構えるのは左手のブレード。武装を格納していたのか、右手にももう1本出現していた

「ちょ……だから待って!!」

バックブースターを吹かして初撃を避ける。追撃してきたため今度は横へ

オームルサイエンス製のロングブレード、刀身が長いのが特徴だ。その代わり威力はそこそこに抑えられ、例えるなら『扱いやすい細身の長剣』

格納されていたもう1本もオームル製、東洋の居合斬り思想を取り入れており、瞬間的に高出力を発揮する。しかし小型化を優先したためか、破壊力は低い

『どうした!!さつきから逃げてばかりだぞ!!』

「いやそりゃ……」

言っちゃ悪いが、性能が違うのだ

MOONLIGHT、通称『月光』。今は亡きレイレナードの名作であり、ただひたすらに攻撃力のみを追求した『大剣』だ

同時に斬り合えば、結果は目に見えている

この熱血人間を瞬殺するのは何か気が引けた

「ちょっとこの人どうにかして!!」

『そうですね……例えば私、オーダーマッチの観戦が趣味なんです
よ』

「はい!?!」

『カロードが停止状態でオーダーマッチやらないから寂しいな
って』

「つまり止める気無いんですね!?!?!」

なんとという鬼畜オペレーター

その気になれば瞬殺できるのを知っているからだろう、害意が無い
とはいえ他企業のネクストは撃破したいという内心か

『おや……2人とも止まってください』

「結局止めんの!?!」

『何だ!?!』

ファーストが停止した、合わせて陸も操作をやめる

『未確認反応。真下です、かなり大きい』

下

砂の中？

『ッ……飛べー！』

言われ、反射的にブースター出力を最大まで持つて行く

脚部によるジャンプと合わせ、一気に高度を確保

直後、砂漠が割れた

『アームズフォートを確認、識別不能です。戦闘意思は不明』

派手に砂塵を撒き散らして現れたそれは、全体を見ると楕円形。砂中を航行するためか先端は尖っていて、インテリオルの水上AF『ステイグロ』にも見える

「これは……！」

僅かに見覚えがあった。確か数日前

いきなり出てきて自分を一蹴し消えていった

「こいつはやばい！！戦闘回避が妥当と俺は思う！！」

言う間に、A Fの装甲各所がスライドし、機銃やら砲塔やらがせり出てきた

やる気のような

『落ち着け！！識別不能だろうと所詮は鉄の塊だ！！放置しとく方がそっちには危険だろ！！』

ファーブニルが地上へ戻り、さっき捨てたマシンガンを拾い上げる

『始末するぞ！！手え貸してくれ！！』

「……………了解……………」

何にせよ、一度は交戦しないと逃がしてはくれなさそうだ

『メリーゲート投下します、頭上に注意してください』

敵AFは、とりあえず性能的に量産型ではなさそうだった

あらゆる所からハリネズミの如く砲塔が現れ、主砲らしき高出力レーザーキャノンが前後に1門ずつ。『砂上の戦艦』という例えが正しいかもしれない

しかしそれだけならまだいい

本体各所の整波装置がコジマ粒子をかき集め、プライマルアーマーを形成していた

ネクスト3機の攻撃によって穴だらけとなりつつあるが、巨大さ故か、回復力が凄まじい

ASミサイルをぶち込んだ所にマシンガンを集中させ、ブレードで整波装置を1つずつ破壊していくのが現状精一杯だった

『ヴェーロノーク!!残弾はどれくらいある!?!』

『肩が死にました!それ以外はもう少し!』

機銃弾をプライマルアーマーで受け止めつつ突撃、両腕のムーンラ

イトを砲塔へ突き刺す

ファープニルとヴェーロノークがP A破壊、開いた穴からアンフィスバエナが本体を斬り刻んでいく。いつの間にかそんな分担になっていた

『このままじゃジリ貧か…うわっち!!』

ず太いレーザーがファープニル側面を掠る

ライルにしろユデイトにしろ、オームルのネクストは装甲が最低限しかない。直撃すれば一瞬で消し飛ぶ

対E N防御ならインテリオル製のアウロラが飛び抜けた数値を持っているが、ヴェーロノークは支援機であり、前に出て戦うには無理がある

『先に主砲をやるぞ!! G A! 後ろを頼む!!』

「了解!」

クイックブーストを噴射し、一気に後ろへ回り込む

少し離れた場所にメリーゲートが着地し、派手に砂塵を巻き上げた

『こっちに引き付ける、その間にやって!』

「大丈夫ですか!?!」

『これくらいなら何とか!』

バズーカとライフルが連射を始める

無補給の連戦だ、長くは続かないだろう。急がなければ

被弾を無視して強引に接近しブレードを振る。一時的にコジマ粒子が吹き飛んだ

「づっ…!!」

プライマルアーマーを抜けた銃弾が左肩に当たって、スタビライザーを破壊される

気にしている場合ではない、敵PA内側へ入り込み、オーバードブスターを起動

残っていたPAが収縮していく

コジマ粒子を機体周囲に撒き散らす事によって範囲内のすべてを吹き飛ばす強引技。付けられた名称は『アサルトアーマー』

緑色の爆発がAF後部を包み込んだ

「主砲破壊!!一時後退します!!」

紙装甲機のうえ、プライマルアーマーはたった今吹っ飛んだ。この状態で戦闘領域に留まるのは危険すぎる

未だ連射を続けるメリーゲートの頭上を越え、距離を確保

突撃の結果は上々のようだ。主砲は跡形も無くなり、装甲に開いた大穴から黒煙を噴き出していた

反対側でもヴェーロノークのばらまいたASミサイルがPAを削り取り、薄くなった箇所からプラズマキャノンを通させ、主砲を使用不能まで追い込んでいる

残りは機銃、ミサイルランチャーと、小数の中口径実弾砲。ネクスト4機で叩けばどうにかなるだろうか

と、思っていると、敵AFのプライマルアーマーが発光を始めた

この減少は見覚えがある。というか、ついさっき使った

『アサルトアーマーだと!?!』

巨大な図体に張り巡らしていたPAすべてを消費するとなると、ネクストだろうと塵も残らない。早急に範囲外へ脱出しなければ

アンフィスバエナ、元から離れている。メリーゲートも距離があり、鈍速でも何とかかなりそうだ

反対側の2機。超高負荷ブースターを全開出力にして、軽い機体を

強引に吹っ飛ばすファープニルが見えた

残り1機

インテリオル旧式ネクスト『アウロラ』は、同じ旧式の『テルス』をマイナーチェンジした機体であり、高負荷レーザー兵器の使用を前提としているため、本体フレームは低負荷パーツで構成されており、ブースターも最低限の出力。下手をすればメリーゲートより遅い

必死に離れようとするヴェーロノークの姿は確認できたが、間に合うかどうかは微妙、というか、確実に間に合わない

『ッ……!!』

直後に、緑の爆発がヴェーロノークを包み込んだ

風船を割ったように弾けたPAは見た目相応の破壊力を以って半径約1kmを焼き尽くす

『おい!!大丈夫か!!』

視界を遮る濃度のコジマ粒子が拡散し、AF共々何も見えない。リーダーにはかろうじて映っていたが、それでは無事かわからず

そのまま数秒、粒子が散るのを待ち、視界を回復させる

出てきた時のように砂へ潜ったのか、AFの巨体は跡形もなくなっていた

『つう……!!』

通信機から声が漏れる

ヴェーロノークは墜落していた、が、原形はなんとか保っている

距離があつたとはいえ、あれを防ぎきるあたりさすがネクストという所か

『ヴェーロノーク…駆動系をやられました…行動不能です……』

搭乗員の生存も確認

『敵影、消失しました。逃げた、という事でしょうか』

『どうだかな、余力はまだまだありそうだったが。まあ、こちらに
しては助かったか』

輸送機が高度を下げ、雲の下まで出てきた

「えー、エイ…プール…？怪我は？」

データベースからリンクス名を引き出し、近寄って呼び掛ける

脚部の破損が酷い。ブースターもやられたようだ

『すみません…怪我は無いです。動けませんけど…』

ならよし

『GA、悪いが保護を頼めるか。近くに施設があるんだろうし、俺は偉いさんにあれの事を報告せにやならん』

『……他企業のリンクスを助ける理由はどこにも…』

通信機のツマミを思いっきり捻って大音量ノイズを送りつけた

メリーゲートも同じ事をやったらしい、ノイズに混じってビープ音が聞こえている

『………わかりました…回収部隊の到着まで警護を』

「了解ー」

It is not unrelated to them .

「ごきげんようレイヴンの諸君！」

ヴェーロノークをハンガーに押し込んで1晩が経過した

昨日のAFの件もあつたため陸とメイはアラートハンガー（緊急事態発生時に速攻で出撃する役）、馴染みの無い場所で知り合いもないためか、エイプールも待機室でたむろっていて、テーブル囲んで大貧民という現状である

そこにエノクが飛び込んできた

「レイヴンではないっすよ」

「勢いの問題だ、気にするな」

体当たりされてぎっこぎっこしていたドアを落ち着かせ、3人へ寄ってくる

「つかお前ら、アラートハンガーでパイロットスーツ着てないってのはどういう見だ？」

「最近の流行りは私服搭乘っすよ」

「コジマ汚染なめんなよ」

トランプを潰す形でノートパソコンが置かれ、画面は陸へ

映っていたのはBFFのロゴマーク

「作戦を説明する」

「早い！！昨日働いたばっか！！」

「黙れ借金まみれ」

「すいませんでした…」

それを言われると手も足も出ない

昨日のミッション報酬が50万コーム。『COAM』はCompany Assured Moneyの略で、企業保証通貨、ポイントみたいなものだ。日本円換算だと1コーム＝1万円、ただ

し非公式

プラスA Fとの戦闘で追加報酬が30万

そこから機体修理費と弾薬費を引いたら、残ったのは60万。さらにメイと山分けなので30万コーム

完済にはまだ遠い

「借金…してるんですか？」

「え……まあ、ちょっと」

なぜかエイプールが食いついてきた

傭兵業が借金をしている状況というのは、『元からあったものを返済するため命を担保にしている奴』か、『目標を達成できず弾薬費等も嵩んでいく駄目な奴』のどちらかとなる

そして陸は『目的地移動中に奇襲に遭って目が覚めたら借金ができてた奴』なので……ん…？

「怖いですよ、一ヶ月過ぎたら倍になってくんですから」

「いや俺はそこまで……倍!？」

「借金取りの人が毎日家に来て……」

「ちょっと待て！！それ騙されてる！！完全に騙されてる！！」

「その時おごって貰ったラーメンの味は一生忘れられません」

「なんかドラマ始まっちゃってるし！！落ち着いて考えて！！トイチでもその倍々ゲームはおかしい！！」

哀愁漂う顔で思い出に浸りだした

どうしたものかと視線を巡らせ、エノクと目が合う

「利子は取ってないぜ」

ありがとうございます

「……で、それ……どうなったの……？」

「ウイン・Dさんとステイレットさんに話したら次の日に返済完了の通知が来ました」

「……………」

「おかしいなと思って金融会社に行ったらビルが跡形もなくなってます」

「……………」

そりゃそうなる

というか今更だが、借金したことあるのか

「おい、女口説くのもいいがちゃんと仕事してからにしろな」

「口説いてなど…!」

振り返ると、エノクとメイがにやにやしていた

急に気恥ずかしくなり、わざとらしく咳払いしてからモニターを凝視する

BFF。元々はGAの敵対勢力だったのだが、今は子会社同勢だ。どう考えても親より優れた子供だが

「それじゃ本題に戻るぞ。今回は防衛任務、場所は大西洋、パナマ運河近く」

北米と南米の接合点が拡大表示される

海上戦力の多いBFFにとっては最重要に入る拠点だ。ここが無いと太平洋と大西洋を行き来するのに苦労しなければならない

「再編中のBFF第8艦隊にインテリオル艦隊が迫っている。まあ実際は第8艦隊になる予定の無所属艦の集まりだが、それはどうでもいいだろ」

インテリオルと聞いて、エイプールが僅かに反応した

自分の所属企業。忘れていたが、G Aとは敵対関係なのだ

「正当防衛な。俺らにやどうでもいい事だが、偉いさんは違っらしいんだ」

「…わかってます……」

画面が変わって防衛目標の概要、戦艦1隻と巡洋艦が若干。ネクストの登場前は護衛などいない一大戦力だったのだろうが、今となつては『通常戦力』としてひとまとめにされる存在だ

「敵主戦力は水上型A Fステイグロだ、かなりの速さで接近しているらしい。これに対してG AがA Fギガベースを派遣したが、到底間に合わないとの事で依頼が回ってきたって訳だ」

「やられる前にやればいいんすか？」

「結局はそうなんだが、今回は具体的に作戦が提示されてる」

パナマ近辺の地図に戻り、敵と味方が赤と青で配置された。運河出口に防衛目標、北からギガベースが南下中で、東からステイグロ

「お前は北西からV O Bで急襲、ステイグロを引き付けてギガベース到着の時間を稼げとのことだ。撃破できるようならしちまって構わないそうだが、無理はすんなよ」

「敵が第8艦隊を優先した場合は？」

「艦隊護衛に別のネクストを付けるそうだ。俺は戦力を集中させた方がいい気もするんだが、命令だから従うしかないさ」

以上、と言ってノートパソコンを畳む。伝える事は伝えたらしい

「早く支度しろ、VOBの接続は時間がかかるんだからな」

「……『こんなところか』は？」

「それはもういい」

「『やるか？』は？」

「お前に拒否権は無い」

「……ミッション仲介人としてあるまじき姿だ……」

「ちなみに俺、本業はリンクスな」

「……まじ？」

「もう少し真面目な話になると思っていたが、存外いつも通りだったな」

「これが作者の限界という事だろ、真にシリアスなストーリーなど、

あと5年はかかる」

「5年たってもいつも通りのような気もするがな」

「とにかくそれはいいでしょう、今はカラードの運行再開が最優先課題だ」

「いいえ、よくありません、王大人」

「む…？」

「ええ、三大嬢の出番が人気と反比例しているなんてあつてはいけないんです」

「……そう…か…」

「某所では輝美などという人物がのさばっているようですが、フォアアンサーのロリ担当はこのリリウムです」

「……………（育て方間違えたかなあ…）」

「……話を戻そう。カラードにいるリンクスは現状で19人、組織として体裁を保つならあと5人は欲しい」

「しかし闇雲に人数を増やしても意味は無いぞ、死人が増えるだけだ」

「リンクス登録されていない、各企業の被験者を引き抜いてくるといふのはどうだ？丁度良い、人道的介入という理由もある」

『外付けブースターしよって輸送機に吊されるロボット。哀れですね』

「やかましいわー!!」

『ドナドナドーナードーナー』

「売られる訳じゃねえし!!」

カリブ海を東へ進み、まもなく標的がVOB行動圏内に入る

そうなれば、後は時速2400km/hでかつ飛ぶだけだ

『VOBは初めてですか?』

「一応…」

『なら聞いてください。とあるリンクスの名言です、「舌嚙むってレベルじゃねーぞ!!」』

「リンクス?それ本当にリンクス?ゲーム機買いにきた一般人とかじゃない?」

『まあ冗談ですが』

「冗談かよ」

『初体験といこうじゃないか』

はおかしい

本体のブースターで進路を微調整しながら、なんとか高度を保って飛行を続ける

『接敵まであと30秒、通常戦闘、準備してください』

「んいゝー！ー！！！」

『は…？』

前方にライトブラウンの巨大兵器、ステイグロが見えてきた

前面に大型ブレードを装備、高出力ジェットエンジンでマッハを叩き出す。なんか最近マッハマッハ言ってるような気もするが、この際それはいいだろう

それ以外に兵装はVLSミサイルのみ。対艦隊戦用AFのため、それだけあれば十分か

ネクストの最大速度でも追いつけないトンデモ兵器だが、対ネクスト戦はあまり考慮されていない

とりあえず、昨日の未確認AFより弱いのは確かだ

『VOB使用限界、パージします』

一気に推力が無くなる

自己分解したVOBを尻目に、残りを詰めるためOB起動。ステイグロ前方へ踊り出た

「づつはあ！！死ぬかと思った！！」

『まあ、そのままそこにいたら確実に死にますけどね』

レーザーブレードが迫ってくる

ブレードというか、もう壁だ

「だあああああ！！！！！！」

超速でそつちを振り向き、グレネード弾をセット。出撃前に戦法を研究したが、要は『初撃でどれだけダメージを与えられるか』だ。ここを逃したら、後は速度で振り回されるだけとなる

肩から榴弾を乱射しつつ、僅かに浮いてステイグロの正面を取った

腰溜めで3発撃って2発が命中、爆炎が巻き上がる

さらに本命

「ゼオライマーは、負けない！！」

『メイオウ攻撃ではないかと』

アサルトアーマー解放、緑の爆発がスティグロを直撃した
運がよければこれで撃沈なのだが

『敵AF健在、しかし速度低下。追撃を』

交差して反対側へ抜けたスティグロの装甲には大穴が空き、エンジンは無傷、しかし空気抵抗で減速している

本来なら距離を取ってプライマルアーマーの回復を図るべき所だが、こいつ相手となるとそんな悠長な事は言っていられない

フレアをばらまいて飛んできたミサイルを無力化、クイックブーストを繰り返して近付いていく

スティグロはミサイルを打ち上げつつ反転、軸をこちらに合わせた再攻撃のチャンスだが、PA無し、大量のミサイルが飛来中という状況

「うおおお!!!!!!」

結果、避けるのが精一杯だった

『敵AF上部が稼動中、注意してください、何か来ますよ』

「へ!?!」

武器はブレードとミサイルだけのはずでは?

よく見てみると、出てきたのは砲塔。妙にトゲトゲしていて、大量の緑の粒子がチャージされている

「コジマキャノン…だと…!?!」

ネクスト用のトーラス製コジマキャノンを大きくした感じだった

変態臭がプンプンするゼメルツエエエエエル!!

『避けてください、消し飛びます』

「言われなくても避ける……さぁー……ッ!!!!!!!!!!!!!!」

プライマルアーマーが再展開されたが、そんなものは関係無い

発射された緑の帯を全力で回避する

成功、しかしミサイルの追い撃ち

「づッ……!!」

再展開直後の薄いプライマルアーマーは直撃に耐えられず貫通、右肩の装甲にヒビが入った

その間にステイグロはコジマキャノンを投棄、使い捨てだったようだ。アンフィスバエナへ尻を向ける

『敵A F、逃げます、なんとか阻止を』

「わかってらあ!!」

O Bを点火

無理してでも追い付かなければ。借金返済が遠くなる

「メイ」

インテリオルの機体はどうして歯茎なんだろうとか、ぼーっと考える

両肩と、場合によっては頭部もだが、装甲板の組み合わせで見事な歯茎が形成されていた。ぱっと見る限りでは、無駄にしか見えない

インテリオル機の特徴は、レーザー兵器を使用するための抑えられた消費エネルギー、それとEN防御。どちらにせよ熱を伴う

「メイ」

つまりあれは放熱板なのではないか、あるいはパカッと開いて排気ファンが現れるとか

目の前にあるヴェーロノークはASミサイルオンリーの特種支援機で、武器腕である内藤ホライゾンふげふ5連装ミサイルランチャーにも歯茎が付いている。となれば防御用か

「スマイリー」

見方によれば、照明器具に見えなくもない。蛍光灯を仕込んだら楽しそうだ

「悪魔超人」

それにしても損傷が酷い、これでパイロットは無傷というのだから、ネクストの防御力を再認識させてくれる。脚部以外は再利用可能そうだったのでG Aのメカニックが修理中だ

インテリオルの機体を他社が修理していいんだろうかと思っただけ、相手はリンクス戦争時代の機体であるし、機密技術など既に無いのだろう。というか、技術の横流しなんて恒常的に行われている。クーガーが開発したV O Bは瞬く間にパクられたし、A Fランドクラブなんか、もう何機盧獲されたりするか

敵地に放置される可能性のある兵器に機密性を保持しろというのが無理な話だった

「おっぱい魔人」

ゴッ!!

「何か用？」

「聞こえてるんなら返事しろよ……」

後ろにいたエノクへ肘打ちをかまし、それから振り返る

鍛えているのか倒れなかった。腹をさすりながら、メイへ紙を1枚

「昨日のAFの件なんだが、抽象的でもいいから絵に起こしてくれ。得意な方だったろ、確か」

「……まあ、人並みにはね」

なんともアナログな、CG技術より樹木1本の方が貴重な世界で手書きとは

3D画像を作るにも下書きは必要なので、必要無いとは言いきれないが

「ヒマな時にでもやつといてくれ、危険っちゃ危険だが、そう慌てるもんでもない。現段階で問題なのはそれだよな」

と、ヴェーロノークを指す

「インテリアルに引き渡せばいいだけじゃないの？」

「そうなんだがな、こっちの打診を拒否しやがった」

何故

「最近なんかおかしいぜ。GAは戦力拡張に躍起だし、オーメルは変な動きしてるし。何やらかすつもりだ？」

「私が知る訳ないでしょう」

企業専属リンクスといっても所詮はランク18、現在は上位リンクスの消耗で12くらいまで上がっているような気もするが、中の下である事に代わりは無い

組織の内情を知っている筈もなかった

「エンリケ・エルカーノにも話聞いたんだがな、『んなもん知る訳ねーし機体のアセンブリで忙しい』だと」

「あー、あの人は目の前の仕事しか興味ないから」

エンリケは国家解体戦争時からのGAリンクス。今は引退して機体のパーツ構成を担当している。世界初となったリンクス達、いわゆる『オリジナル』は偏った思考の人間が多いというか、何かに特化すると他を受け付けなくなるのだ

とはいえ能力は優秀であり、メイのメリーゲートもエンリケ設計だったりする

「ってか、新しい機体作ってるってことは、新人でも入るの？」

「新開発のパーツが出て興奮してるだけかもしれないぜ？」

そんな人間だったろうか

とにかく、話を戻す

「じゃあこれと彼女、どうするの?」

「当面はうちで面倒見て、インテリオルに打診続けるしかないだろ。橋の下にでも捨てるってんならそれでもいいが」

それじゃ保護した意味が無いだろう、というか無駄に似合うからやめてほしい

「まったく、本社の考える事はわからんね。わからんっつーか何も言っただけだよ」

「……」

ヴェーロノークを見る

脚は大破、ASミサイルもほぼ撃ち切っている。当然だが、インテリオルがだんまりでは弾の補給すらままならない

「これ、GAのパーツで修理するの?」

「そうなるな」

まず脚は交換が必要

腕部もA Sミサイルが無いので使用不可、同じ理由で左右背中、肩武器も産業廃棄物同然

よって使用可能なのは頭、コア及び内装系

インテリオル機は綺麗な流線型が特徴で、エネルギー防御に優れる、引き換えに実弾防御は酷い。想定使用武器はレーザーやプラズマ等エネルギー系

対しG A。力強い直線で構成されたパーツはミリタリズムな重厚長大を地で行っていて、エネルギー防御を捨て実弾防御に特化している。主兵装はミサイルやバズーカ等実弾系

「……ねえ、完璧に水と油じゃない？」

「奇遇だな、俺も今そう思ったよ」

いくら相手が大破して速度低下中とはいえ、水上最速兵器に追いつけるかといえば無理としか言いようがなかった

オーバードブーストでかつ飛ばせば同程度の速度は出るのだが、膨大なエネルギーとコジマ粒子を消費する性質上、長く続かない。亜音速で尻を撃つても弾の無駄だ

そうこうしているうちに、パナマ運河へ到着する

『防衛目標捕捉。逃げる気は無いようですね』

運河を渡って反対側へ抜ければ助かるのだろうか、軍艦数隻と海上交通の基幹を比較した結果、後者を選んだようだ。運河を守る形で布陣している

情報では、ネクストが1機護衛に当たっているはず

『味方ネクストを確n……………』

「……………何か起きた？」

いきなり黙り込んだオペレーターへ問い掛けつつ、何度目かのOB

を吹かす。陸地が近いたためステイグロは更に減速していた、今なら追いつけるはず

反対側の艦隊も発砲を始め、陸上から発進したらしきネクストの姿も確認。見た感じ中量二脚型で、多企業混成フレームのようだ

『……………味方ACを確認、セレブリティ・アッシュです。味方はライフルとミサイルを装備、特に近距離では相当な怯え腰です。突然の撤退に注意してください』

「……………要約すると?」

『味方はいないものと思ってください』

酷い言いようだった

『こちらセレブリティ・アッシュだ、量産AFごときさつさと片付けるぞ』

威勢はいいのである

しかし声に抑揚がない

『味方、既に怖じけついています。むしろアレも防衛目標だと思つて行動を』

「昔なんかあつたんすか!?!」

『ええ…少し…』

ようやくステイグロ側面まで追い付いた

横向きクイックブーストで高速を保ちつつライフル2丁を連射する。狙いは喫水線近く、強引に進路を変えてもらうしかない

数秒の攻撃で装甲板が剥がれ落ち、余計な抵抗が増したステイグロは進路を傾け始める

『敵AFがミサイルを発射。目標、味方艦隊』

射程に入れられたか、十数発のミサイルが飛んでいく

が、それは到着前に、セレブリティ・アッシュの射出したフレアに引っ掛かって無力化された

フレアのタイミングだけは完璧なのだ、そこだけは

『行くぜ！…！』

流れに乗って分裂ミサイルを撃ち返す

種類にもよるが、ネクスト用のミサイル速度は700から800km/h、クイックブースト乱打中のアンフィスバエナに追いつけない。それより速いステイグロに追いつける筈もなく

急旋回したステイグロの尻を僅かに追った後、ミサイルは偶然そこにいたアンフィスバエナへ向かってきた

「ぎゃああああああ！！！！！」

『戦闘意思確認、応戦してください。グレネードでコクピットを狙うといいでしょう』

「対応早いから！！1発なら誤射だから！！」

ぶっちゃけ陸もちょっと思ったのだが、セレブリティ・アッシュの動きを見て一気に悲しくなった。攻撃、防御、速度のバランスが取れているはずの中量二脚で、鈍速重量機とほぼ同じ機動だ。クイックブーストの存在を忘れていたのか

あれなら30秒以内に畳める自信がある

『ステイグロ反転、次で潰せなかったら恐らく報酬出ませんよ』

「わかってる！」

大破寸前のステイグロは既に動きがぎこちない、制御が効かないようだ。ネクスト2機の火力なら完全に停止させられる

「アンフィスバエナよりセレブリティ・アッシュへ！とにかく火力を集中させ……！！……」

と言いながらレーダーを確認

えー…アッシュさん？なぜそんな離れた場所にいらっしゃるのでせ

うか？

『だから言ったでしょう、いないものと思えと』

「……………把握……」

完全に腰が抜けたらしい、なおも後退を続けていた

性格がリンクスに向いていないというか、困った兄ちゃんである。
だからこそ雇いたくなるというものだが

そう思うだろあんたも

思わないのか…？

思ってるんだろ…？

「単機で行く！！」

『最初から単機です、何言ってるんですか』

グレネードを構える

ついでに左手のライフルを放り捨て、小型レーザーブレードをセット

沈んでいくBFF突撃ライフル。買い直しかと鬱になったが、武器
1つならなんとかなるだろう、安い部類だし

「沈めやあああああ！！！！」

残弾すべてを発射する

数発命中したのを確認してからクイックブーストで加速し特攻、アサルトアーマー

ボン！と、茶色い装甲が吹き飛んだ

更にトドメ

操縦室らしき場所へブレードをぶち込み、横へ斬り裂いたら、ステイグロは完全に制御を失って明後日の方向へ走り始めた

『ステイグロの撃破を確認』

陸地へ突っ込み、前面から潰れて崩壊する

なんとか勝ったが、速度で圧倒されるのがこんなに恐ろしいとは

高速機体に乗っててよかった

『まだ終わってませんよ、通常艦隊が残っています』

「……はあ……」

疲れた、もう帰りたい

『ギガベース到着、あと少しなので踏ん張って……』

『もう終わりか。後は俺がやるからあんたは下がってていいぜ、艦船ごときすぐ片付けてやる』

『……………』

クイックブースト無しの鈍速移動で、セレブリティ・アッシュが沖へ向かっていく

ほどなくして、水平線近くで戦闘が始まった

「……………なあ、敵艦はどのくらいいるんだ？」

『20か、25ほど』

「ネクストならどのくらいで片付けられる？」

『のんびりやって5分でしょうか』

5分経過

ギガベースの遠距離砲撃が少しずつ敵艦を沈めていくが、アッシュが沈めている様子は無く

Auxiliary factor

「通常腕部は使った事あるか？」

「はい…一応…訓練ですけど……」

インテリオル艦隊を瞬殺して帰ってきたら、エイプールが質問責めに遭っていた

質問するエノクはパソコンのキーボードを高速タイピングしており、画面上では無数の機体図面が踊っている。GAのサンシャインE型、

L型、ニューサンシャイン。BFFの047AN、063ANなど
対しエイプールは意気消沈している、というか顔に精気が無い。ソ
ファの隅っこでうずくまっていた

「なんぞこれ」

「あ、お帰り」

テーブルでお絵かきしていたメイが言い、それから視線をエイプー
ルへ

「なんですかあの捨てられた子猫のようなのは」

「いや捨てられちゃったのよ」

「……誰に」

「インテリオルユニオン。トールスとアルドラにも連絡したんだけ
ど応答無しときまして」

何故

「敵リンクスでもすんなり受け入れる優しいGAなのです」

「つまりうまいこと戦力化すると」

「最終的には本人次第だけだね」

質問責めが終わったのか、エノクがパソコンからフラッシュメモリーを引き抜き、立ち上がった

「ようやく帰ってきやがったな」

「思わぬ伏兵がいました」

「？」

まあ、それはいいとする

「困ったもんだよな」

「そうみたいっすね」

肘で小突いてくる

何だろう

「何考えてるか知らないが自社リンクスを切り捨てる意味がわからん」

さらに小突いてくる

「昨日はオーメールの依頼でここに来たんでしょ？裏で何か手が回ってたんじゃない？」

今度はメイが背中をつつき出した

「その解釈だと例のA Fはオーメル製、もしくは2社共同開発ってことになるが。自社戦力でわざわざ何やってんだ、実戦テストか？」

「ならここを襲えばいいでしょう。何か情報を握って、調査したけどインテリオルに情報はやれないって感じじゃない？」

見事にフロム脳を発症していらっしやいますね

というか2人とも、そろそろ痛いんだが

「じゃどこのだよ、あれ」

「知らないわよ、G A？」

既にツンツンコツコツからドスドスゴツゴツへ変わっている

何がしたい

と、いきなり首根つこと脇腹を掴まれた

「何をやっている」

「へ？」

低音で囁いてくる

顔を見てみると、これだから最近の若いのは、みたいな表情。メイも同様にそんな顔だった

「お前はあの落ち込んでる女子を見て何も思わんのか」

「……何すりゃいいんすか」

「そうだな…まず後ろから抱きしめて頭を撫でつつ『俺が一生養ってやる』とか言ってみろ」

「あんたがやれや!!」

「おっさんがやって何が楽しい!!!!!!」

「十分若いしダンディーだよ!!!!!!」

思わず叫び合う

その間エイプールは無反応、相当参っているようだ

本当に捨てられた子猫のよう

「……ま、冗談は抜きとして、若いもん同士の方が気が合うだろ」

「…あの子何歳?」

「知らね」

国家解体戦争から5年後にリンクス戦争、ORCA旅団お家騒動は数十年後の話という。数十年に10が入るかどうかで変わってくる

が、リンクス戦争の最年少イサミ・ジャッシュくんが14歳なので、エイプールの年齢は最低で19歳、もしくは29歳。当然そんな低い確率に当てはまる訳がなく、やはり30代は固い

でもそんなの関係ねー！！

「もしもし…？」

「う……」

話し掛けると、僅かに顔を上げ、陸を視認

「あ…お疲れ様です…」

死にかけている、化粧してるんじゃないかこの青さは

医者が必要なレベルだったので、呼んでもらおうと振り返る

エノクが大きいスケッチブックでカンペを出していた

『隣に座れ』

「……………」

ソファに座る、エイプールとの距離は10センチほどあるだろうか

「実質的に解雇通告ですよ…これ…」

「そんな悲観的な…向こうで取り込んでるだけかもしれないし、いきなり解雇とか理由が無いでしょ」

「あるんです…」

「え…？」

「ASミサイルっていうのは機体のロックオンに頼らず自ら敵を識別して誘導される特殊ミサイルで、1発700コーム(約700万円)なんです。それをミッション毎に300発(約210億円)撃ち尽くすリンクスなんてただのいらない子じゃないですか……」

「……いや…とりあえず報酬内には収まっ……」

「いいんです…どうせ私なんて『15%で働いてくれるけど弾薬費考えるとロイ兄さんの方が…』とか『レギュ1・20じゃちゃんと撃ってるのかっていうか本当にいるのか』とか言われてしまうダメな子で…さらに使用パーツも特殊の極みだから『むしろもう産廃じゃね?』って言われて全然使われないし…むしろもう『ヴェーロノークで全ミッションクリア!』とか典型的無理ゲーの的にされてしまふ最弱リンクスなんですよ……」

「……………」

駄目だ、リンクス歴1年の若造になんとかできるレベルを超えている

視線をエノクに向けてみると、見えたのは再びカンペ

『俺が一生養って（ry』

中指を立てておいた

『じゃあせめて肩を抱け』

無理

『撫でろ』

それくらいなら、まあ

そろーっと右手を動かし、エイプールの頭に乗せる

その瞬間に何かカメラのフラッシュ音と携帯電話の写メール音が乱打され始めたが、とりあえず無視

「えう……」

泣き出した

「あの…えー…ほら、路頭に迷ってる訳じゃないし、大丈夫だから」

「……っ!!」

偶然か故意から知らないが寄り掛かってくる。必然的に肩に手を回す羽目になり、シャッター音は激しさを増す

止めると意味をこめて睨みつけると、再びカンペ

『俺にはお前が必要だ（性的な意味で）』

死んで欲しかった

「しばらくの間、この子の世話をお願いします」

仕事から帰ってきたリゲル・バスティーユは、機体から降りた瞬間にそう言われた

「……」

15、6歳ほどの少女である。暗い青色の髪をストレートに伸ばして、顔は無表情、かなり整っている部類だろう

軍事基地であるここにはとても似合わない

「誰の隠し子だ？」

「リンクスです、先程カロードに登録しました」

「…おいおい、こんな若い子を戦わせるつもりか」

「オーメルサイエンスのネクスト開発被験者でしたから、社会復帰するとなるとこれが妥当な就職先でしょう。AMS適性は上位リンクスに匹敵しているはずです」

被験者、といえば聞こえはいいが、やるのはいつ爆発するとも知れない試験機体の操縦だ。基本的に人間として扱われない場合が多いリンクス戦争前、クレイドルの成立前では、企業関係者以外の人間はコロニーに押し込まれ、ただ生きるためだけの労働に従事していたという。今となっては過去の話だが、見えない所でやる事はやっている

「どうして急に」

「非人道的行為は根絶せねばならないという、とても優しい本社の意向です」

自らの利益のためだけに地球を食いつぶそうとしてる連中が何を言っているのか

「以上です。明日、簡単な訓練をさせた後に実戦投入を予定しますので、くれぐれも、よろしくお願いしますよ」

言って、少女の背中を押す。近寄ってきた

身長150前半、体もかなり細い

これを薄汚い戦場に？

しばらく観察していると、青髪少女はリゲルを見上げ、キョトン顔を作る

「……お父さん？」

「ぐわあああああああああああああああ！！！！！！」

勢い余ってバランスを失い転倒、転げるように走って機体の脚部反対側へ

「駄目だ！！俺には破壊力が高すぎる！！」

「渋谷の援交オヤジですかあなたは」

突貫工事でヴェーロノークを修理した結果、ものの見事に原形を留めなかった

「……………」

だったもの
愛機を目の前にして、エイプールが絶句している

残ったフレームは頭部とコア。修理不可能だった脚部と弾切れ腕部はBFFの狙撃戦用フレーム047ANへ置き換えられ、右腕で重量級ガトリングガンが光っている。それに積載キャパシティの70%を持って行かれたため左腕は不釣り合いな軽量ライフルで、背中にやはり軽めなミサイル2種類。それでも脚部搭載量に届かず、燃費いいけど無駄に重いブースタとかジェネレータを軒並み換装。内装系で手が加えられなかったのは、バランスの良い旧レイレナード製オーバードブースタのみ

内藤ホライゾンなブーン機体は面影も無く、いたってスタンダードな外見の重火力支援機が物々しく突っ立っていた

どうしてこうなった（自問自答）

「GA製ネクストはAMS適性の低いリンクスでも一級のリンクスとして活躍できるよう設計されている。根幹は高い防御力を持つ機体で正面から撃ち合う事により戦術を極限まで簡略化する事だが、支援機となるとある程度速度が必要だからな、BFFフレームにG

Aの高出力ブースタを組み合わせてもらった」

「あ……はい……アセンブルも詳しいんですね……」

「byフロイド・シャノン」

他人任せかよ

「つーわけで今からテストだ、そこらへん歩き回って来てくれ。他二人、模擬弾を搭載したのち訓練参加」

まじすか

「しかし、見れば見るほどサーペントというか……」

『何ソレ』

「あ、たぶん言ってもわかんないです」

ヴェーロノーク（だったもの）が基地を出てがしよんがしよん砂漠

を歩行し、少し後ろをメリーゲート。歩いて速度の出るアンフィスバエナは後ろ歩きで先導している状況

6 砲身ガトリングが砂に引っ掛かってつんのめる毎にライフルを突き出して受け止めるのだが、細い腕がミシミシ言って心臓に悪い

というか、ハイヒールでよく砂漠立てるな、ライール

『無理そう?』

『いえ…大丈夫です、慣れてきました』

しばらく歩いてから立ち止まり、腕を軽く動かす。この間まで腕が無かったのだから、こちらは時間がかかるだろう

『ブースタ点火します』

言われて進路を空ける

サンシャインシリーズの高出力ブースタに火が入れられ、ゆっくりと前進を開始

しかし操作を誤ったのか、いきなり400km/hまで吹っ飛んだ

『ははは速iiiiiiiiiiii!』

『落ち着けーっ!?!?!?!?!』

アンフィスバエナが追いかけるが、瞬発力重視のライフルフルセツトでは追いつけず

仕方なく上昇しクイックブースト。頭上を飛び越えてライフルを捨て、衝撃に備える

「ひ…！」

しかし軽量機にとって今のヴェーロノークは横綱もいい所であり、正面からぶつかったら間違いなくどこか壊れる

プライマルアーマー、張る時間無し

結果、横にスルーした

『あうつー！！』

砂に引っ掛かって転倒、転がっていく

『…………一条くん、お姉さんは悲しい……』

「ごめんなさい…ほんとごめんなさい………」

とりあえず、助けなければ

- - - - -

『そろそろある程度は慣れたでしょう、模擬戦に入ります』

通信機に声が入る

そういえば、しばらくオペレーターの名前を書いていない気がする。
とりあえず『ベネッタ・コーエン』と呟いておこう

『ヴェーロノーク及びアンフィスバエナは西へ2km進んだ後待機、
間もなく現場へメタトロンが到着します、メリーゲートと合流次第
開始という事で』

「メタトロンとは？」

『いたでしょう、エノクとかいうのが』

ああ、そういえば本業リンクスと言っていたな

指示に従い、機体を西へ向ける

「それじゃまた」

『うん、お手柔らかに』

かなり速度を落として移動、それでも200km/hは出ているが、レーダー上に示された場所へ向かう。遅れてヴェーロノークがついて来た

1時間程度の練習で支障なく移動できるまで慣らしている。伊達にリンクス戦争を生き残っていない

『戦法はどうしますか？』

「えー…ぶっちゃけ突っ込んで引つ掻き回す事しか能が無いんだよね」

忘れられては困るがリンクス歴1年だ、本来なら機体の保持にも四苦八苦せねばならない時期である

オーメルからちょこちょこ依頼が入ってきたため整備には困らなかったが、戦術的な動きができるほど経験も無い

『そういえば…个体戦闘能力はかなり高いようですが、どこかのテストパイロットでもやっていたんですか？』

「いや…知らないヒゲオヤジに騙されて気が付いたらここにいたけど」

詳しい事は思い出したくないので話さないが、なりたいたいと思ってリンクスになった訳では無い

いつの間にか退路が無くなり、目の前に機体が用意されていた

『え、じゃあいきなり乗ってそれですか…？』

「まあ、頭で思った通りに動くんだったら、覚えるような操作もあんまりないし」

『いえAMSというものはそんな簡単なものではなくてですね！？』

アレゴリーマニピレートシステムは、元々医療系で開発されていたもので、脳波を検出、解析し、機械を動かす事ができるシステムだ
しかし脳に多大な負荷がかかり、適性のある人間以外にはマトモに扱えなかったため平和利用は断念された

その『適性があれば動かせる』という点に注目した企業が、本来なら数十人のチームがなければ動かせないネクストを1人で運用するため採用、今に至る

誰にでも動かせるものではないのだ

『頭痛がしたり思い通りに動かなかつたりするはずなんです』

「いや？そんな事ないけど…」

『は………』

待機地点に到着、走ってきた方向を振り返る

『て…天才……』

なんか絶句しているエイプルはほっとくとして、相手の戦力を確認する

メリーゲートとメタトロン。確かBFF所属と言っていたから、遠距離戦主体の構成だろう。メリーゲートを壁に据えて狙撃してくるはず

高速突撃機であるライールにとって狙撃機は力モだ。が、前衛がいるとなると、下手に突っ込むと挟み撃ちを喰らう

まあ、どうするのが定石かなんて知らないし、結局いつもとやる事は変わらないのだが

『準備完了です。模擬戦、開始してください』

視界に数字が表示された、これを0にされたら撃破されたと見なされる。アーマーポイント、APだ

アンフィスバエナの割り当ては31000と少し。状況にもよるが、メリーゲートのバズーカを5、6発喰らえば消し飛ぶだろう。防御をプライマルアーマーに依存したライールは模擬戦で相当弱い

「じゃ、いくよ」

『はい、準備できています』

前進、さっきの場所へ戻る

空中戦専門のアンフィスバエナはまず高度を取らなければならない、砂を蹴って上へ

と

「!？」

砲弾が飛んできた

横に吹っ飛んでなんとか回避、勢い余って地面に舞い戻る

「既に射程内ですか!？」

『H A H A H A H A、B F Fなめんなよ』

2 k m先でエノクが笑っている

機体キャパシティのすべてを狙撃に費やしたようだ。最大望遠で前方を見ると、スナイパーキャノンを構える4脚機が見えた

頭を押さえられた、と

空戦機体に対する冒涇だ

「上等どころかあああああ！！」

再度上昇、オーバードブーストを点火する

2 km 程度、最大出力を出せば3秒で詰まる

高速突撃を始めたアンフィスバエナへ砲弾が発射され、それをクイツクブーストで回避、連段QBによる加速を加え、エネルギーを一気に消費してメリーゲート正面へ踊り出た

『ぶっ！！！！？』

まさか数秒で詰められるとは思わなかったのだらう、慌ててライフとバズーカを向けてくる

本来なら真上を取ってグレネードとミサイルで爆撃する所だが、無理に突っ込んだため蓄積ENがカツカツだ、回復するべく落下

着地と同時にブースタ再点火し、バズーカを避ける

『速いんだよバカ！！』

メリーゲート後方にいた4脚ネクスト、メタトロンからライフフル弾とミサイルが送られてきた。メインブースタを吹かして上昇し受け流す

が、ミサイルは反転して追尾を続行

「高機動ミサイル!？」

攪乱用の低速弾だ、敵に余計な動きをさせるためのもので攻撃力は高くない、が、アンフィスバエナには結構痛い

避けても無駄なら振り切るのみ

前横前とクイックブーストで距離を離してから肩のフレアを撃ち出す。レーダーからミサイルが消え、同時にメタトロンの頭上を取った

『ち…これだから高速機は!』

4脚を畳み、フロートよろしく浮き上がったメタトロンの疾走を開始。言うのも何だが、自分も速いだろ

「逃がすか……!!」

『はいお粗末さま』

後ろからミサイルが48発ほど突っ込んできた

「何その超火力!？」

『GAの売りですから!!』

先にメリーゲートをどうにかしないといけないようだ

「速い……」

一瞬で視界からいなくなったアンフィスバエナを追う事数十秒、ヴエーロノークも戦闘域に到達する

少し遠くでメリーゲートとアンフィスバエナが射撃戦中、そこから4脚ネクストが飛び出し離れていく

「じゃあ…あれを…」

両背中のみ사일ランチャーと肩連動미사일을構える、火器管制もロック速度の高い物に変えられていたらしく、すぐにカーソルは赤くなった。ずっと使っていたAS미사일은この動作が不要なのだが

「行きます!」

高速미사일と分裂미사일을ぶちまける

레이더に赤い点が現れ、메타트론へ接近していく。数秒で到着し着弾

『うおおお!?!』

追尾性の低い高速미사일은あさつての方向へ飛んでいったが、分裂미사일3発は메타트론眼前で小型弾18発に化け、包み込むように命中していく

『메타트론、機体ダメージ30%』

블ाइマルアーマーを張っていない分、ダメージも高い。まあ模擬弾な訳だが

『つたく、やっぱり砂漠は相性悪いいな……』

左背中のスナイパーキャノンと右手のスナイパーライフルを構えたのを確認。2kmで射程に入るのならヴェーロノークも射程内だろう

狙撃特化型なら近距離戦に弱いはずと踏み、前進を開始

『ここまで来れるか貧乏娘!!』

「誰が貧乏ですか!!」

高速ミサイルとライフルを連射しながら全速を出す

飛んできたライフル弾は無視し、砲弾を気合いで避ける。APが5000ほど減った

が、距離が詰まらない

メタトロンは撃ちながら後退を続けている。フロート形態でホバー移動する4脚は空中移動と同じ速度が出ていて、壁に激突でもしない限り、地上戦で追い付かれる事は無い

その代わり旋回性能がお亡くなりになっているのだが

とにかく引き撃ち相手に正面突破は難しい。エイプール自身もこの間まで引き撃ちスタイルだったからよくわかる。『勝ちにくく、負けにくい』のが特徴だ

手っ取り早いのは射程で圧倒することだが、狙撃機相手に射程で勝てるかというと到底無理な話であり、アンフィスバエナのような高速突撃もできない現状、長引くのは必至

かと思われた

『おおおお！？』

断続的にミサイル2種類が突っ込んでいく

『オーバードブーストで退避するネクストの尻を掘る専用ミサイル』
とも称される高速ミサイルからバックブーストごときで逃げられる
はずもなく、命中率が悪いとはいえ、回避した頃には分裂ミサイル
も到達している

絨毯爆撃が始まった

『ワンパターン戦法は初心者やる事だぞ！』

「初心者です！」

少なくとも、この機体に乗ってからまだ数時間だ

その前に、ミサイルオンリーで戦い続けてきたエイプールに対し何
を言うのか

しばらく撃ち続けていると、後退そっちのけで回避に集中していた
メタトロンはガトリングの射程に納まった

ミサイル以外の射撃武器は初めて使う。インテリオルの訓練では何
度か使ったが、すべて単発式のレーザー兵器で、実弾連射兵器は使
った事が無い

とりあえず照準し、30発ほどばらまいてみた

『いでっ！！』

面白いように当たる

連射という特性を、BFF製腕部の射撃精度による高い集弾性が、
『数撃って当たればいい』感じのガトリングを『集中砲火で粉砕する』感じに変えてしまっている訳で

そして砂漠、遮蔽物など何も無い

『……………』

「……………」

GAに拾われインテリオルに捨てられてから、エイプールは初めて
笑みを零した

『メタトロン、機体ダメージ100%、戦闘不能です。なおヴェーロノークがトリガーハッピー中』

誰だよガトリングなんか持たせたの

地上のミサイル^{メリーゲート}発射機がぶちまけるミサイルを振り切りつつ、真上からグレネードで爆撃する

模擬弾のため爆発はしない。だが命中すればダメージはカウントされていく

『メリーゲート、機体ダメージ60%』

ようやく半分を削ったという所だった。既にグレネードは弾が無い重量機だというのに、ブースタが高出力なせいでそこそ動いて避けるのだ。クイックブーストは死んでいるが、通常移動ではアンフイスバエナより速い

「ちくしょう硬いな……」

あと火力で頼りになるのは左背中近接信管ミサイル（通称ミサイルグレネード）か。ライフルでちまちまやってたら押し負けるだろうし、ミサイル60発で間に合うかどうか

バズーカをクイックブーストで避けメリーゲートを飛び越える。蓄積ENが無くなったためそのまま地上へ

『着地もらった!!』

そこへミサイル48発が来襲

何がイヤらしいって、連続発射で数秒間に渡り時間差で正面と上方から飛んでくる所だ

「ちょ待っ……フレア切れてる!？」

起動だけして何も起こらなかったフレア発射機を肩につけながら、苦し紛れに横へクイックブースト

最初の数発だけ回避し、残りすべてを反動固めで直撃させられた

『アンフイスバエナ、機体ダメージ90%』

本当に紙以外の何でもないだろう、この装甲。さっきまで2万あったAPが一気に1万6千ほど持つて行かれ、ピーピー警報を鳴らしている

これがゲームだったら『退避しろ！命令だ！』とか言われた2秒後に視界がノイズで埋め尽くされているだろう

高機動で攪乱しつつライフル2丁で立ち回り、足りない瞬間火力をグレネードで補うという機体コンセプト上、この状況は既に詰んでいる

『私の勝ちね』

「まだだ！まだアサルトアーマーが！」

『使用禁止です』

範囲内まで飛び込んでから言うな

『アンフィスバエナ脱落。そろそろお開きでいいでしょう、ヴェーロノークを落ち着かせて帰投してください』

まだトリガーハッピー中らしい

The difference in intention

アリーヤ

壊滅したレイレナード製ネクストで、ロールアウト当時は世界最高傑作と呼ばれていたが、今となつては単なる旧式である。特にレギユ1・20では腕部を中心に産廃呼ばわりされている

しかし、未だ実戦に堪え得る性能を保持しているのも事実だ。でなければ再生産などされていない

それが現在、海上に2機

『こちらオペレーター、セレン・ヘイズだ。現在ここ一帯を防衛する任を受けている、速やかに離脱しないのであれば、今すぐ排除させて貰う』

厄介な事になったと、リゲルは頭を抱えなくなる

敵対する黒いアリーヤ、ストレイド。比較的若いリンクスではあるが、実力はクレイドルで最強とされる。戦場で敵対した場合、無事で帰ってきた奴がいないのだ

ORCAの騒動でも、本隊撃破に衛星軌道掃射砲破壊。果てには主導者マクシミリアン・テルミドールもこいつの手にかかっている

戦ったらまず負ける、と考えていいだろう

「あー……。こちらは調査に來ただけで戦闘の意思は無いんだが、それでも駄目か？」

『ボート1隻近付けるな、と言われている』

なら無理か

隣にいるもう1機のアリーヤを見る。青系の塗装で、昨日世話を任された少女が乗っているはずだ

『フェイ』と名乗ったが、どうせ名前なんてなかったのだろう、その場で付けられた名前だった

軽い訓練で見る限りでは相当優秀。しかし実戦経験が無いため、まだ突撃しか知らず

状況を見ると、任務放棄して撤退した方が無難

いつ向こうの気が変わるかもわからない

と、考えている内に、アリーヤ（青）が視界から消え失せた

『攻撃開始します』

慌てて視線を戻すと、アリーヤ（黒）へ高速接近するアリーヤ（青）を発見

「……………やっちゃった…」

突撃しか知らない、という意味を計り間違えた。どうも、敵は確認次第破壊する性分らしい

アリーヤ（青）の右肩に装備されていたアームが駆動し、細長い三

角形の物体を右腕に装着させる

オーメル的新型物理ブレードとの触れ込みだったが、そっち関係と見るとアルゼブラ臭く。”開発中止になったのを押し付けられた”と見えなくもない

背中装備のブレードなど実用性に乏しいと、計画段階で気付いて欲しかったのだが

『戦闘意思を確認、排除に移行しろ』

ストレイドが動き出す

ぱつと見の敵兵装は、アルゼブラ製ライフルと機動戦用レーザー。それと肩に大型グレネードを背負っている。近、中距離仕様が

普通ならカラードの保有データを参照すればそれで済むのだが、奴の武装は毎回変わるのだ

武器はもちろん、フレームから内装まですべてを状況によって換装してくる。本来のACは換装による圧倒的汎用性を売りに開発されたものだが、それをやる人間はほとんどいない。戦術の多様さにパイロットがついていけないのだ

「しかしまあ、そこまで相性は悪くない…か？」

ファープニルの武装は極近距離戦用であり、”やられる前にやる”機体である。背中グレネードにだけ注意すればなんとか押し切れ

るか

『敵機、2機とも接近戦仕様だ。片方はデータに無い、注意しろ』

向こうの通信が漏れてきた

情報不足などどうとでもなると言いたげな口調だ、数年前のORCA騒動を生き抜いたのだから当然とも言えるが

「『ランドグリーズ』だ、昨日カロードに登録した。まだ情報が整理されてないんだろ」

何にしる隠す意味は無いと思ったため、親切に教えてやる

『……職務怠慢か。機能停止中だからといって、奴ら呆けすぎだぞ』

まあ、運用元である企業連が形骸化している現状、いまさら動かし直す気も無いのかもしれないが

そのランドグリーズの突撃を軽く避け、ストレイド右腕からレーザーが発射される

オレンジ色をしたエネルギー弾はランドグリーズのPAを突き破って背中に直撃し、装甲をへこませた

高機動戦用の低消費レーザーだ、威力はそこまで高くない

「だあらっ!!」

そこへファープニルも突っ込んでいく

後ろから襲い掛かったのだが、撃ち掛けたマシンガンは1発も当たらず、逆に側面から連射を喰らった

クイックブーストで距離を稼ぎ、背中の散布型ミサイルを起動。さつき吹っ飛んでいったランドグリーズも反転を完了し、両腕のマシンガンから弾丸をばらまき始める

アスピナ機関の開発した小型マシンガン2丁。命中精度が悪すぎて誰も使いたがらず、倉庫で眠っていたのを引っ張り出したものだ

背中の物理ブレードといいアリーヤといい、余りもので構築された機体だった。オーメルはフェイへまったく関心が無い事を如実に表している

まあしかし、精度が悪いという事は、適当に撃つても何発かは当たるといふ事でもある

派手な弾幕はストレイドを後退させ、それ目掛けてファープニルが散布ミサイルを発射

小型ミサイル10発程が一斉に飛び出した

一瞬、視界はミサイルで埋め尽くされる

「…ッ!？」

いきなり眼前にグレネード弾が現れた

有澤重工製大型グレネード『OGOTO』、弾速も装填速度もいまいちな大艦巨砲主義の極みだが、奇襲を受けては回避もできず

正面から直撃を喰らい、爆風でミサイルも消し飛んだ。プライマルアーマーは完全に消滅して装甲に断裂が走っていく

ライールの紙装甲には致命傷だった

「が……！！」

吹っ飛ばされてコントロールを失いながらもなんとか体勢を立て直す。そして出来得る限り高速で後退

「ッ……2対1ならやれるっていうのが甘かったか…？」

ただでさえ戦闘能力の高いネクストが2機がかりで勝てないとなると、地球上にはこいつに勝てる奴は存在しないんじゃないだろうか
そういえば、2対2になるはずだったミッションで情報不足が発生し2対3となった時も、涼しい顔で殲滅して帰ってきたと噂されている

1対5までなら勝利する可能性がある、オーメルの研究員が言っていたような

この時点で撤退するのが無難なような気もしたが、フェイが止まりそうにない。勝敗がつくまで戦うつもりだろう

支援程度なら出来るか

「世話のやける娘さんだなおい……」

「今日は特に仕事無しな、ピクニックでも何でも行くがいい」

砂漠でレジャーシート広げて何が楽しいのか

「ちなみに俺は今日1日中空いている」

聞いている

「募集中だ」

何を

「新人のくせに両手に花持ちやがってこのやろつがーッ……!!」

「ひででででででででで……!!……!!……!!」

エノクに思いつきり頬を引っ張られた後、特にする事もなかったため待機室でトランプを弄んでいたが、1時間足らずで飽きしばらく沈黙

考えてみればこの基地は北米にあるにも関わらず娯楽に乏しく、仕

事が無い〓やる事が無いに等しい

砂漠の海を越えて東西どちらかの海岸まで行けばまだいくらかは娯楽施設が残っているだろうが、人類の大半がクレイドルに乗り空を飛んでいる以上、地上でできる暇潰しというと

「ビッグボックスでかくれんぼ」

「ネット対戦じゃないんすよ」

「とつつき縛りで8人サバイバル」

「だからネット対戦じゃないって」

「資金繰り」

「それは暇潰しと言えるのか？」

「いえ遊べるお金が無かったので…」

「……………」

なんだろう、早急に楽しい暇潰しを見つけなければならない気がしてきた

「いつそ太平洋渡ってアジアまで行くか？」

「おや、まだいたんですねエノクさん」

「さっきまでトランプ混ぜってたろうがしまいにゃ砂砲でぶち抜くぞ」

「……それで、アジアに何か？」

「混ぜつつ湯浴みする方の温泉」

「行きましよう」

「よし行くぞー」

ガン！ゴン！

「本格的に考えて、この基地内は娯楽施設が無さすぎると思うのよ」
暴走し始めたエノクと陸を殴って止め、場を仕切り出したのはメイ。
若さからしてここでの生活はさほど長くないだろう、何も無いのは辛いはず

「いーじゃねーかお前は、ビールの配給べらぼうに多いし」

「そこまで好きじゃないから溜まってく一方です」

「じゃくれ」

「やだ」

ここにあるものといえば、各種カードとパソコンとトレーニングルーム、外出は自由だが、四方を砂漠に囲まれて何も無い

遊べるものが無いというのは士気の低下に直結するため、会社でも軍隊でも何かしらの道具は用意しているのだ。まあ自分の利益しか考えていない連中に抗議しても無駄だろうが

何もしてくれないなら自分らでどうにかするしかあるまい

「しかし、この低ランク集団に何かできるのか？」

「それを今から考える」

無策かよ

まあ権力の無い人間が施設拡張などできようもなく、砂漠しか無いという時点で詰んでような気もする

輸送機の使用は比較的自由なため、移動時間を考慮しなければ遊べない事も無い。しかし日帰りで海外旅行しろというのは無理があった

と

「そこまで暇だと言うのならば」

不意に待機室のドアが開かれる

いたのは女性1人、身長150cmいつてるかどうかの低身長で、ぱつと見高校生に見える容姿。茶色い髪が背中まで伸びている、うん、たぶん茶色だよ、栗毛も有り得るかな

「野球をしましょう」

「……………」

状況を説明しよう。いきなり乗り込んできたのはBFFのランク2リリウム・ウォルコットで、元からいた4人は展開に脳が追いついていない

ランク2といっても、ランク1乙ダルヴァは既に亡く、とあるイレギュラーを除けば実質的な世界最強になる。ロリコンジジイ王小龍が育てたBFFの女帝である

そしてさりげなく三大嬢が集結してたりする

「既に人数は揃えました、対戦チーム9人にここにいる5人、同じく暇そうだった独立傭兵とオペレーター様4人、後は貴方がたの許可を得るだけです」

「待て待て何この超展開誰もついてってないから」

かろうじて硬直から復帰した陸が対応、ツツコミに入る

いきなり何を言い出すのかこの女王様

「ネタ不足なのです、スランプです、絶体絶命なんです」

「ネタ？」

「はい、恥ずかしながら小説を執筆しております……」

そこで何かはつとし、ドアノブにかけたままの手を引き戻す

「自己紹介が遅れました、リリウム・ウォルコットと申します」

「あ、一条陸で……ってタイミングはここでよかったの？」

「夏の戦場に間に合わせるべく急ピッチで作業中なのですが、どうにも行き詰まってしまうまして」

「……………」

少し電波が入ってる気がする

例によって娯楽の少ない中育ったのだろうか、小説執筆とは獄中の囚人ご用達な暇潰しである

いや、製本までいつているとなると暇潰しとは言えないかもしれない

「ちなみに…ジャンルは？」

「主にBLです」

「……………」

テルミドールさん、腐っても生きられる人間がここにいました

「リリウムはあなたの若さを高く評価しています」

「そんなインテリオル風に言われても……」

そこまで話して、他3人が意識を取り戻した

まずエイプールが人見知りらしく沈黙を保ち。何かトラウマでもあるのか、エノクは背を向けて震えている

「いいんじゃない？別に」

唯一、メイが会話に混ざってきた

「どうせ暇なんだし、GAグループ最高位様のお願いだし」

「ありがとうございます、GAバズーカ様」

「ば………？」

「牛女とも言います」

「……………」

よくわからない、この子。丁寧なのかふざけてるのか腐ってるのか

「まあ、そう言うんなら」

変な小説のモデルにされるのは気になるが特に実害も無し、断る理由は無かった

「ではこちらへ」

促されるまま廊下に出る

がエノクだけはついて来ず

「……………」

リリウムが寄っていった何か呟いた

「よしやるぞお前ら——ッ………！」

急にやる気を出した

『くそ……相当しつこいな』

戦闘開始から10分が経過、水上戦闘を続ける3機は弾薬のほとんどを撃ち尽くし、刺突板とロングソードと格納ブレードでの格闘戦が始まっていた

『押し切れるか？判断は任せる』

撤退したいなら勝手にしろと、オペレーターが伝えてくる。まあ、そんなつもりはまったく無い訳だが

残弾を確認すると、ライフル50発とグレネード1発、レーザーブレードにアサルトアーマー

敵もだいぶ疲れている、やれない筈は無い

「いや、やれる」

「そうか」

要はあれだ、明らかに弱り切ってるアンテナライールヘグレネードをぶち込み、残ったアリーヤをAAで沈めればいいのだ

決め手はそれでいいとして、それを命中させるにはどうすればいいか

『だが忘れるなよ、パイロットを殺したら任務失敗だ』

「ああ」

何か知らないがそういう御達示だった、雇い先がどこかは言わないが

「もうちょつと楽な仕事取ってこれないのかよバ…」

『何か言ったか？』

「イエ何モ」

突っ込んできたランドグリースを避けてついでにブレードを振る、腕を掠った

ぶっちゃけ、それさえ無ければA Aかまして終わりなのだこんなペラペラ装甲コンビ。手加減かけて倒すあたりが難しい

『何も言っていないか、じゃあ夕飯抜きだ』

「なんでだよ！！！！？」

『隠すあたりが気に喰わん』

反転中のランドグリースへ詰め寄り更に斬る、左背中のミサイルランチャーが吹っ飛んだ

『ッ……ッ』

反撃の物理ブレードを横に弾いてライフル弾をぶち込む、アリーヤの複眼が軒並み機能停止

「じゃあ素直に言ったらどうなるんだよ」

『朝飯も抜いていた』

「うおおおい！！！！」

システムリカバリ前にもう一度ブレードを振り、右腕を肘から切断した

『くそやろ…!』

後ろから斬りかかってきたファープニルにクイックターンで合わせ、OGOTOの砲身を突き付ける

発砲、爆発。沈んでいった

「横暴だろ!! 稼いでんの俺じゃねえか!!」

『お前を拾ってきたのは私だ、従ってお前自体が私の所有物だ』

「ペットか!!」

まあ首輪付きだし

最後の足掻きとばかりに掴みかかってきたランドグリーズをタックルで押し飛ばしアサルトアーマー起動

視界が真緑になって、それが収まるとランドグリーズも消えていた

「そんなだから捨てられたんだろが」

「お前もな」

「ちつ……。あれ…敵は？」

『倒したろうたつた今。早く引き上げろ、死ぬぞ』

「アルエー？」

「さあ参りましょう、甲子園優勝を目指して！」

「いや無理です」

「では地区大優勝を目指して」

「いきなり規模が小さくなったね」

場所〓 通常兵器駐機スペース

相手〓 整備班

味方〓 ネクストチーム

審判〓 技術班

どこの社内野球大会かと

思いつきでこの人数を動かすりりウムの権力に呆れつつ、周囲を見渡して味方を確認

陸、エノク、メイ、エイプール、リリウム、シンブルマッシブダン
デイの人、虎柄、コミックヒーロー、オペレーター

「……………」

「……………何ですか」

「いや…まさか参加するとは…」

「命令には逆らえせん」

命令されたのか

面と向かって会うのは始めてだったりするオペレーター、ベネッタ・コーエンだが。金髪ツインテールだったとは露とも思わず

というか、細い腕にグローブはめてるあたりがすごく似合わない

細いといえばリリウムも相当細いが、虎縞ジャケットが無駄に似合っているためよし。しかしそれどこから持ってきた

とかなんとか思っで見回していると、独立傭兵ダンモロさんが近付いてきた

乗機セレブリティ・アッシュは古いコミックヒーローの名前を冠しているというが、その名前で調べてみると出てくるのは少女マンガ。ダン…？

「よ、よう。久しぶりだな…」

「……」

どうやら陸ではなくベネッタに用があったようだが、当のベネッタは無言で少し静止したのち、何も言わずにどこか行ってしまった

「嫌われてますな」

「はあ……。あ、こないだはどうもな」

こちらこそ見事なヘタレっぷりを楽しませて頂きました

ぱつと見はいい感じの好青年である、リンクスやってなかったらかなりモテただろうに。何を間違えてこうなったのか

「なあ、なんか言ってなかったか？」

「いや、別に」

グレネードでコクピットを狙えとか言われたような気もするが、言わない方がいいだろう。一撃必殺コースだし

ま、そっちはそっちでやってもらうとして、気になる事がひとつ

あの独立傭兵最高位は何やっているのか

「ロイ兄さん、なぜここに？」

「ん？金貰えれば何でもやるぞ俺は」

傭兵の鏡だ

つか雇ったのかよりリウム

「お前は大変そうだな、借金のカタに働かされてるって？」

「いえ、働かせて頂いております」

「そ…そうか…」

実際、専属のクライアントがいるのは嬉しい。こちとらロイほど成功していないのだ

思想までGAに染まっているかは別だが、戦力としてはGA一色になりつつある

運用コストの高いネクストを支援無しで動かせというのが無理な話である

「しかし、やけに女が多くてしかも美人なのはどういう理屈だ？」

「フロム シクヴァル製作会社と執筆者の趣味では？」

ホームベースのあたりでリリウムがホイッスルを鳴らし始めた

そろそろ始めるらしい

「よーしやるぞー」

「おー」

- | | | |
|---|-------|-------|
| 1 | ライト | リリウム |
| 2 | セカンド | テラカニス |
| 3 | センター | エノク |
| 4 | ファースト | メイ |
| 5 | レフト | ダン |
| 6 | ショート | えいぷー |
| 7 | ピッチャー | 陸 |

8 サード ベネッタ

9 キャッチャー ロイ

監督（神、）

くじ引きの結果、打順と守備位置はそうなった

左方向に見事な穴が空いてるような気もするが、決まってしまったので仕方ない

ついでにジャンケンに負け、後攻スタート

「行くぞー」

ロイがキャッチャーメットをかぶって座り込む

次いで筋肉質な整備士がバッテリーボックスへ

「うわ……」

対するピッチャー、一条陸、既にビビっていた

何故こんな約回りになってしまったんだろうか

リリウムの持つ紙切れのうち一番右以外を引き抜かせてくれなかったあたりで既にハメられていたのだが、リリウム主催である上にそ

の理由が『小説のネタ収集』であるため反論もできず

まあ、ここに女性が来ても（リリウムの）何の面白みも無かったのだろうが

とりあえず、ど真ん中を狙って投げてみた

カッキン！という音がした

「あうっ！！」

例え年下だろうと相手は企業の一大戦力リンクス様であり、無下には扱えないと思ったのか接待ゴルフ的な力のセーブ具合で左方向にボールは飛び跳ね、進路にいたショート、エイプールの額に直撃して高く飛翔した

「大丈夫かー！ッ！！！！」

ぱたりと倒れたエイプールに駆け寄る、目を回しているがそこまで重傷でもなさそうだ

その間にセカンドのカニスがボールをキャッチして一塁送球、やっちまったとばかりに青ざめていたバッターをアウトにする

「ボールが来たらグローブで顔を隠そう、致命打は避けれる」

「は……はい……」

実質的な戦力外通告だったが、素直に聞き入れてくれた。意味がわ

かってないのかもしれない

「なあなあ」

カニスが寄ってきた

「なんで前回は俺の紹介だけ無かったんだ？」

「ロイ兄さん終わったあたりで文字数が丁度よかったからです」

「延ばせよ、立ち位置微妙になったじゃねえか」

「元々微妙だから大丈夫」

妙に納得して戻っていった

「試合中に堂々と手当て……なかなか……」

ライトでリリウムが呟いている

「制球力ありそうだから位置の指示出すぞ」

キャッチャーが堂々と言ってきた。まあ作戦以前の問題なので気にしないが

相手の2番は背が高い典型的アメリカ人だった。楽しそうに微笑んでいる

バッターボックスで構え、ロイのミットが膝下3センチあたりを指す。初心者相手に難易度高すぎないかそこは

「頑張つてー」

一塁の応援を背にオーバースローで振りかぶる。といつても見様見真似だが

腕が真上に達した瞬間にボールを離し投球する。いい感じにコントラールできたようで、ミットの場所に寸分変わらず吸い込まれていき、キャッチ前にバットで防がれた

内野フライが上がる

「オーケーオーケー！」

カニスが走ってグローブを掲げ、エラーも出さず綺麗に受け止めた。これでツーアウト

「マツハで蜂の巣にしてやんYO!!」

「……………」

「え、なんでシラけんの？」

3番、なんとも特徴つけにくい普通な人だった。コードネームは『NPC』としよう

「何気に酷いな」

そお？

今度は内角高めにミットが移動したため、デッドボールしないよう抑えて投げる

再び初球打ちされたが詰まった当たりで真上に飛び、ロイがキャッチして終わった

チェンジ

「行きます」

縞々ジャケット虎キャップなりリウムがバッテリーボックスに立ち、構える。キャッチャーが和んでいた

「…なんであんな小さい子がランク2？」

「王小龍ワロムが新規ファン獲得を狙ったんだろ。ものの見事に変態ホイホイになった訳だが」

ベンチで話す事ではないと思う

アーマードコアが萌えボイスに走り始めたのは4のフィオナ（坂本真綾）からであり、それがシリーズの認知度を高めたためどうとも言えない、が、とりあえず一言

何があった

「……でもかわいいからよくね？」

「そうつすね」

にやにやし始めた陸とエノクがメイにゲンコツ喰らったあたりでピッチャーが投げ、ミットに納まる。判定はボール

2球目、さっきのボールは狙った訳ではなかったらしく、中央近くに来た球に対しバットを引き寄せ

「……」

軽くコツンと当てた

「セーフティーバント？」

「いや振ってるからゴロだな」

「でもセーフですよ」

「キャッチャーがリリウムに当てるの恐がつたんだろ」

接待野球発動

2番、カニス。勢い良くバットを振っている

「次俺か」

「行つてらー」

3番エノクもサークルに向かう、その間に打ち上げでカニスアウト。
ダンの撤退並に早かった

サークル入りしたものの練習無しでボックス入りしたエノクもまず
空振りし、次に空振りし、そして空振りした

一塁のリリウムが冷たい視線を送っている気がする

4番、メイ

「行け主砲ー！！」

「重量級ー！！」

「GAバズーカーー！！」

「やかましゃー！……！」

くじ引きで決まった4番だが、何故だろう、すごく似合っていた

「重いのは機体だけ重いのは機体だけ……」

なんか言ってる

ピッチャーが投げる

「重いのは機体だけ……！」

振る

打ち上がる

ファーストのグローブに納まる

意味無いけどそのままダブルプレー

「……」

「……」

「……」

「………申し訳ありませんでした」

土下座しなくても

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100

2回表、3者連続ヒットにより満塁。ノーストライクスリーボール
ノーアウト

「どうしてこうなった!」

「そっちがやれカーブだフォークだ言うからでしょうが!!」

まずレフトに上がったフライをダンがポロリし、次にセカンドからの送球をメイがスルー、そしてサードゴロがベネッタを強襲した

酷い有様である

その後、変な持ち方で投球したせいで暴投しまくりボール3つ

「さて何点入るか…」

とにかくこれ以上のボールはありえないらしい、真ん中より少し上あたりを指示される

満塁ホームラン直行便のような気がするが、ボールしても点は入る、ぶっちゃけそこまで変わらない

「無理しなくていいよー」

激しくやる気の削がれる応援がファーストから送られてきたし、あまり気張らない事にしよう

ついでに軽く周囲を見回す、エイプールがグローブかぶって縮こまっていた、愛くるしい

「……行きまーす」

振りがぶってぶん投げる。僅かに放物線を描いてバッターボックスまで到達したボールはやはりミットまで到達せず、カッキーンと舞い上がった

それはもう見事な長打で、ランナー一掃とまではいかないものの2、3点は入りそうな勢いでライトへ飛び、リリウムのグローブに納まる

「打たれちゃいましたねー」

「ま、仕方ないさ」

ボールが2塁に送られ走者を刺す

「やっぱりもうひとつくらい球種が欲しいよな」

「無茶言わんでください」

カニスが転がしたボールをベネッタが受け取り、3塁走者も死亡

「フォークつてのはこう指2本で挟んでだな」

「だから無理ですって」

「やる前から諦めてどうする」

「今やって結果散々だったでしょ」

「その2人ー、チェンジだよー」

「へ?」「」

「もうとにかくヘタレなんですよ。何かとつけては『役に立つと思
うぜ』とか『弱い奴ほど口ばかりだ』とか言って出撃するくせに、
開始数分で『俺向きの任務じゃ云々』とか『俺にだって任務を選ぶ
権力云々』とか言い残してすぐ撤退するんですよ」

「あー、うんうん」

「その数分で陸さんみたいな超高速破壊活動するというのならそれ
でいいんです。でもノーマル数機がせいぜいって何なんですか」

「まあまあ」

「他の人と協働した時だって、『あのくらいなら大丈夫だろ』って
車両部隊を任されて、あいつが『うわ…！』とか漏らした瞬間に慌
てて戻ってくるんですよ」

「あらあら」

「特にあれです、ストレイドがAFランドクラブ2機を畳んでる間
にノーマルにボッコボコにされて、その時の『おまいは何をやつと
るかー！』……！』という叫びに何も感じないってど
うなんですか、屈辱じゃないんですか。しかも瞬殺じゃないですか」

「まあまあうんうん」

当のダンモロ、10回連続ファールで粘っていた

5回目あたりでめんどくさくなったピッチャーが真ん中にしか投げなくなったのだが、以前連続ファールを叩き出し続けている

「とりあえず頑張りは認めようよ」

「……頑張りは認めます」

11回目

「射撃練習を5時間やって命中率89%を記録しました」

12回目

「次の実戦では10%以下です」

「……うーん……」

そろそろ愚痴聞くのも疲れてきた

つかりりウム、聞き耳立ててメモするのをやめなさい

「りりウムの脳内変換能力を甘く見ないでください」

知らんがな

「あ、打った」

「へえ………なんだと!？」

確かに打球は前に飛んでいる

レフト前にポトンと転がったボールに整備士が飛び付き、ファーストへ送球

「走れー!！」

「間に合わせーっ!！」

本日最大の盛り上がりを見せております

「ぬあああああ!！」

ダンが、飛んだ

「ヘッドダイブ!！ヘッドダイブ!！」

「違うスライディング!！」

「どっちでもいい!！」

ほぼ同時に一塁へ飛び込んだダンとボールは砂埃にまみれ……ない、アスファルトだった

ゴツツと鈍い音が鳴る

[illegible]

のたうちまわっている

⌈
⋮
⌋

墨審はそれを見て、次にファーストと目配せし、やれやれと首を振ってセーフを出した

むしろアウトにして休ませてやってくれ

「アホ」

ベネツタが呟いた

「こつ、でボール来たらこつ」

「え…と…?」

「違うバッターボックスから足を出さずにバット突き出してこつ」

ロイ兄さんがエイプールにバントを教えている

せつかくの頑張りを無駄にしないためにも士気を上げたリンクス集団だったけどダンの次はえいぷーであり、鈍速であり、ダブルプレーまっしぐらだった

「とにかく当てて転がせ、でも無理そうだったら当てるな。後はあそここの兄ちゃんがどうにかしてくれる」

「どうにもならないもんはないっすよー」

サークルで素振りしながら言う。何を隠そう次は陸だ

狙うは長打、そうすれば一塁の怪我人がなんとか帰ってこれる

「どうにかしてこそそのヒーローです」

「いきなり背後に立たないでくれませんかねりりウムさん」

「すみません、緊急事態が発生したもので」

「うん?どんな?」

「先程グローバルアーマメンツ社が新型ライフルをロールアウト、

発表会会場において興奮したエンリケ様が王大人の右頬を殴打し混乱に陥っています」

「…そう………」

「ざまあwwwですよね」

「……………」

「まあそれはわりかしどうでもいいのですが」

「えー……」

「所属不明の武装勢力がここに向かってきています」

「…………え？」

「急ぎ迎撃準備を」

警報が鳴り始めた

R e s e r v a t i o n o f a n e s t

『航空部隊は全機上げろ！残りは基地周囲に展開しとけ！』

『本部のAF回して貰えないのか！？』

『間に合うかバカ！！』

無線がうるさい、管制塔の周波数だけを残してすべて拒否に設定する

ハンガーの扉が開いたのを確認し、前進。緑一色の機体が外に出た

『所属不明勢力、方位120及び200から接近中。例のAFも確認されています』

ブースタを吹かして進路を南東へ

『早急に基地から離れてください、プライマルアーマーが使えなくなります』

BFFの4脚機、メタロロンが追いついていった

地平線近くには黒い点が2つ見えており、その時点でAFの存在を知らせている。ベネッタが言うには盧獲されたランドクラブのようだが

こないだの化け物は、南西

「ちょっと、狙撃機が前出ていいの？」

『時間無いだろ、先にポイントを押さえる』

とにかく4脚は速い、メリーゲートとの速度差は200km/hに達している。あつという間に見えなくなった

「……まあ、あれはどうにかなるとして」

後ろを見る

『セレブリティアッシュ行くぜー！！！！！』

『……うるさい』

『……すみません……』

緊急事態により丁度よくそこにいた傭兵達へ依頼が出されたが、ロイとカニスは機体無しにより棄権、とばかりを恐れて北に離脱したGA寄りだったダンのみ機体があり、合計でネクスト6機。汚染を気にせず戦える砂漠だから出れる数である。現代戦力的に例えると、核弾頭6発（ただし全機がストレイドだった場合に限る）

『……PA禁止域を離脱、戦闘開始してください』

機体周囲をコジマ粒子で包み込む、ただでさえ厚い装甲が追加された

「焦って下手な動きしないように、うまく盾にしてね」

『甘やかさないでください、図に乗ります』

『乗らねえよ……今更だろ……』

この連携で大丈夫なんだろうか

「随伴部隊は？どのくらいいいそう？」

『レーダー埋まってます、目視で確認してください』

いやそれはおかしいだろう

メリーゲート搭載の戦闘用近距離レーダーを見ると、埋め尽くされはしないものの、空白部分はほとんど無い

『1、2、3、4……500くらいか……？』

エノクが感覚崩壊を起こしていた

「ふざけてるの？」

『ふざけてねーって、こっち来てみる』

いや、それが本当だとしたら、いくら正面突破至上主義のメイでも突っ込む気はあまり無い

出力を上げて上昇する。視界が広がり、兵器の群れを確認した

本当に500ありそうな勢いだ

『一気に攻めるよりローテーションで補給受けた方がいいと思うんだがどうだ？』

「そつね…そつちの方が無難か…」

無補給で殲滅できるならそれでいいのだが、ばーっとやっつてばーっと補給してしまうと、その間基地が無防備になってしまう

ノーマルAC等の防衛部隊もあるが、AF相手ではアリ以下の存在だ

「じゃあ最優先目標はランドクラブ、誰か1人無理して破壊しとけばだいぶ楽になるでしょ」

『おう、よろしく』

「……」

まあ、ダンには無理そうだし、エノクは狙撃機だし

『進路上の敵を減らす。ダン、支援してやってくれ』

『お…おう！』

推進をメインブースタからオーバードブースタに切り替える

機体が重いためOBでも音速には届かない、その間に戦闘機部隊がメリーゲートを追い抜いていった

『南西部隊が交戦を開始』

向こうも始めたようだ

相手はPA装備の怪物であり、そんなものに通常戦力を当てても無

駄でしかないため、戦力はネクスト3機。かなり辛いような気もするが、大丈夫だろうか

「それで、結局所属はどこな訳？」

『不明です。部隊構成も乱雑で予測も不可能』

戦闘機がミサイルをぶちまけ始め、反撃が地上から撃ち上がる。その間も進撃速度は緩まず、等速維持のまま基地方向へ

『よし突っ込め！！』

OBを停止させて限界数までターゲットをロックする

「よっしゃあ！！」

発射したのは背中の垂直ミサイル16発のみ、突破後までAFを撃破できる火力を残さなければならぬため、肩のミサイルは使わずそれで周囲の車両を吹っ飛ばして、耐えたノーマルはバズーカで粉碎、横から飛んできた砲弾が進路上の敵を少なくし、残りはセレブリティアッシュが引き付けておく

『ッ……！！』

群がり始めた敵に、ダンの声が漏れる

「落ち着いて！無理に倒さなくていいから！」

さすがに車両相手なら圧倒できる、だがそれが20、30となると

火力不足が目立ってしまう。ライフル1丁と単発発射の分裂ミサイルしか積んでいないのだ。ブレードもあるが、あくまで緊急用

『急げ、退路無くなるぞ』

さらにミサイルを発射して前進する。ランドクラブに近付いていき、砲撃が飛んできた

途端に状況は厳しくなる

『……………』

そんな中、管制塔から溜息がひとつ

『無理に引き付けなくて逃げ回って、陣形さえ崩せればどうにでもなる』

『お…！？』

レーダー上にガイドビーコンが出され始めた。アッシュへの推奨進行方向、のようだ

『どうせ当たらないんだから撃っても無駄でしょう、移動に専念した方が無難』

『了解！！』

アッシュが掻き回しを始めた

『なんだ、仲良いじゃねーか』

『メタトロン、過失により報酬減額』

『Why!!!?』

「正直…近付きたくないです……」

茶色い装甲、無数の砲台。前回破壊したハイレーザーは3連装3基に増強され、穴だらけにしたPAも完全復活という有様

短期間でこの超回復となると、やはり背景に企業がいるのは間違いない

『近付かないと倒せません』

「あ…うんまあそうなんだけど…」

遭遇3回目となる所属不明AFに対し、正面にアンフィスバエナ、その後ろに元ヴェーロノーク。側面からアンビエントが回り込んでいる状態

どっからどう考えても火力不足は否定できなかったが、やる前から諦める訳にもいかず

AF以外に敵影も無く、とりあえず戦ってみようとなりネクスト3機が布陣していた

『プライマルアーマーへの対抗手段は、引き剥がすか、貫通させるかの2択となります』

貫通性能を求めるとなるとEN兵器、しかしGAグループのEN兵器はリリウムの持つてそれだけであり、この場合は1択である

引き剥がすにしても、アンフィスバエナの火力は半分がグレネードによるものであり、わずか12発。足りると思えない

『前：出ましようか？』

後方500メートル、エイプールが言ってきた

魔改造後のヴェーロノークはミサイル2種とガトリング装備で火力は申し分無い。それでも撃破には同一箇所集中放火を叩き込む必要がありそうだが

「いやまだいいよ、危なくなったら助けてもらうから」

『あ…はい…』

陣形変更無し、まず遠距離から撃ち込むべくミサイルを起動

『それで危なくなっても助けてもらわないっていうオチなんですよ。この天然』

「やっぱり先に主砲潰した方がいいな。後ろ頼める？」

『陽動を行います、その間に集中放火を』

スルーしたらスルー仕返してきた

左側面に張り付くアンビエントから低速ミサイル3発が発射され、

PA表面で爆発する。ネクスト戦を前提に開発された攪乱用のため、威力は物足りない気もする

あのジイ
狙撃4脚との協働を目的に構成されたアンビエントは攻撃力が低い（実際はリリウムレーザーのPA貫通が恐ろしい）ため、やり慣れているのは陽動と囷という事になるだろうか

『後方支援を開始します』

後ろから飛んできたミサイルを見送り、ハイレーザー砲塔を破壊するべく追従していく

「で、火力不足はどうしようか」

『一度戻れば補給受けられると思いますけど…』

ああ、そうだ、武装を変えればいいのだ。AC最大の売りはそれである

借金の要因となった買い貯めパーツを思い出し、ハイレーザーライフル『カノープス』をピックアップする。後は弾切れ対策としてブレードか

背中には状況に応じるとして、準備してもらった管制塔へ通信を繋ぐ

『違う！そっちじゃない！レーダーの進路に従うくらいちゃんとやりなさい！そんなだからヘタレで最弱で速攻撤退貧弱火力の無意味なブレードがFCSで…』

長くなりそうだったので回線を切った

もう少し時間を置こう

「行くぞ！」

ミサイルが着弾し、派手に爆炎を上げる。同じ場所を狙ってライフを乱射し、PAを消滅まで追い込んだ

露出した箇所へ更に撃ち込み、整波装置を破壊。まず穴がひとつ開く

200

再び飛んできたミサイルの着弾点へ向かい同じ要領で2つ目を壊す。側面のアンビエントがレーザーを貫通させもう1箇所、その後機銃に追われて離れていった

「どのくらい持ちそう？」

『1時間程度なら軽く行けます』

「おおっ…！？」

恐らく囪としてだろう、弾薬は10分ほどで撃ち切るはず

となると、こっちは早急に全弾ぶち込んで装備変更した方がいい。さっきから進撃速度が変わっていない件もあるし

飛んできた三連装レーザーをクイックブーストで避け、背中のグレネードとミサイルを同時に構える。乱射したら1分持たない瞬間火力担当だ

『構わん！全弾撃ち尽くせ！』

「へ？」

『いえ、昔から言ってみたかったので』

どうにも掴み所の無いリリウムである

『にしても、半分以上の武装が停止しているようですが』

「少し前にあれだけ壊したし、内部が未修理とか？」

『あの…主砲を完全復旧できるなら配線繋ぐくらい造作も無いと思いますけど』

「そう？」

『はい、訓練でフェルミの解体とかしてました』

「何の訓練…？」

とか話している間に弾薬すべて撃ち尽くし、敵AFの主砲1基がペしゃんこに潰れていた

残ったライフルで戦闘を続けるも右腕のオーメル製アサルトライフルも弾切れを起こす

継戦能力度外視の機体だ、こういうデカブツとは相性が悪い

というか、これだけやって進撃速度が衰えないのはどういう理屈なのか

『もしかして、無人なんじゃないでしょうか』

と、エイプールが言ってきた

『動きが単調で柔軟性も無いし、AIに異常があるなら兵装も正常動作しません』

『…では制御装置らしきものを破壊すれば止まるのでは』

『あ…いや確証は無いですよ…？』

まあ、理屈は合っていた。実例が無いので何とも言えないが

無人兵器といえば旧レイレナードの自律型ネクストが有名だ。といっても、相当頑張ればダンでも倒せるレベルである

とりあえず、補給を済ませる事にしよう

敵は相変わらずの大部隊だが、ちょこまか動き回るセレブリティア
ツシュにより陣形を崩されていた

軽く説明すると、メリーゲート後方にかなりの数が集まっていて、
AFランドクラブまであとノーマル数機。撃破後は反対側に抜け
れば何の苦も無く脱出できる

後は火力が足りるかどうか

「潰しにかかるわ、援護よろしく」

『おう』

ミサイル48発を一斉に射出状態へ持つて行く

貧弱なクイックブーストでランドクラブの砲撃を避ける。いや、決して出力は弱い方では無いのだが、機体が機体なので

前方のノーマルは重スナイパーキャノンに吹っ飛ばされ、邪魔物がいなくなる

「しゃあ!」

発射

ドゴドゴドゴドゴドゴ!と、視界を覆い尽くす勢いでミサイルが飛び出し、ランドクラブへ向かっていく

数秒で到達、派手に爆炎を撒き散らした

『さすがに硬いな、弾はもつか?』

発射準備が整い次第再斉射しミサイルの雨を降らせる。それで駆動系を破壊したらしく、速度を落として落後

しばらくしてカニ足移動に切り換えたようだが、右前足1本が動かず、間もなく反転、逃げ出した

「このペースなら多分、なんとかなる」

ミサイル発射中に近付いていたノーマルをバズーカでぶち抜き、残り1機のランドクラブへ近付いていく。主砲の射界より内側に入ったのか、上空の戦闘機群をしきりに撃ちまくっていた

『セレブリティ・アッシュ、もうあまり持ちません、急いでください』

と、オペレーターから通信が入る。逃げに徹しているとはいえ、数で攻められては限界があるようだ

時間が無い

「できる限りノーマルを減らしておいて、AAで一気に壊す」

『おう』

いくら巨大だといっても上に乗ってアサルトアーマーかませば一撃で吹き飛ぶだろう、防御力重視のメリーゲートにとってはあまり必要の無い機構だったが、積んでおく価値はあったらしい

『無理！もう無理だ！！』

『撤退する前に100秒数える！！』

『それ風呂だろ！？』

ブースターを吹かして高度を上げていく。途端に周囲から集中砲火を喰らったが、大半は装甲で跳ね返し、危なそうなものにはメタト

ロンが砲弾を送り込んだ

数秒でランドクラブ上部へ到達、着地して、プライマルアーマーを暴走させる

ボゴン！と、装甲が破裂した

「2機目撃破！」

飛び降りて反対側に抜ける、セレブリティ・アッシュが頑張った成果か、敵数はかなり少ない。プライマルアーマー無しでもなんとかなりそうだ

『よしノルマ達成、さっそくで悪いが俺は弾切れだ』

残りのミサイルをぶちまけつつ突破し、回り込んで反対側へ。一端離れてPA回復を待つ

『え、ここで補給見送るほど余力無いわよ？』

デカブツがいなくなったためか戦闘機隊が活発化し、レーダーに味方ノーマルが映り出す。AFさえなければ後は通常戦闘なのだ、温存する意味が無い

『おれ死んじやいます……』

こんな辺境地のネクスト用基地にこんな大部隊が来るとは想定していなかったらしい、数は敵の半分しか無く、通常兵器、MT、防衛

施設合わせても勝てるかどうか怪しい。それだけならまだしも、反対側からアレが迫っているのだ、てんてこ舞いだろう

『……………はあ…』

オペレーターが溜息を漏らした

『補給中のアンフィスバエナを向かわせます、可及的速やかに帰ってください。その後メリーゲートはこちらに戻り、残りは不明AF迎撃へ』

背景で「えー……」とかいう陸の声が聞こえた、通信中だったらしい

『えゝっ！？またAF！？勝てる気しねえよ！！』

『つべこべ言わずにさっさと帰還！！』

『イエスマム！！！！！！』

『という訳ですので、A Fの前に一仕事お願いします』

「…ネクスト5機いて何故こんな苦戦を…？」

『そうですね、何故でしょう。本当にまったく』

『ひい！？』

やっぱり仲いいな

クレーンで降りてきたハイレーザーライフル『カノープス』を右手で掴み、左腕にムーンスライトを装備。

ミサイルは外し、グレネードを補給してもらう

AF用装備だが、ノーマルくらいならなんとかなるだろう

装着完了してシステムを再起動する。EN供給が一気に下がっていた

『いつもの調子で動くと死にますよ』

「わかってる」

ハンガー出口目指して歩き始め、同時にブースタチェック

右腕にグレネードの2倍重い銃が繋がっているためか重心バランスを崩していて歩き難い、戦闘に支障が出るレベルではないが

外まで出て、出撃前に向こうの様子が気になってきた。ネクスト2機いるといっても、囷と支援機である

「もしもし？」

『はい』

とにかく大丈夫そうだ、陸は陸でノーマル殲滅に集中する事にする
メインブースタを使って飛び上がり、基地施設を一気に越える。敵
部隊はかなり近付いてきていた

『地上戦は軽量機体の低安定性が露骨に出ます。僅かな出っ張りが
命取りになりますので、地形と衝突には注意するように』

「それはなんとかできるけど、PAは使っても大丈夫なのか？」

『従業員はすべて屋内に退避済みです、問題ありません』

基地外周の固定砲台が発砲を始めた。それ以外にもノーマルと通常
兵器が戦闘を続けているが、あまり芳しくなさそうだ

とりあえず最寄りの1機にカノープスを撃ち込んでみる

『メリーゲート収容、補給に入ります』

青いレーザーが銃口から飛び出し、目標の上半身を吹っ飛ばした。

そのまま2発、3発と発射しつつ着地、前方クイックブーストで加速
敵の機種を確認してもGAからローゼンタール製までまんべんなく
入り混じっている。やはりどう頑張っても所属不明

『遠距離にBFF製ノーマルを確認、スナイパーキャノン装備です』

「機数は？」

『10から15』

やや多い

『それと、敵の行動にある程度の規則性を見つけました。恐らくですが、それ全部AIです』

「…これ全部？」

『はい』

2機まとめて斬り捨てて残骸を確認する。確かに人が乗っている形跡は無かった

「自立兵器となると？」

カノープスを乱射し、追い撃ちでグレネードを起動、発射。6機ほどレーダーから消えた

『どこも同じような兵器は作っています。断定要素にはなりません』

近くの敵が全滅したのを確認してからオーバードブーストを吹かす

遠距離のBFFノーマルと距離を詰めるべく突撃を開始し

そこを狙撃された

「ッ！？」

衝撃、装甲がひしゃげる音

直後にオーバードブーストを切って横にぶっ飛び、小刻みにクイックブーストしながら後退

『サイレントアバランチと同型のです、どこから手に入れて来たのやら。被害は？』

「右腕部損傷、駆動モーターに異常発生、照準精度低下。P A 完全無視って……」

『対ネクスト用スナイパーキャノンです、B F F の象徴ですから』

基地施設内まで戻ってハンガーに隠れる。固定砲が撃ち合いを始めた

「斬り伏せるか……」

『いえ、損傷の増える行為は極力避けてください。不明A F も健在ですし、何よりあなたの機体フレームは補充が効きません』

そういえばここはG A だった、ライールフレームを作っているはずも無い

右腕はまだ修理可能な範疇だが、破損なんてしたら目も当てられない
となると取り得る戦法は、空中からのグレネード爆撃

『メリーゲートを待つのも手だと思いますが？』

「多分なんとかなる。防衛部隊が全滅しそうだし急がないと」

右腕損傷状態で空中戦となると、カノープスはただのお荷物

その場で手放して捨て、ハンドガンに持ち替えた

「後で回収しといてください」

『はい』

飛び上がって戦場に戻る

固定砲は破壊されていた

「やめろおおおおッ!!!!!!!!!!」

『いきなり何を』

右腕を動かす度にギリギリと音が鳴る。変形した装甲がどこかに当たっているのだろう、露骨に動きが悪かった

「あと何機!？」

『6機です。メリーゲートの補給が完了、すぐ向かわせます』

BFF社の象徴たるスナイパーキャノンを装備したノーマルをしまみ潰しに倒し始めて5分。相変わらずの大部隊だが、狙撃は散発的になってきた

『基地の放棄も視野に入れた方がいいですね……』

「え……いやまだ行けるけど……!!」

『ネクスト部隊は1機を除いてほぼ無傷ですが、基地内に相当数のノーマルが侵入してしまっています、これ以上の補給は望めません。それに…』

グレネードを撃って、落下しながらブレードを叩き付ける。残り4機

次の目標へ突撃しながら、視界の端に南西方向を映す

あつたのは炎、煙と、巨大な鉄の塊

『ネクスト4機がかりでも止まらないんです』

ガゴオン！と、基地外壁が踏み潰された

ステイグロを細長くしたような外見のAFはプライマルアーマーを完全に失い、装甲にいくつも大穴を開け炎上している、あれでは砂中潜行は不可能だろう。突撃を指示したのはAIか、人間か

『申し訳ありません、迎撃失敗しました』

『謝るべき事ではないかと』

1機、2機とブレードで破壊し、残り2機にはグレネードを叩き込む。これで狙撃部隊は全滅

残りの機数は…もう予測するのも面倒になってきた

『……上層部より指令が降りました。現時点を以って本基地は放棄、

残存戦力をまとめ東へ撤退せよ。とのことです』

『ようやく来たか、タイミング間違えすぎだろ』

生き残っていた味方ノーマル、戦闘車両、航空機が一齐に東を向いた。命令に従わない機もいくつかあったが、直後に撃破されるか、説得されて敗走に加わっていく

防衛部隊のいなくなった基地施設に敵がなだれ込み、手当たり次第に建物を破壊し始めた

「ッ……」

A Fの砲撃で司令塔が崩壊し、隣接していた管制塔を巻き込んで瓦礫と化す

ついさっきまで野球していた場所が敵機体で埋まっていく

『司令部、これより離脱します。ネクスト部隊は本輸送機の護衛及び殿軍を……っ！』

あっという間に基地が火の海となり、今度は滑走路

その中をのろのろと這い回る輸送機が1機、向こうとしては必死に急いでいるのだろうが、ネクストの視点から見たらどうしてもそう感じてしまう

「まず……！！」

機体に向け、全速力で救援に向かう。西側からもネクストが飛び込んできた、あれはセレブリティ・アッシュか

既に機体から火花を散らしていた、あれではもう1分もたないだろう。にも関わらず逃げようとしていない

それからアンビエント、ヴェーロノークと続き、狙撃専門のメタロンも突っ込んでくる、背中のキャノンはパージされていた

『セレブリティ・アッシュ、機体がもう限界！早急に離脱を！』

『逃げれるかこの状況で！！』

弾切れなのか右腕のブレードをやたらめったら振り回す。が、緊急用として付けていただけなのか、または内装まで手を入れる余裕が無かったのか、火器管制装置はブレードの使用を想定外としており、ブレードホーミング自動誘導機能が働いていない。本当にただ振っているだけだった

『逃げてどうすんだ！！何も残らねえ！！もうそういうのは嫌なんだよ！！』

アッシュに数秒遅れて滑走路に辿り着き、ノーマルを片端から斬り刻んでいく。右手のハンドガンも連射するが、命中してくれない

敵陣からメリーゲートのものらしきミサイルが撃ち上がった。目標はAF、いまさら撃破しようとは思わないだろう、牽制か

メイン武装が生き残っているのはメリーゲートだけのようだ。グレネードの残弾数を見たら赤い0が点灯していたし、メタトロンはパージ済み、ヴェーロノークも背中のミサイルしか使っていない。アンビエントに至ってはライフル1丁で応戦していた

『こっちは引き受けるから、早く離脱させて!』

「すみません頼みます!!」

輸送機は離陸位置に到達、急加速を始めた。アフターバーナーを吹かしているのはもう滑走路に気を使う必要が無いためか

『離陸完了しました!各自撤退に移ってください!』

いやまだ早い、高度も速度も足りていない

しかし滑走路を守る必要は無くなった、なら最優先すべきはアッシュの撤退。もう大破を通り越して動いているのが不思議なくらいだ

「づ……!!」

アンフィスバエナのプライマルアーマーが限界に達し、破裂。実弾レーザー問わず装甲を歪め始めた

戦闘しながら回復できるような状況でもない、回避重視に切り換える

「セレブリティアッシュ!!早く撤退してくれ!!」

『く……駄目だ……機体が言うこと聞かぬ……』

一際大きな発砲音がした

『あ………』

メイが声を漏らし、AFから砲弾が飛んでくる

既に輸送機は十分な速度を確保し、成層圏へ向け飛翔中。離脱した
とは言えないが、撃墜される事は無いだろう

任務は達成

『……ッ！』

アッシュの下半身が吹き飛んだ

支えを失ったコア部は地に落ち、それで完全に機能停止したのか、
通信機が沈黙する

『ち……！！』

スローモーションに感じられた一瞬が過ぎ、依然立ちはだかるのは
AFと無数の敵。距離適性の合わないライフルを乱射しながらメタ

トロンが近寄ってきた

『俺が運び出す！余計な所を削ぎ落としてくれ！他は援護！！』

両腕で持ち上げて運ぶ、という事だろう、そうするにはコアに付いたままの腕と頭が邪魔

「了解！！」

メタトロン後方へ着地する。転がっているアツシユの腕部にムーンライトを突き付け、出力を上げる。まず右腕が斬り離された

同じように左腕も落とし、それから頭。重量軽減のために装甲も削っていく

『もう弾がもちませんよ！？』

『あと30秒くらい何とかしてくれ！！』

メタトロンがライフルを手放してコアを抱え、そのまま輸送機の後を追っていった

ここに留まる理由が無くなる

「借ります！！」

落ちたスナイパーライフルを拾い上げると、右腕の残弾が5に回復した

アンビエント、ヴェーロノークもメタトロンの続き、残っているのは突出していたメリーゲートのみ。それをこの5発と壊れた右腕で逃がさなければならぬ

こんな時に万能性を発揮するのがトラスの全点豪華主義FCSだ、1000を超える距離でもどうにかロックオンしてくれる

「とにかく走って!!」

『あ…うん!』

囲まれたまま飛ぶのはまずい

悲鳴を上げる右腕を無理矢理動かして退却路上のノーマルを狙う

反対側でもミサイルが飛び交っている、自力で脱出できるならそれでいいのだが

『あぐ…!!』

AFの砲台が健在なのである

メリーゲートにとって致命傷となるハイレザーは破壊されていたが、無視できるものではない

限界まで照準調整しながらトリガーを引く。ノーマルの胸に穴が開いた

『つうー…!!』

砲弾の直撃に声を上げつつ、しかし速度は落とさない

出口が見えてきた所で第二射を外し、第三射も掠り当たりで終わった

埒があかない

「オーバードブーストは使えますか!？」

『5秒くらいなら!!』

十分だ

さっきまでの狙撃で攻撃から離れ、アンフィスバエナのPAは半分以上回復していた。これなら10機くらいまで吹き飛ばせる

向こうもやりたい事はわかっているんだろう、武器をバズーカに切り換え、正面に集中

「行きます!!」

残り2発を撃ち切ってライフルを捨て、プライマルアーマーに爆発命令を出す

緑の閃光がノーマルを包み込んだ

『ありがとう！！』

A A直前に飛び上がったメリーゲートがOBで離脱していく

「っしやあああ！！」

ライルにOBは必要無い、素で速いのだから

何の苦もなく離脱に成功

とりあえず、それで戦闘は終結した

H e w a s m e r e l y l o o k i n g w i t h o u t d o i n g

『いやはや、いつの時代も英雄は凄まじいな』

「……………」

『おかげで1週間ほど安静だよ。つか同じ目に遭った女の子がほぼ無傷ってのはどういう理屈だ？歳の差か？』

「……………」

終話ボタンを押して携帯電話を放り投げ、再びベッドに潜り込む

こちらら砂漠を延々と走り、給油（給コジマ？）まで受けながら東海岸まで辿り着いたばかりなのだ、しばらく寝かせて欲しい

「うおーい」

寝かせて欲しいというのに

「……………なんだよ……」

ガチャリとドアが開き、エノク部屋に入ってきたのはメイ。休んでいないのは同じだというのに元気そうだ、歳の差か

「フロイドさんから電話」

「何のために」

「セレブリティ・アッシュ全パーツ喪失事件について」

「なんで俺なんだよ本人かエンリケだろ普通」

「ダンくんまだ起きてないし、エンリケさん謹慎中」

ああ、そういえば王小龍^{ひょうりゅう}をぶん殴ったとか何とか

「……………オーケー、ロケオン装備の一撃必殺指向で頼んどいてくれ」

「そんな機体で…？」

しばし啞然とし、話にならないと思ったのかメイは出ていった。の
で、エノクは三度布団をかぶる

「エノク様、お電話です」

「何だ今日は電話デーかみんな俺が好きなのかホモかふざけんなコ
ラ」

「……………」

「う……………」

無表情で受話器を持つランク2である

そのまま何も言わずに受話器をテーブルに置き、ストレートで出口へ

「ホモではありません、BLです」

誰もあんたの趣味は聞いてないよ

「はぁ……………」

仕方なくベッドから降りる。放置プレイする訳にもいかないだろう

一度あくびを噛み殺し、受話器を耳へ

「どちら様？」

『ウィン・D・ファンションだ』

プッ

.....

ピピピピピピピ

『何故切った』

「いやすみません、脳の回転が追いつかなかったもので」

ウィン・D・ファンション

カラードのランク3、インテリオルユニオン所属で、『プラスメイデン』と俗称が付くほどのGAの天敵である。数年前に離反しているが、企業の都合によりお咎め無し、それどころか表彰された

機体はインテリオルのエネルギー兵器で構成された軽量型、完全な企業所属だが、一部の独立傭兵と中がいいとの噂あり

「今日は何の用事でしょうか？」

『敬語はいらん』

「さつさと眠りたいんだよ手短に済ませろメス猫」

『……いくらなんでも変わりすぎじゃないか？』

午前1時なんだから寝るくらい許して欲しい

少しくらい時差はあるだろうが、向こうも同じ時間帯のはず

『ミッションを依頼したい』

「どんな」

『定期的な身体検査の時期だ、エイプールの分を測定して欲しい』

「それはわざわざ深夜に電話しなければならない事なのか？敵に頼む事なのか？引き取る気は無いのか？」

『カレード名義でどうにか電話しているんだ、企業はだんまりを決め込んでいる。私ももうしばらく外に出ていない』

どうでもいい事とわかった途端に眠くなってきた、が、今ここで意識を断ち切ったらこの東海岸基地も消えて無くなる気がする。誰だって2日連続で撤退したくない

ので、目覚ましに体操を始める

『あれは生活リズムがいささか崩壊していてな、周りが管理してやらないと満足に食事を取らないんだ』

「へえー」

『そうなった理由は一時期の金欠にあつてだな。しかし要因は既に潰したし、もう下手に節約する意味は無いのだが』

「ほおー……」

『そんな訳で身体検査と、できれば栄養バランス調整もお願いしたい』

「……はあー……」

『もちろん報酬は払う、といっても内容を考えるとはした金になるが』

「zzzz……」

『おい、聞いているのか？』

「……はっ……ああ大丈夫だ、聞いてる聞いている」

『そうか、ならよろしく頼むぞ』

「おう、玄関の電球を取り替えればいいんだな？」

『………まあ……詳しい話はリリウムに話してある、後で聞いてくれ』

ぷつりと電話は切れた

「……………今度こそ……………」

受話器を放り出してベッドに倒れ込む、途端に襲い来る睡魔

……………おや、今まで何を話してたんだっけ？

まあいいか、確かしょうもない事だったはずだ

寝よう

『という訳だったのさ』

どういう訳だ

『エイプールが出てきた所までは覚えてるんだがその先がまったくわからん』

「…………どうしろと？」

『幸せにしてやってくれ』

「いやそれは絶対違う」

『とにかく俺は忙しい、本人に言えばわかるかもしれないから行ってみてくれ』

そんなこんなでドアの前に立つ陸である

一切の情報が無いミッションとは生まれて初めてだが、別に命がかかってる訳でもなし、気楽に行こう

まずノックを数回

そしてドアを開ける

「えいぷー…………」

姿は無かった

いや、違う、いた、ベッドで寝ている

しかただ寝ているかといえばそうではなく

リリウムにマウントポジションを取られ、半泣きになりながら衣服を剥かれていた

「失礼しました」

ぱたりとドアを閉める

「いや助けてーーーーっ!!!!!!!!!!!!!!」

叫び始めた

「ああそついえば『リリウム』って確か百合の学名……」

「そんな納得してないでーーーーっ!!!!!!!!!!!!!!」

「身体測定を行っていました」

無理矢理測らんでもいいだろうに

既に寸法測定、計量、内科検診等は終わらせたらしく、エイプールから降りたりリウムは首から聴診器を提げ巻尺を持っていた。全部自分でやったのか

「お腹を」

「あ、はい。…いや俺を検診する必要は無く」

着衣の乱れを直したエイプールが脱衣所から出て来た。目を伏せて脱力していたが、何も奪われてはいないらしい

「えと…どうかしましたか？」

「それが複雑で」

事の次第をエイプールに説明する

要約するとエノクがやらかしたというだけなのだが

「情報が少なすぎます…」

「だよねえ」

ウィン・Dから電話が来たという事でやや嬉しそうだったが、わか

っているのはそれだけなのだ。もしかしたら機密情報を入手してこ
いとか言われたのかもしれないし、はたまたお使いでも頼まれたの
かもしれない

「かといって絞り上げても思い出してくれなさそうだ…し…?」

リリウムがそわそわしてるような気がした

表情に変化は無く微動だにしていない、しかし雰囲気はどこかおか
しい

何か言いたそうな

「…何か知ってる?」

「はい」

即答

「リンクスの寿命はそう長くありません」

「まあそういう話だけど」

「ですので定期的にけ…ッ…!!」

「ん…?」

話し途中で何か思い出したのか、急に喋るのを止めた

その後数秒ほど小声で呟き、表情を直してから再度喋り始める

「食用ミールワームを生きたまま送ってくれ、と言っていました」

「え、そんなゲテモノが好物なん？」

「好きです、毎食ことの白米にミールワームの素揚げをかけないとウイン様は生きていけません」

インテリオルは米食なのか

「郊外に珍味を取り扱う店舗があります、今から買ってきてみましょう」

前の話と内容が噛み合っていない気がするが

疑問を抱く前にリリウムがドアを開けてくいと親指を外へ

「いや…あの人は虫嫌いだったような……むぐ」

エイプールの口が塞がれた

ミールワーム、韓国名『竹虫』

ゴミムシダマシという虫の幼虫で、色は黄色か乳白色。細長く、カブトムシの幼虫の小さい版といえそう見えなくもない。北米ではミールワームのキャンディー等商品化され”罰ゲーム用として”ポピュラーに親しまれている

アメが溶けきるまで虫の味

「まだこの辺はだいぶ活気があるね」

「人口密度がそのまま耐久性に直結しますから」

国家解体戦争前までは世界の中心だった場所だ、汚染の少ないオーストラリア沿岸に海上都市を作ったりしているが、まだ人が住めなくなるほど廃れてはいない

クレイドルに乗り損ねた人が集まって都市を形成し、空の人となる日を待ち続けている

「アレって今何機あるんだっけ？」

「5機21セットの105機ですが。しかしその話はやめましょう、辛気臭い事にしかりません」

街に繰り出してまで世界情勢の話はしたくないらしい、リリウムが言う

住民は仕事なのか数が少なく、ちらほら見える程度しかない。

パックス体制は崩壊したが、まだ満足な自由は与えられていないのか

ラインアークが大人気になる訳だ

「それで、目的の店は？」

「こちらです」

誘導に従って右に曲がる、少ない人通りがゼロになった

細い通りにあったのは、朽ち果てたビルがひとつ

「……潰れてるんじゃない？」

「問題ありません、昔からこうです」

昔から通ってたのか

「よくここでゲテモノを仕入れて王大人の夕食に仕込んでいました」

老人はいたわれよ

「ところで」

「ん？」

不意に、リリウムが今来た方向を指差す

そこには何も無く

「エイプール様が若い男性に連れていかれましたが」

気付いた時点で言え

「どこ行つたーーーーッ!!!!!!!!」

急いで大通りに戻る

すぐに見つかった、なんとか抵抗してその場に留まっていたようで、前方100メートル先にエイプールと知らない男。困り果てた表情で何か話していた

とにかく声をかけようと、走りながら思い

「早まるなー!!!!!!!!!!外見はかわいいけどその子はリンクス戦争に参加したさんじゅ

しばらくお待ちください

「ふはははは！その程度で我が歯茎に勝てると思つてか！！」

「く…何か手は無いのか！！」

「一条様！これを！」

「そ…それは…！！！」

もうしばらくお待ちください

「17歳です！」

どこかの宗教に改宗したようだ

「では改めて」

救急車で運ばれていく男に背を向け、さっきの廃ビルに戻る。稼働しているとは思えないのだが

しかし、入口に店名の書かれた看板を発見

珍味店『ランク1』

素晴らしいネーミングセンスだった

しかも『昆虫食』というもっともらしい店名をわざわざ二重線で消して書き直してある。何があった

「失礼します」

まずリリウムが店内へ

追って陸、エイプールと続いて入店。目に入っただのは糠の詰まった水槽と、土の詰まった水槽。中は絶対に見るなと本能が告げていた。それからカサカサと例のアレが這い回るような音。音源を探すと、奥の水槽でチャバネが50匹ほどうごめいていた。きっと奴らはコジマ汚染環境下でも生き残るんだろう

さらに奥

空の水槽を片付けている男がいた

「む……？ああ、悪いが店舗改装中で虫屋は廃業だ。今から処分するものでなければ勝手に持つてい……………」

その男はこちら、特にリリウムを一瞥し、顔を強張らせて奥に引込んだ

「……え…………？」

「……………」

当のリリウムはこれ以上無いくらい冷めた表情をしたまま固まっていた

手を振ってみる

へんじがない、ただのリリウムのようだ

「……知ってる人だった？」

「わ……私みたいな下っ端に聞かれても……」

そのまま数分

「へいらっしやい!!」

興味本位で水槽を覗こうとするエイプールを全力で止めていると、さっきの男が現れた

睡付き帽子、サングラス、大型マスクという完全装備だったが

「すいやせん店じまい中でして、処分品でよければ持ってってください」

「……」

「いやあやっぱりこういうもんは客が少なくてですねえ、インテリア家具店に作り替えようかと」

「……」

「時代ですかねえ、それとも場所が悪かったか……」

「……何故、生きているのですか……」

「は？言ってる意味がわかりやせんぞ」

リリウム回復。まず息を吐きながら首振りし、額に手を当てる。頭痛がしてきたようだ

「まあいいでしょう……あれだけ叩き潰せばネクストを動かす力は残っていないはずぞ」

「へえ、こりゃまた物騒なもんぞ」

男に背を向け、糠詰めの水槽をひとつ指差す。運べ、と言いたいらしい

「店長はどちらに？」

「空に上がりやした」

肩幅と同じサイズの水槽を担ぐと、変な臭いがした

吐きたい

「変な動きをしたら、わかっていますね」

「そんな突拍子もない商品は置きませんがね」

妙にヘコヘコしている男を残し、店外に出る

「後は帰るだけかな？」

「……」

「？」

リリウムは看板を見ている

『昆虫食』を消して『ランク1』となっている看板だが、おもむろにマジックペンを取り出し、さらに書き換え始めた

珍味店『水没王子』

「帰りましょう」

意味がわからない

「で？」

「……で？とは？」

いきなり部屋に入ってきたメイは開口一番でそう問い、メモリースティックを投げてよこした

主にG A内の情報伝達は社内ネットワークを介して行われるのだが、それではちょっと頑張れば基地内のすべてのPCから閲覧できてしまう。情報漏洩したくない場合はこうやって送られてくるのだ。使

う機会はあまり無いが、1本1テラバイトというおバカUSBメモリーである

「奪還作戦、いつやるの？」

「悪いが何も聞いてない」

「それに入ってる」

「なら見る前に聞くなよ」

焦っても決行時間は早まらないというのに

書類作成をやっていたエノクは一度作業ソフトを停止させ、PCにメモリースティックを挿し入れる。中にはワードファイル3つと写真数枚

「えー……」

「いつ？明日？」

「今読んでんだよ落ち着けて」

A4用紙換算で20枚ほどあるファイルを高速で流し読みし、添付された写真を眺める。放棄されたネクスト用基地の偵察写真のようだが

正直、何も写っていない

「まあ出発時間から言おう、5時間後だ」

「うん。……………え…?」

「今から5時間後」

画面いっぱい偵察写真を映してメイに見せる

航空写真らしきそれは破壊された施設以外何も写しておらず、拍子抜けする偵察員が容易に想像できた

「AFもノーマルもこっちの撤退直後に消えちまったらしいんだよ。なら待つてる必要もないし、生存者が残ってる可能性もある。後は…アンフィスバエナのパーツ群回収か?」

そういえば、グレネードとブレード以外をすべて失ったライールが格納庫の隅でいじけてたような

「そ。なら急いで準備しないと」

「いやあ?お前は必要無いと思うが?」

「何で」

「投入ネクストはアンフィスバエナとヴェーロノークの2機だけだ」と

「……何で」

「姿が見えないって事はこっちに向かつてる可能性もあるんだよ、防衛戦力も考えないといかん。それと、先行き不明瞭な任務に自社リンクスは使いたくないって所か？」

写真を閉じて、残った2つのワードファイルを開く。内容はあまり見ずにプリンターへ出力した

数秒で印刷終了し、数字の書かれたプリントが2枚

「どうせいくらでも補充きくでしょうに……」

「機体はな。とりあえず陸にこれ渡して5時間後出発と伝えてくれ」

プリントをメイに渡す

「何これ」

「撤退戦の報酬と、応急処置パーツの購入費用」

ほぼ同額だった

いや、僅かにマイナスが上回っていた

「エノク様、お電話で……? ……」

目に涙を貯めながら出ていったメイを一瞥してから、入れ代わりで
リリウム

「……………」

「……いや、泣かせたのは数字であって俺ではないからな……?」

「……………」

コトリと受話器が置かれる

そのまま無言で出口へ戻り、ゆっくりドアを閉め

「彼氏ができればいい」

何その呪い

「はぁ……………」

受話器を掴み耳に当てる

電話といえばエイプールの件はどうなったんだろっ、後で聞き出さ
ねば

「はいどちら様で……」

とかなんとかやって最終的にウィン・Dが出撃不許可を喰らった頃

「収支…マイナス…？」

「に…2000くらいなんだけどね…」

「増える…？」

「借金ってそういうもの…ですから…」

「武装喪失…ほぼすべて…？」

「ただ大丈夫！今から取り返しに行くから！」

壊されてる可能性もある訳だが

ちなみに2000コーム＝2000万円（非公式）

プリント2枚で絶望の縁に立たされた陸をメイとエイプールが必死で立ち直らせているという状況。5時間で回復できるかどうか

「たかがフレーム1セットですよ！1年あれば返せます！」

「そお…？」

「計算上は十分返せるね」

上層部が悪巧みしなければ、の話だが、ここは言わないが吉である

というか、この収支具合だと、もう陸を手放す気は無いかもしれない

それはそれで永久就職になるのでどっちでもいいと思うのだが

「完済まで機体もつかな……」

「GAとBFF製品なら提供できるから！」

「いやどっちもわりかし重いし……いであでであでであで！」

『重い』に反応、メイが頬をつねる

そりや最軽量（ソブレロ除く）の高機動特化型と比べたら重いに決まってるだろうに

「とにかく前向きに考えましょう、これから仕事、お金が入る。オケー？」

「ふ…ふおーけー…」

やけに氣迫がこもっていた

「なら支度しましょう」

「そっすね……じゃあ……」

「格納庫の場所確認」

「そこから！」

T h e r e i s n o v a l u e i n t h e r e v e r y t h i n

首輪付きの行動方針及び趣味は全国のプレイヤーの平均値を取っています。

某イラガレ民達の影響を多勢に含む

T h e r e i s n o v a l u e i n t h e r e v e r y t h i n

今日の武装

右腕	0 5 1 A N N R
左腕	0 5 1 A N N R
右背	0 4 9 A N S C
左背	0 4 7 A N R

B F F 信者ですいませんでした

「ダン君は起きた？」

『その話題について次触れたら出力最大で E C M かけ続けます』
起きてないらしい

『まもなく作戦圏内です、発艦してください』

A M S を起動して、今まで乗っていたギガベースから飛び降りる。
武装が重いためか、足が砂に沈み込んだ

通常ライフルとしては最大の射程を持つ大型ライフル2丁とスナイパーキャノン1門。今回はこれの中へ長距離射撃戦闘を行う

近接機動戦をコンセプトとするライルとは対極に位置する武装だったが、FCSさえ調整してあればそう悪いものではない

遠くからパカパカ撃つだけが狙撃ではないのだ

『アンフィスバエナ及びヴェーロノークは調査隊より先行して展開。障害があれば排除を』

時刻は午後10時を回り、砂漠を照らしているのは月明かりのみ。慰め程度のステルス性を得るためすべての照明は消灯されていた

あまり目視に頼るべきではないと思いレーダーを見るが、画面上に反応は無く

『先行します』

ヴェーロノークが前に出る

普段なら後方でミサイルを乱射してもらうのだが、近接適性を考えると前に出てもらう事になった

廃墟と化した基地へと近付いていく

『敵反応未だ無し、隠れている可能性もありますので、警戒を怠らないよう』

AFだった場合は下に潜っているだろうし、遮蔽物が多い場所ではレーダーも信頼性が低下する

ひとつだけ確実だとしたら、制空権は掌握している事が

『地中に音源反応無し、AFはいません』

あれだけ壊してもう戦闘可能に回復しているなら全世界の修理工は泣き崩れる

しばらく走ってヴェーロノークが基地内に到達し、死角の搜索にあたる

ざっと見では何も確認できなかったようだ

『調査隊、前進します』

ギガベースからヘリが飛び上がった。本来なら輸送機でも使うのだろうが、装輪車両で砂漠を横断する訳にもいかなかったらしい。AFの巨体を活かして色々と物を乗せている

「外周、異常無し。そっちは？」

『建造物内までは見れませんが、今の所は大丈夫です』

瓦礫の山は静まり返っていた

敵は存在していない。それは生存者がいない事も証明しているが

大部分は逃げ延びたにしろ、この損害は痛い、物理的にも、精神的にも

そうしている間にヘリが基地内に到着し、ハンガー付近に着陸する。
AFギガベースもアスファルトに横付けした

目的は残存機材とパーツの回収

一言で言うと、置き去りにされた機密情報をどうにかしたいのだ

『あ、ネクスト用ハンガーはだいぶ原型が残ってます。これなら武装も無事ですよ』

エイプールの声にほっと安堵をつく、危うく借金が2倍になる所だった

となると、後は戦闘中に放り捨てたカノープスの安否だが

『ん…？ソナーに反応が……』

「敵？」

『いえ…砂丘がなびいたような微小のものですので…』

風でも吹いているんだろうか

念のためもう一度周囲を確認し、基地内探索に参加するべくプライマルアーマーを消した

レーザー系射撃武器はあれしか無いのだ、失う訳には

少し探して、ハンガー横にK R S Wチックな銃が落ちているのを発見が、新品のライフルを代わりに捨てる訳にもいかず、そもそもこの重量級ハイレーザーを受け入れるペイロードは無い

『見つかりましたか？こちらで回収するので、マーキングだけしておいてください』

「あ、はい」

レーダー上に赤い点を残す、データリンクしたすべての機体からこれが見えているはずだ

用は済んだので警戒に戻る事にする

『……？……またノイズが……』

「え？」

バズン！と、緑の光がカノープスを粉碎した

「俺のかのぶーーーーーっ………………！！！！！！！！！！」

『え？え！？』

機体から発せられるアラートが敵接近を告げる

ハンガーに隠れていたのが3機と、砂に埋もれていたのが3機の計6機。うち1機が人気ナンバーワンレーザーを使用不可能に陥れた

『……これは…自立型ネクスト…？』

緑色に光る大型ブレード、アリーヤに似た外見。揺らいでいるのはP Aを展開しているからか

いかんせんA Iでネクストを動かすには限界があつたようで、機動性に関してはノーマルとさして変わらない、攻撃力と防御力を除けば

『コジマ粒子濃度上がってます！生身の人はすぐに退避を！』

飛び上がって距離を取り、自立型ネクストヘライフルをぶっ放す

だいぶ厚いP Aに阻まれた

『ようやく情報が手に入りました。これを所有している団体は、レイナードか、ORCAか、オメルサイエンスしか確認されていません』

ほぼ一択である、うち2つは壊滅しているのだ

「あれ無しでどうやってG Aと戦えっていうんだ……」

『あなた今G A所属でしょう』

確かに

『早急に殲滅してください、調査員が死にます』

「サー、ママ」

『なぜ軍隊風？』

「……………ロリババア……………」

ゴッ

「誰がだ」

「……っ……！！……テレジアの事言っただよお前はただのババアだ」

ガッ

「喜べ、依頼が入ったぞ」

「ああそうかい……」

喜ぶべき事では無いだろうに、そんなもん毎日入ってくるのだ

それを受けるかどうかは目の前でパソコンを操作するババアことセレン・ヘイズが独断で決めるのだが、ほとんど全部で増援が来たり情報錯誤が発生したりネクストがいたりするから始末が悪い

「依頼主は？」

「オーメルサイエンス。詳しくは技術部門の個人依頼だが、それは別にいいだろう」

「ほお、あの腹黒はなんて？」

「旧日本、有澤重工施設に侵入し、建造中のAFを破壊しろ、だと」
パソコンのモニターを動かしてこっちに見せてくる

出ていた地図は広島県の呉、軍艦建造で有名な場所だ。戦艦大和の
出身地で有名

「有澤あ？」

「何か文句でもあるか？」

「大ありだ、ついこないだまで必死こいて守ってた所じゃねーか」

「依頼主が変わった、それだけの事だ」

施設構造と目標位置を簡単に確認しつつ、機体の構築に移る

AF、建造中だろうと耐久性は高い、ある程度の攻撃力は持たなければならぬ

「武装はどうする？」

「パイルバンカー」

「わかった」

「いや、冗談だからな？」

『パーツ回収急いでください、パソコンもできる限り回収、ないし破壊を』

ヴェーロノークのガトリングから弾丸がぶちまけられ、同じ量の薬莢を排出していく。PAを展開できていないためか、攻撃より弾幕形成の意味合いが強い

しかし敵機体は関係無しにコジマ粒子を撒き散らしているのだ、生身の人間は屋内に逃げるか、味方の作業機械に相乗りさせて貰っていた。意味が無いと言われればそれまでである

急げと言われてもこれでは、敵を殲滅しない限り作業が完了できない

「なぜネクスト随伴のミッションで生身の人間が…？」

『作戦開始前に必要量の機材が確保できなかっただけです』

なんともずさんな準備だとエイプールは思う

人間すら使い捨てにするとは、GA上層部は鬼畜しかいないのか。
いくら世界最大の企業体といっても、調達量の限界はあるだろうに

『敵1機撃破！』

基地の外にいた自立型ネクストを、アンフィスバエナが蜂の巣にした

爆発する可能性がある胴体部は一切傷付けていない、ライフル、ブ
レード、駆動系だけを狙い撃ちして砂漠に墜落させている

「あの人は本当に若手なんですか？」

『経歴上は若手のはずです』

こっちは向かってくる連中にガトリングとミサイルを撃ちかけるだ
けで精一杯だ

有人機ならそれで追い払えるのだが、あいにくと相手はAIだった。
申し訳程度の回避運動しか取らず、PAが消し飛んでもそのまま突
っ込んでくる

結果、肉薄されるか壊されるかのチキンレースになり果てた訳で

足元では非戦闘員が動き回っているのだ、逃げる事は連中の死を意味、というか迂闊に動いたら踏み潰しそうだ

「ギガベースから支援射撃はできないんですか!？」

『発砲の衝撃で搭載物が破壊されてしまうので』

何のための武装要塞だ

プラットフォーム目的ならもつと安価なランドクラブでもよかっただろう、2機連れて来れば役割分担もできた

『ネクストACは搭乗者の限界に制限されていなければたった1機で国家軍隊を殲滅できる戦闘能力を持つ兵器です。そして上層部のお偉方は”データ上のスペック”で戦力を計算しますから、多少の補正はかけたとしてもネクスト2機いれば十分と考えたんでしょ』

まあ、この自体は想定外でしょうが、と付け足し、一旦通信が切れた数十秒で回復し、レーダー上に複数のビーコンを表示される

『行動方針を敵機殲滅に切り換えます、非戦闘員は一時退避、ヴェーロノークは指示目標まで到達してください。アンフィスバエナは支援射撃を』

100mほど先にあるハンガースペースだった

あそこはネクスト用で、あまり被害が無かった場所のはず

『メリーゲートの予備パーツを借用します、作業員から受け取ってください』

「了解！」

ガトリングを連射しつつ、ブースタは使わず脚で移動する

『バズーカ？PAに防がれると思うけど』

『それを剥がすのがあなたの役目です』

『あ、はい』

遠距離から飛んできた砲弾が自立ネクストを一瞬だけ停止させ、そこにガトリングが集中、2機目を撃墜した

残り4機

『それじゃ、狙撃機で近接戦といきますか』

『アンフィスバエナ、施設内に入るなら一応PA切って下さい』

『一応！？』

『ミッション開始、有澤の新型AFを破壊する』

機体が輸送機から切り離される

『いつも通りだ。好きにやって、適当な所で撤退しろ』

眼下には瀬戸内海が広がり、少し先に呉のドック群。防衛部隊は既に展開済みのようで、戦闘艦数隻とミサイル艇多数。地上でタンク型ノーマルがひしめいていた

普通の基地では少し考えられない戦力である。重要拠点である事を加味しても割に合わない

となるとよほど壊されたくないものがドック内で眠っているのか、有澤の要人でも来ているのか、考えなくとも前者だろうが

陣容を確認し終えてすぐに着水、ブースタを使って海上で滞空する

なんだかんだ言い合った結果、今日の機体はローゼンタール製『ラッセル』をベースにいくつかのパーツをアリーヤと置き換えた2種混成。有澤相手なら実弾防御重視のGAパーツが最適なのだが、ある程度の機動性を維持したかったためあえて不使用とした

それにまあ、グループ内の機体に襲われるのは納得いかないだろうし

「ドックはどれだ？」

『一番でかいやつだろう、それ以外にAFが入るとは思えん』

目標を定める

邪魔なのは戦闘艦と、周囲にいるノーマル数機。たいした事はない、2分で終わる

「行くぞおらあッ！！」

オーバードブースト点火、同時に左背中武器を展開

トーラス製大型粒子砲、いわゆる『コジマキャノン』という物だ

マッハで海上を走りつつ敵戦闘艦へ接近し、残った右腕武装、ドラゴンスレイヤーを横に振る。艦橋が吹っ飛んでいった

『ノーマルの射程内に到達、来るぞ』

オーバードブーストを切って機体を左右に回避させ、飛来するグレネード弾を避け、ついでにコジマキャノンチャージを開始

飛んでくる弾の数は半端ではない、そこらのリンクスなら数秒で水没しているだろう、だが当たってやる気にはなれなかった

そうしているうちにチャージが完了し、砲身が緑色のスパークを放ち始める。空いたコジマ供給を再びオーバードブーストに回し、目的のドックまで到着

「これは…戦艦か？」

壁の隙間から見たのは船だった

大昔は海軍国家だった土地だ、そういうものを作りたくなる気持ちもわかるが、今作っているこれを”戦艦”と呼べるかどうかは即決しかねる

どう見ても全長1kmはあるのだ

「ま、いいか、何でも」

隙間にコジマキャノンを押し込む

発射、爆発

ドックが緑の光で破裂し始めた

内部にコジマタンクでも置いてあったのか、今の一発では考えられない規模だ。プライマルアーマーが消し飛び、レーダーにまで影響が出る

『くそ…撃破確認不能だ、まだ撤退はするな』

「おう」

まあ、これでは仕方ないか

矛先を防衛部隊へ向けた

プライマルアーマーは展開できない

アサルトアーマーも使えない

致命的なまで攻撃力と防衛力が低下している

コジマの使えないネクストなんてこんなもんだ

『そこは人います!』

「ッ!」

加えてこれである

内部に作業員が隠れている建物。それと着地点が重なる度にブーストを再点火して浮き上がらなければならない。もうENアラートにも慣れてきた

「もうちょつとなんとかならないのかこれは…!」

『あと30秒でヴェーロノークが合流します、それまで耐えてください』

30秒あれば軽く死ねる自信があった

ライフル弾をしこたまぶち込んだ敵1機の頭部を狙撃砲で吹っ飛ば

す。センサーはそこに集積されているようで、あさつての方向へ飛んでいってロスト。残り3機

『重…い…!!』

ヴェーロノークのガトリング掃射が再開された

右腕で弾幕を形成しつつ、メリーゲートと同型のバズーカを左腕に装備し、照準をつけていく。あれは完全に積載量オーバーだ、ただの固定砲台と化している

しかし、火力だけは凄まじかった

ミサイルが飛んできたと思ったらそれを追い越してガトリング弾をプライマルアーマーに食わせ、遅れたミサイルにより完全に消失。そこにバズーカを送り込んで行動不能に追い込む

あっという間に1機が墜落した

「なんぞそれ…」

『これがGAです』

重量級の火力というか、一撃必殺志向の権化である

重量級といえばメリーゲートが該当するが、あれは内装にキャパシティを裂きすぎて武装にまで手が回っていない。どうせ遅いんだからブースタも切り詰めてしまえばいいのに

『どうですか、今は拡散バズーカがセール中ですが』

「いえ結構です」

常にマッハで飛んでいた陸である

『……まあいいです、あと5分もあれば終わるでしょう、手早くお願いします』

「了解」

といっても、あの弾幕に突っ込む勇氣は無い訳だが

「うーむ……」

木っ端微塵になったドック壁を越えてA Fに近付く

「どう見ても壊れてるよな」

戦艦型A Fの装甲は大きく亀裂が入り、艦橋もひしゃげている。あれだけのコジマ爆発を受けてなお原形を留めているとはさすが有澤しかし、少なくとも修理不可能までは追い込んだと思う

周囲に展開していた防衛部隊はほとんどすべてがマシンガンとブレードで破壊され、残りも撤退していった。今現在ここで動いているのはストレイドのみである

『確かにもう使用には耐えんだろっが…破壊の瞬間を見ていないと

「いうのは落ち着かないな」

ついでに他のドックも見て回ったが収穫無し。この基地はネクスト1機に壊滅させられた事になる

基地壊滅程度、こちらとしては日常茶飯事なのだが

『ついでだ、土台ごと破壊しろ』

「はいよ」

コジマキャノンのチャージを始める

目標はこの途方もない巨体を支えているドック基部。あそこを壊してしまえば修理はおろか船体の廃棄すら難しくなる

『そういえば...』

「あん？」

チャージ完了、視界いっぱい緑の放電

『音信不通だったインテリオルから依頼が来た。自社ネクストを温存する意味はわからんが、どうする？』

「内容により」

現在進行形でミッションをやっているというのにもう次の話だ。引っ張りだこなのは理解するが、終わって落ち着いてからでもいいだろう

ついでとばかりにコジマキャノンを発射してドックを完全な使用不能まで追い込む。さっきのような大爆発は起きず、想定したレベルに留まった

支えを失った船体はコンクリートへ向け横転し、艦首をへし折って崩壊

これでもう放置するか解体するしかなかった、はず

『それでいいだろう、帰還しろ。それで依頼内容だが……』

「つか、思ったんだが最近協働ミッション少くないか？」

『必要なのか？味方が』

「別段必要ではないけどよ、やっぱり楽なんだよな、気持ち的に」

『どうだかわからんぞ？モロに砲撃喰らって撤退したあと報酬の半分以上持つて行くランク1とかいるからな』

「いやあれとセレブリティアッシュは例外だろ」

『ふむ……では何だ？希望を言ってみろ』

「メリーゲート」

『……………理由は？』

「は？言わなくてもわかんたろあんな綺麗な声でバカでかい重量機が守ってくれんだぞ！？そんなことされたら誰だって撃墜確定のゾッコンLOVE（死語）だろうが！！」

『いきなりテンション上げて叫ぶなやかましい！というかあんな防御力だけの重たい女のどこがいいんだ！』

「重たくねえし！！重いのは機体だけだし！！きつとな！！きつとだけどな！！」

『機体が重ければそれで十分だ！あんな鈍速じゃのろのろ行進する羽目になるだろう！！』

「はああああ！？意味わかんねえ意味わかんねえ！！そののろのろ行進中の会話でどれだけ俺が癒されると思ってんだクソババ……………」

……」

黒板を引っ掻いたようなノイズがやってきた

「おま…………それは駄目だって…………」

『ふ…………ふふ…………いいだろう……。そこまで言うなら会わせてやる……………』

「え、マジ？」

くしゃみが出た

「……………」

基地の後始末が無事…ではないが成功したと聞き、一段落ついてダンの様子を確認。まだ起きていなかったためカーテンを開けようとして直後のくしゃみ

（同時刻、ストレイドがメリーゲート僚機希望宣言）

まったく我ながら派手にかましてしまったものだ、衝撃で起きてしまっているじゃないか

しかしなぜ自分は咄嗟に隠れてしまったんだろう

「……朝…？」

うん、確かに朝だ、窓越しに見える大西洋からのっそり太陽が昇り始めている。しかしその窓の横、ベッドの向こう側にメイがいるとはかけらも思わないだろう

本当どうしよう、何かそこにいてはいけない気がしたのだ。この基地まで撤退してきてから昨日の作戦開始までずっと看病していたのはベネッタ・コーエンであり、メイ・グリーンフィールドではないのだ。今だってちょっと様子見がてらカーテン開けに來ただけだし、そこの所勘違いされては困る

「いつつ……」

立ち上がるようとしているようだ、起きたばかりであまり無理しない方がいいのではなからうか、いや立ち去ってくれるなら万々歳だがとにかく見つかりたくない、ベッド前面と壁の隙間にG A所属なリンク18の緑髪が隠れてたら誰だって引く。……ん？緑髪？

頑張れば初音ミクのコスプレとかできるんじゃない？

「…あ……」

「お……」

ん？

うおう

やべえベネッタさん帰ってきた

「よ……よう」

「……」

出会い頭の挨拶は無視、中に入ってくるような足音もしない、部屋入口で立ち止まっているようだ

ダンが起きたのは嬉しいだろう、それは間違いない、素直に喜べな

いのはフクザツナオトメゴコロというやつか

「その…迷惑かけたな…昨日は…きのう？」

「…おととい」

「じゃあそれで…つか2日寝てたのか俺…」

正確には38時間だ、2日でも1日半でもない中途半端な所である

「……本当、あんな無意味な行動されると迷惑だから…」

「む…無意味…！？」

あーあ、言っちゃった

「味方全員の戦力価値はこっちで把握してるし、各個に判断しなくても指示出せるから…だからその…もう無理しないで……」

「っ……」

おおおおおおおおおおおおおおおお！？

なんだこれマジですごいGA始まってた！！室内は水打ったように静まり返り物音ひとつしませんがきつとドア付近のベネッタさんは赤面してる事でしょう。やったねダンくん！！このツンデレ女王はもう君のものだ！！いちやつくなりデートするなり何でもするがいー！！でもその前に部屋から出てってまじでお願い（実況「メイ・グリーンフィールド」）

あれ？

まずい

鼻がむずむずしてきた

（同時刻、セレンが打倒メリーゲート宣言）

「……………そうか……………そりゃ迷惑かけた……………」

「……………あと心配も……………」

ああもういい具合に事が進んでおりますね、それをくしゃみ1発で破壊してしまうのはあまりにも空気読めてないのかという、あーもう駄目だ出ますよ出しちゃいますよくしゃみ出ますよはいせーのっ

「ぶあつくし（イメージ上よろしくないのでカットさせて頂きました）」

a snake in one's bosom

「おはようございます」

「…うん…おはよう……」

太陽とほぼ入れ代わりで睡眠に入ったため、現在時刻は午後1時。多少の紆余曲折はあったものの作戦は成功し、報酬もしっかり受けた。 「好きなもの買え」とかいつて半分以上が借金返済に当てられなかった時点で違和感に気付くべきだったが、睡魔に襲われては頭も回らず

「寝起きで申し訳ないのですが、少しお使いを頼まれて頂けますか

「？」

「別に構わないけど……リリウムさん……」

「はい」

現状、陸の上に人

「なぜ馬乗り？」

「サービスです」

「何の……？」

「様々な人へのサービスです」

「……さいですか……」

「先日のゲテモノ食品店は覚えていますね」

「ああ、あの虫屋？」

「店員にこれを渡してきてください」

封筒を1通渡された

どこにでもあるような茶色い無装飾のものだ。宛名は書いておらず、差出人の名前も無し

「本来なら自ら行くべきなのですが、急に音声チャットの予定が入ってしまったので。あと生理的に」

生理的に嫌なのか

「一応ですが気をつけてください、引きずり込まれる可能性があります」

どこに

「それでは、報酬を用意して待っていますので」

「報酬つて？」

1、KIKU

2、OIGAMI

3、リリウム

「どれか1つを」

「……うん、慈善事業でいいや」

手紙を置いてくるだけなら報酬など必要ない。どうせ仕事が入るまで暇だし、いい暇潰しもないし

「他の誰かと一緒に行動してください、多人数の方が安全です」

「通り魔でもはやってるの？」

「いえ別に」

とにかく部屋から出よう、そう思ってドアを開ける

「おっと」

「ん？」

廊下に出てすぐエノクと遭遇した

「よう、外出るのか？」

「まあ一応」

「丁度いい、息抜きがてらついてってもい……」

「リリウムレーザー!!」

「貫通力ツツ!!!!」

ばすん、すとな

「これと行かせるくらいならリリウムが同行します」

「音声チャットは?」

「ぶつちぎれば済む事です」

「いやいやいやいや」

「司会進行がひげのじじいになるだけですなので問題ありません」

「前々から思ってたけど王嫌い?」

「……………それとこれとは話が別です」

このシンデレさんめ

「それで私な訳ね……まあ居心地悪かったからいいけど……」

「何かあつたんすか？」

「ふ…文句なら噂した奴に言えってんだばーか」

「？」

連れにメイを添え現在虫屋の入口前。外観は相変わらず崩壊寸前の

ビルだが、ドアと装飾は手加えられてインテリアっぽくなっている。この間魔改造された看板は取っ払われて新しい壁掛け看板

インテリア『宇宙への人類解放』

ひねってひねってひねった揚句よくわからない店名になっていた

「ほい」

「はい」

リリウムから預かっていた看板と取り替える

ゲテモノ『空気』

そしてドアを開けて店内に入る

まず壁沿いに木材がずらつと並んでいて、床一面に木屑と工具が散乱。奥では茶色い椅子が積み上げられ、臭くはないものの微妙にニスの香り

店……？

「間取りを教える」

「は？」

「間取り図があるなら出せ、それと築何年だ、欧米建築か、東洋建築か、それとも現代的か、どのような雰囲気希望している、実用的なものならホームセンターに行け、材質は何がいい、予算はいくらある、期間は、数は、塗料は。全部答えられないなら出直してこい」

何、この人

「あの…お手紙です…」

「ふん…？」

店内中央の作業場、椅子に座って椅子を作っていた男性へ封筒を差し出す

この間来た時に奇行を見せた店員だ、マスクもサングラスも無いがやけに態度がでかい。そこまで歳食ってはいなさそうだが若々しさも感じない

少なくともエノクよりは年上だろう

「ああ…この前の…。BFFのリンクスか？」

「BFF所属ではないっす」

「いいか、幼女はスク水着て海水浴してると伝えろいいな」

「さ…サー……」

スク水……？

「……ジェラルドを呼べ」

「この際オーメルサイエンスはボイコットしましょう」

「しかしGAとインテリオルだけで、しかも3対1というのは……」

「ではミセス・テレジアを」

「それだけは絶対にやめろ」

「……王大人」

「なんだその帰れとばかりのジェスチャーは」

「帰れとは言っていないせん、インカムの電源を切っていただければ満足です」

「実質同じだろう」

「もう本題入っていないか？」

- - -
- - -
- - -

「いくらP Aが厚いからといって過信するな、あんなもの削れれば
終わりだ、A A使用前提なら特にな」

「でもミサイルで飽和攻撃されたら全部避けるのは難しくないっす
か？」

「数で攻められても避け切る方法はある。いいか、まず自機がこれ
として……」

陸とインテリア店員（木くずまみれ）がライールについて語り合っ
ている

どうやらリンクス経験があるようで、新参者（自称）の陸にいろい
ろ戦法を吹き込んでいた。オーメルのテストパイロットでもやって
いたのかやけに詳しい

「うーん……」

どっかで見た顔のような気がする

とメイは思ったが、盛り上がっている所邪魔しても悪いし、おとなしく家具の見学に移る

見た所置いてあるのは椅子のみ、椅子専門店のようだ。完全発注制なのかすべての商品に発注者コードが付いていた

となるとかなり繁盛している事になるが

しかし、なぜ商品台に水槽を使ってるんだろう

「ライールで接近戦をやる奴は無能だ、あの瞬発力で効果的な打撃を与えられる訳無いだろう。そういう事はアリーヤの方が向いていてだな……」

「いや、普通にやってますけど」

「……何だと……？」

ああ、あのルーキーの異常性に気付き始めた

「おい、なんだこの男」

「…私に聞かれても」

とりあえず戦闘能力においてはベスト10に入ってしまうのではないか

先日の模擬戦ではメイに軍配が上がったが、あれは単純に相性の問題だった。装備変更されれば3分もたないだろう

「ブレードによる近接戦闘で得た戦果を言ってみろ」

「A F 1機撃退、ノーマル数十機。それ以外はちょっと数え切れないです」

「……なぜオーメルはこいつを手放した、クズか」

「いや一応独立傭兵なんで」

常識離れ、独立傭兵あたりで何か機嫌を損ねてしまったらしく、一度鼻を鳴らした後作業に戻ってしまった

最初から最後まで一人で作っているようだ、削り出したパーツを接着剤で組み、乾燥のため並べていく。ざっと見て組み立て済みなのは30から35ほど

なんだこの生産能力

「あ…そついえばお名前は？」

「ベルリオーズ」

どっかで聞いたような名前だ

「まあ好きなように呼べ、名前など意味を成さん」

「じゃあアーチャー」

「……………」

うまく接着し損ねた脚が椅子のど真ん中で固定された

「やる」

「あ、どうも」

粗大ゴミを素直に受け取るな

そして座ろうとするな

「所でお前はメリーゲートのリンクスか？」

「え…そうだけど」

唐突に言われた。ここに来てから名前も言っていないしリンクスで

ある事すら知らない筈なのだが

ここまで詳しいとなると、少し前まで企業の上の方に関わっていたんだろう。あるいはリンクスの上位か、それなら見覚えがあるのも理解できる

「首輪付きに気をつける」

「は？」

「とにかく隙を見せるな、移動中ずっと『メリーさんの羊』を歌い続けるような奴だからな」

「……………」

「というか途中から『羊』が『中身』になっていた」

「……………」

とりあえず首輪付きって誰だよ

「……………まあ、気をつけるわ」

「ああ」

ふと思う、とつくに用は済んでいるのに何故まだここにいるんだろう
陸がなついてしまったというのもあるだろうが

「帰りましょうか、スクランブル要員も必要だろうし」

「了解」

出口へと向かう、陸が椅子持って付いてきた。いや、粗大ゴミは置いていけよ

「ああ待て、返答を思い付いた」

そうしたら椅子作りに励んでいたベルリさん（仮）が立ち上がり、奥から封筒を取ってくる。会員勧誘の封筒に入っている一回り小さい封筒だった、宛先は『MSAC英会話教室』

それに何か殴り書きしたメモ用紙を突っ込んで陸に突き出す

「アンビエントのリンクスに渡せ」

受け取って、軽く話してから店を出た

「……」

時刻的には午後3時を回った所。いつ敵が来るかわからない現状、待機しているネクスト戦力は多い方がいい。だが今のままでも2機がアラートハンガー入りしているし、いざとなれば実質的ランク1のリリースもいる

つまり、ちょっと手紙の中身を盗み見るくらいの余裕はある訳で

「……………」

カサリ

『幼女を名乗るなよ、貴様』

「足りないなあ」

「足りないねえ」

ついでだから付け足しておこうとカフェテリアに足を延ばす

結局、傷が癒えて機体が直るまで今の今までかかってしまった

床に伏してる間に北米大陸でG A基地がぼっぴっぱーしたが、インテリオルは未だに沈黙。小数のA Fと通常軍は動いているものの、それでも防衛主体だ

そんな中での我がオーメルサイエンス、一言で表すと『空回り』

「G Aとインテリオルが協力して何か企んでいる、という情報があったので、もしやと思って調べてみたのですが」

「おいおい、水と油だぞ」

「ええ、まさにその通りでした」

つまり下手に探って何の収穫も無かったと

「しかしG Aとインテリオルは絶対に相容れないという事は再確認できました」

「ほう」

御託はいいから早く作戦内容を話せ、とりゲルは思う

基地内に点在する格納庫と駐機スペースでは、ネクスト4機を筆頭に量産型A F十数機、ノーマル数十機、通常兵器は数知れず

最終戦争でもする気なのか

「これでようやく互角です、もっとも無事に揚陸できればの話ですが」

「それで得る利益は何だよ」

「北米に居座るご老体を弱気にする事ができます」

青い髪の少女が青い塗装のアリーヤに乗り込み、軽くチェックした後外に出ていった

「東海岸最大の基地を攻撃し、G Aの影響力を低下させる。これが今回の目的です。必ずしも占領する必要は無いので、念頭に留めて

おいてください」

「戦術は？」

「揚陸艦で移動しながら説明します」

青いアリーヤを目で追っていると、羽付きのローゼンタール製ネクストと合流してバカでかい軍艦に搭載された

「さあ、貴方も早く乗り込んでください、現場での指揮を取るよう指示されています。私も同行しますが、先にやるべき事があるので」

「何すんだ？」

「少し、勝手な行動をした部所に説教を」

不穏な空気だ

幼女を名乗るなよ、貴様

貴様にはランドセルが似合いだ

150cm以下などあまり趣味じゃない

まるで小学生だ

戦場に迷い込んだのか老人の傀儡

頭が完全にいつてやがる！

認めん、認められるか、こんな年齢！

e t c
...

ぱりっ

リリウムの手によりメモ用紙が破られた

「まったく、少し見ない間に饒舌になったものです」

表情にはまったく出ていない、しかしかなり頭に來たらしい。計画通り、陸とメイは心中で快哉を叫んだ

「……とにかく、まだ不確定事項ですが、ここの平穩も長続きしないようです」

2つになった紙切れをさらに細かくしながら言う

平穩が無くなるという事はまた攻められるのだろうか。そういえばやけに基地全体が騒がしいが

「オーメルサイエンスの大部隊が旧メキシコ湾を北上しています」

「メキシコって、かなり近くない？」

「いつの間にかキューバに潜伏していたようで。本当にあの島は国家体制時からちくちくちく……」

紙切れが紙吹雪になっていく

「いつ頃に攻撃が来るの？ 場合によっては今すぐスクランブル入るけど」

「そうですね、最高権力者のひげじじいは安全地帯へ逃げてしまいましたし、場合によっては2人ほど……」

ん？

王小龍がいけないという事は、つまり目の前にいるちょっと頭の愉快な女の子がリンクス組の指揮官という事に？

「……………」

ああ、絶対何か考えてる。あの顔は良からぬ事を考えてる顔だ

リリウムはふと顔を逸らし、窓の外を見る。飛行場と整備スペースを除いた空間という空間に戦闘車両が配置され、対空ミサイルやらカノン砲やらトーチカがまんべんなく生やされていた

この規模の基地に上陸戦を仕掛けるとは、万里の長城に攻め入るようなものだ、こちらの2倍はなければ成功は難しい

技術と戦術でどうにかしてしまいそうなのがオーメルサイエンスの怖さだが

「一条様」

「は、はい？」

「機体の整備機能は整えておきましたので、防衛戦用の装備に切り換えておいてください。高機動での遠距離戦が気に入ったなら構いませんが」

「ああうん」

「それが終わったらアラートハンガーへ」

言って、リリウムは去っていった

「命だけは取られないようにね」

「いやさすがにそれは無いでしょ……」

「わっかんないよー借金背景に奴隷化されたり」

「否定できない所がなんとも……」

「それからメイ様」

「ひ!？」

別通路から回り込んでメイの後ろにリリウム

「メモ用紙の筆跡が3種類だった件について話があります」

死亡確認

I s t h i s a l i l y ?

「あえて言おう！リリウムであると！！」

「……………」

「……………」

恐らく自身の限界音量で叫んだのだろう、喉を痛めて小さく咳込んでいる

ドアを開けた瞬間だ。床にカーペットを敷いて、東洋式のめっちゃ低いテーブルを中央に配置。そのテーブルに乗って仮面ライダーよろしく片手を突き上げるリリウムがドヤ顔のニヤ顔で出迎えてくれた

初めて見た笑顔が、ニヤニヤ

「こちらへ」

「あ、はい」

その後は普通の対応をされた

靴を脱いでカーペットに上がりなぜか正座。座ったらすぐ湯呑みを出され、熱い緑茶が注がれる

「はい」

「うん。……うん？」

何か落ち着いてしまった。陸はアラートハンガー要員でいざとなれば湯呑み投げ飛ばしてでも機体へ直行しなければならぬのだが。過度のリラックスはまずい気もする

「そろそろ一人に決めねばなりません、ハーレムエンドは存在し得ないのです」

「君は何を言っているんだ」

「チームで出撃したりお使いしたりと各個人のイベントは消化出来たでしょう」

「え…まあそう言われればまんべんなくだった気もするけど」

「はい、それでこそ裏で手を回した甲斐があったというものです」

「黒幕はあんなにか」

「リンクスのアサインだけです、多少の違いはあれ結果は変わりません。丁度いい理由もありましたし」

「そっすか……」

「一条様、恋愛経験は」

「5歳くらいの子に出合い頭プロポーズされたことがあります」

「なるほど、ロリコン属性あり」

「いやオーケーしたとは1ミリも言っていない」

「そうになると条件に合うのは輝美かりりウムとなりますが」

「話進めないで」

「今現在、少なからず好意を持っている人物を上げてみましょう」
等々暴走気味のりりウムに付き合うこと十数分。緑茶が2杯目になる頃にメモ用紙が登場し、シャーペンで文字が書かれ始める

人名が3、綺麗な字で明記されてメモ用紙が陸のもとへ

・エノク

・王小龍

・ローディー

ひどい三択を見た

「……会ったことないのが2人ほどいるんですが」

「最近就業時間中はしょっちゅうあなたのこと喋ってますから（主に借金をどう延命するかで）、初対面アタックでも可能性はあります」

可能性があっちゃ困る

「その道のプロとしては若者が老害を駆逐していく感じも……」

「だが断わる」

「では基本を取って総受けというのは」

「よし断わる」

ボケ続けるリリウムに引き攣った笑みで返していると、メモ用紙をゴミ箱に捨てた当人は急に改まり出した

真顔になったので、つられてこっちも真顔になる

「もし、攻略ルートの意味合いでリリウム方向に來たいのであれば」

「え……」

「まずドアの鍵を閉めてください」

「……………」

「冗談です」

「冗……談じゃなかったら困るわ……」

「本当に？」

「え」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「男の子ですもん」

「正直でよろしい」

更に妄言に付き合い続け気付けば30分経過。茶菓子に何かひよこめいた焼菓子が出てきたため、会話に使用していた労力の一部を食に費やす。このご時世ではまず考えられない甘さと上品さだった、さすがランク2

「武装は何を？」

「ん……とりあえず標準装備にしといたけど」

オーメルサイエンスの大部隊が迫っていると言うが、連中は何においてもバランスよく揃えてきてしまう、それもハイレベルで。これといった弱点が無いのであれば一番慣れた戦法で挑むのが妥当だろう

一桁ランクでも出てこない限りは負ける理由もない

「正直に言つと劣勢です」

「そう？」

「暗号解読で得た情報によると参加ネクストは4機、うち2機はオーメルサイエンスの新参と確定しています。またローゼンタールのノブリス・オブリージュが数日前から消息を絶っていますので、これも間違いないでしょう」

「おお」

確か、ランク5だったか。ローゼンタール最高のネクスト、破壊天使と称されることもある。リンクスは堅物と聞いたが

「あと1機は？」

「え」

「ネクスト4機で、今のところ3機だから」

「ああ、虎柄はどうにでもなるので気にしないでください。AFと当てれば十分です」

「……」

憐れカニス

彼とて死ぬ気でやればAFの1機や2機は撃破できるだろう、しかしそれをやらないのが独立傭兵というものだ、生存を第一に行動する事ができる

「ノブリス・オブリージュとGAの相性は最悪の部類に入ります。物理防御しか考えていない以上、あのレーザー6門斉射は即死級ですから。幸い連射が効かないため回避できれば勝機は十分ありますが」

「うん」

「ある程度の速力があり、臨機応変に対応でき、GA製ではないネクスト戦力」

「うん？」

「条件に合致しているのは今ここにいる2名です」

「うー……ん」

「きつと勝てます」

「いやランク5とかさすがに……てか今押し付けようとしてない？」

「アリーナならまだしも、多対多の戦場でそんな数字は何の役にも立ちません。新参がランカーを追い詰めるなんて事例は過去何度もあります」

「ああやっぱり押し付けられてるんですね俺」

「リリウムは西側のロリとしてとある人物に新人いじめを課さなくてはなりません」

「……ほどほどにね」

じっくり話して確信したが、この少女に常識は通用しない、『常識を知らない』のではなく『常識にケンカを売っている』のだ。こっちの予想を意図的に外してくる、そんなのからどうやって会話の主導権を奪えよう

今だってノブリスの件をはぐらかされた

「そろそろですね、立ち上がってみてください」

「え？」

正座を崩して立ち上が

れない

「いつつ……!」

そういえば座ってから1時間ほど経過していた。陸は特に茶道とかやってる訳でもなく、長時間の正座は血流の停滞を促す

そしてこの足の惨状

「それが、『痺れ』です」

そんなこたわかつとる

「そしたらこれをどうするかっつー話だが」

「……」

「……………」

改めて見るとひどい惨状である、胴体しか残っていないのだ

吹っ飛ばされた脚部はもちろん、運搬するため切除した頭と腕も喪失。コア部も無理な削ぎ落としてアレな感じであり、現在のセレブリティアッシュで修理無し再利用可能なのはブースター各種とジェネレーターとFCSのみ

「ここ最近、うちのホームベースでネクスト大破しすぎじゃねえ？もう3機目だぞ」

「驚く事ではないんじゃない？原因はつきりしてるし」

「それはそうだが…まあいい」

ハンガー天井から吊り下げられたBFF製コアを見る、補填すべき

パーツは頭部、腕部、脚部と武装1セット

「このセレブリティアッシュ……いや……略してブリでいいな、前と同じ構成でいいのか？」

「回遊性海水魚！？どんな略し方だよ！！」

「コアしか無いから真ん中よりちよつと上取ってブリって事で」

「ああ……名前まで置いてきちまったんだな……」

作業台に乗せたノートパソコンでパーツ一覧を出すエノク、うなだれるダン、呆れるベネッタ。搭乗員待機室から陸とリリウムが顔を出し、メイはそれに手を振り出す。暇なのかエイプールもそこらをぶらついていた

「で、どうなんだ？別に企業所属って訳じゃないから最終決定権はお前さんにあるが」

「……できるなら……前と同じ方が……」

「あんな意味不明なアセンブルを？」

「う……」

確認する

まずブレードを装備していた、それを支えるのは重火器の使用を想

定したG A腕部SS - A Lだ、どう誤解してもブレード装備するのは有り得ない。ついでに言うど火器管制、FCSもブレード対応ではない、『近接戦機能をオミットして他を高水準でまとめました』と取説に書いてあるくらいブレードに向いていない

それからレーザー、普通は標準装備のものとFCSの処理で十分なのだが、奇襲を恐れたかどうかは知らないがなぜか装備、中距離戦において重要な背部のハードポイントを潰している。狙撃する訳でもないだろうに

それ以外の武器を見ても、ノーマルAC用の標準ライフルを拡大解釈したような何の捻りも面白みもないライフルと、地味に単発発射して4つに分裂する圧倒的火力不足なミサイルのみ。通常兵器相手に引き撃ちするならなかなか良い装備だが、確実に言える事は、地上最強を誇るネクストに施すべき装備では絶対はないという事

「そうだな…いつか変えないとは思ってたんだ……」

「金はあるのか？借金の準備はできてるぞ。ただ利子は付くだろうが」

「…いや、ある」

「え」

「実はある、いつかこうなるだろうと少しずつ貯めてたのが」

「おお、普段（楽観視的な意味で）大口叩いてたりするが実際はク

ソ真面目にやってたんだな」

「ぐっ……そうさ！普段（自分鼓舞的な意味で）大口叩いてるが実際やってるのはすごい地味な作業だ！！どんな状況であれ自分のキヤパシティ超えた借り入れなんてしちゃいけない！！この世の中相手が善意で金貸すとか有り得ねえ！！自分の機体は自分で直せ！！借金なんてクソくらえ！！」

「や……あの……そこらへんにしといてあげて、後ろで1人死にかけてるから」

振り返る

一条陸（状態：借金まみれ）が絶望していた

「あのね……それはとても正論だと思うんだ……でも世の中にはね……寝てる間に借金作られてる人もいるんだよ……？」

「え、あ、うん、そうか、よくわかんねえけどすまん」

倒れ伏す陸を起き上がらせて、本題に戻るべく再度振り返る

そうしたら今度はエイプル、とても輝いた目でダンを見上げていた

「感動しました！」

「なんですと？」

「今ならわかります！あれは人間のすべきものではありません！」

「えいぷーさん……空気……」

後ろで人の倒れる音がした

「あの、私のパーツってまだありましたよね？」

「ん？それならこないだのパーツ回収と一緒に持ってきたが……え、まさかアレ？」

「はい！」

「あの腕部を？譲渡？」

「はい！」

聞いたエノクは沈黙。少しの間何かを考え、それは無いわとばかりに首を振った

「なんか貰えるのか？」

譲渡という単語が聞こえたが

「あー！本人はいいって言ってるんだが。ファンキーすぎる武器腕とか翼の折れた内藤ホライズンとか……」

と、言い淀みつつ格納庫の奥を指差す

予備パーツや消耗品や陸の私物が集められているようで、ジャンク山とコンテナタワーが乱立、最もよく使うであろうアンフィスバエナが隣で沈黙している

その一番奥、白基調で塗装された板、いやあの薄い中にミサイルランチャーが収納しているらしい、武器一体型の腕部で、一応は修理されている模様

「オートシーカーミサイル」

「……」

「独立傭兵なら補給線確保もわりかし簡単だろ」

「……ごめんなさい」

「あつ……」

タダで貰えるといっても、あんなド級の金食い虫を受け入れるいわれもない。ロックを必要としない点には惹かれるが、高機能な高価なものだ

「背部搭載の方なら普通に使えるんじゃないか？」

「ああ、それならまあ」

「あとポラリスとかマクスウェルとか……」

「燃費追求する気はないんだよ」

「ちょっと重すぎるな…うん」

「う……」

重量級の機体でレーザー兵器を乱射したり、持続力重視の軽量機で張り付きするならそのブースターとジェネレーターでいいのだが、求めているのは中量機の射撃戦で、内装にペイロード割いていては火力不足が起きてしまう。そもそも内装はすべて無事な訳だし

「お下がり貰えるならその方がいいな。少し探してみよう」

「あ、頼みます」

エノクがパソコンの操作に入る

「いります?」

「瞬発力無いとかマジ勘弁……」

後ろで陸にも断られていた

TV『本日未明、グレートブリテン島のロンドン空港でネクストA
Cの不法持ち込みが発覚しました。大西洋横断のため燃料補給を行
っていた輸送機の乗組員2名の書類詐称からリンクスとそのオペレ
ーターである事が発覚、積み荷確認を行っている間に作業員を振り
落としてつつ飛び去ったとのことです』

水没「……………」

TV『リンクスの外見やエンブレム等から当機は『ストレイド』と特定されており、現在カラードが罰則を検討しています』

水没「……………！」

ガチャッ

王「おい」

ボタン

水没「ふう……………」

TV『なお書類詐称発覚のきっかけとなった空港員は「どう見ても20代には見えなかった」と言っており……………」』

「脚部は前のブリと同じものが手に入りそうだ、中古だけだな」

「え、その略称ってもう固定なのか？」

なぜ独立傭兵の機体がG A社専用のハンガーに入っているかといえ
ば単純に言って前回の活躍である

必死に輸送機を守ろうとする姿を見て偉いさんの1人が若干の感動
を覚えたらしく、機体が直るまでは面倒見てもらえることになって
いた。ただ戦力として計算されるには至らず、その後の契約は結ば
れていない

「コアは……時間かかるが修理しよう。ソフトウェア調整とかも考
えたら大差ないだろ」

場を仕切っているエノクが言う。今までに決まったのは背部兵装の
A SミサイルとB F F脚部0 4 7 A N、それとダン本人が「レーダ
ーとフレアは絶対に必要」とのたまっているため、リリウムに頼ん
でジャンクパーツを収集中、そのせいでロイとウィン・Dがゴミ漁
りさせられた事を誰も知らない

「ねえ」

「ん？」

エノクの肩をつついて振り向かせる

「お金あるんなら新品の方がいいんじゃない？ガラクタかき集める
んじゃ信頼性低いでしょ」

「企業の純正品集めて企業が修理するんだ、そこまで下がらんよ。それに節約できるならその方がいい」

「いやでも……」

「まあちよつと落ち着け」

両手を肩まで上げたエノクが前進してきたのでメイは後退、集団から離れていく。小声で話すなら誰にも聞こえないくらい離れてから一言

「中古の格安品かき集めてぎりぎり1機組めるレベルなんだよ」

「……………え、何？」

「あいつのミッション毎報酬を考えたらわかる、あれはリンクスになっってからずっと貯め続けてきた金だ。今ここで使っているものは絶対に無い、わかったな」

「お…オーケー……」

本題に戻る

「フロイド・シャノンローゼンタールにコネがあったな」

「ちょ、外部の人間に迷惑かける気？」

「ブリの設計及びアフターケアはあいつがやってんだから十分当事者だろ。これとは別で修理案持ってきたが、あれは少し高難度すぎる」

「……まあ、そういう事なら口出しする余地はないけど。私がブリを操縦する訳じゃないし」

「ああ変な略称が定着していくううう……」

頭を抱えるダン

そんな状況で溜息つきっぱなしだったベネッタが一際大きいのを吐き出してから反転、予備部品の山へ歩いていった

予備といってもネジからプロセスユニットまで様々な種類がある。現場の人間にとってはそれが一番いい並び方なのだろうが、はたから見ればただのごちゃまぜだ、目当てのものが見つかるまで苦労するだろう

「残りのフレームはフロイドに任せよう、何が来るかはまだわからない」

「じゃあ、後は武器か」

「何がいい？」

「ライフルと……」

「ブレード以外な」

「え」

「お前、腕にずーっとあれぶら下げてて疑問に思わなかったのか？」

「ま……まあ普段使う事は無いけどよ……」

「火力不足なんだよ、せめて両腕ダブルトリガーでできる武装で行こうぜ」

「そ……うだ……な……」

「よしわかった、しばらく休んでろ」

「え？」

ダンに向かって大きいジェスチャーでゴーホームしたエノクはノートパソコンを閉じ、メイに向かってきた。とても逃げたい気分になったが、そうしたらこの話が長引きそうなので踏み止まる

「今お前に求めているものは色仕掛けだ」

「はあ！？」

「メリーゲートのライフル貰うぞ」

「はああ！？」

「試供品で新型ライフル貰ってるから代わりに付けるけど壊さないようにな」

「まとめて話すな!!」

ガッ

思わずチョップが入る

「……これを男がやったらセクハラになる時代なんだよなあ……」

「で？」

「あそこに大量のパーツがある」

「まあちよつと引くくらいあるわね」

アンフィスバエナとコンテナタワー。安い映画みたいなノリである

あの先天的才能の持ち主でもフレームまでいじる気はないらしい、あそこにあるのは兵装のみだ

あの量がすべて兵装

「言いたい事はわかるな？」

「貰ってこいと？」

「そう」

「いや…あの子も（一応）借金持ちだし、モノの値段考えるとさすがに……」

「大丈夫だ、大丈夫、性欲に勝てる男なんて存在しない」

グーで殴った

以下メイ・グリーンフィールドによる三文芝居をお楽しみください

「こないだ買った51ANが2丁もいらなんだけど」

「近接適性と重量に難があるんじゃないかと……」

「じゃあ、ちょっと使い古しだけどマーヴ」

「両極端ですね……」

ダンに譲れる兵装についてベネッタへ相談してみる。なぜ本人じゃないかというと、彼は何にでも頷く気がするからである

ベネッタはCPUユニットを中心に電波受信装置やら送信装置やらを収集している。CPUといってもパソコン1台組むくらいの勢いだ

「近距離対策にショットガンとか」

「右と左を使い分ける余裕があると思います?」

「……やっぱりライフルか」

「ええ」

となるともう2択くらいしか残っていない訳で

「や…やあ」

「ん？」

メイがやってきた

「元気？」

「それなりには」

なぜ今それを聞くのかと思ったが、何か意図がありそうなので黙っておく

話を中断されたベネッタはいい頃合いとばかりにどっか行ってしまう、残ったのは陸とメイ

「何やってたの？（陸が）」

「え。FCSに割り込んでセミオート操作できる機能をなんちゃらかんちゃら（ベネッタが）」

「へ…へー……。すごいねそういう事できるとか」

「なんか幼少時代からIT系技術…いや情報処理だったっけ？」

「若さと実力が比例してないじゃない、どんだけ詰め込みしたの」

「なんか本人が言うには興味があればなんだって云々」

「え？本人？」

「え？」

「オーメル部隊の到着はいつ頃になるんです？」

「少なくとも1週間以内には。正確なタイミングは攻める側頼みだからよくわからない」

「勝率は？」

「最終的にネクスト戦次第なのよね」

周辺で展開していた部隊がこの東海岸基地に集結しつつあり、いよいよもって総力戦の様相を伴ってきた。戦争が激しくなるという事はどちらかの陣営が苦しくなってきたという事だが

この場合、地球の限界を示すような気がする

「……………破壊天使か……………」

「え、来るの？」

「さっきリリウムさんが言っていました」

ついでに押し付けられた気もするが、忘れた事にしよう、レーザーで消し飛ぶのは嫌だ

「……………そしたらやっぱ、味方は多い方がいい…よね？」

「まあ」

今のままでもネクスト5機、敵と合わせたら総計9機が入り乱れることになる。勝っても負けても向こう10年は人の済めない土地となりそうだ

そのためには基地のかなり前でネクスト戦力を撃退する必要がある

「だからさ……………え……………」

「うん？」

「できればいいんだけど……………あんまり使わないようない……………」

「うん」

「私をーお嫁にー」

「うん…?」

「ちょ!!!」

背中に張り付いていたリリウムを引きはがした

「なにおいきなり人の声真似して!」

「そういう雰囲気だったのでサポートしてあげようと」

「違うから!そういうのいらないから!」

手をぶんぶん振ってリリウムを離れさせようとしている。平手にしたのを0度から-90度に曲げるその動作はいわゆる『しっしっ』
だろうが、往復が早過ぎて何やりたいのかわからない。何をそんなに動転しているのか

「……一条様」

「はい?」

「GAバズーカと何かを交換というのは」

メイがリリウム引っ張ってどっか行ってしまった

「……………」

帰ってこない

仕方ないのでさっきの話を再開するべくベネツタのもとへ。ケース無しの状態でパソコンを組み立て、それに何かを書き込んでいた。オブジェクト指向で開発された高水準言語のようだが、知識のない陸には英語の羅列にしか見えない

「ラビアタとかどうです？」

「それをアレに持たせるなんてもったいない」

「ちょっと重いからさ、使いにくいんだよね」

「重いつて…あなたの機体の積載容量がどれだけ余ってるか知ってます？」

「ていうかぶっちゃけ何でもいいから貰ってって」

「……………これだから天才は…」

呆れられた

「へーいそこのお兄さん」

真後ろからメイの声

直後、二の腕が挟まった

「!？」

何に挟まったと聞かれたらそれはもうGAバズーカとしか言いようがない、メイの両腕が陸の左腕を抱え込んでものごつつ豊かな起伏を以下略

要約

胸押し付けられた

「な…なんでしょうかお姉さん……」

「ちよちよつとあつちでいいいい事話そうかあつち」

なんて言われつつずるずる引つ張られていく。なんでいきなりこんな事になってるのかよくわからな…いやリリウムが何か吹き込んだんだきつと、とりあえずひとつだけ確かなのは、人知を超えた柔らかさだということ

そりや全世界の野郎どもが追い求める訳だとひそかに納得

「お願いがあります」

「は、はい」

「今さ、誰かに譲ったりしたいパーツとか…ある？」

「ああうん…今ベネさんと話してダンくんにあげようかと思ってたのが……」

「じゃあさそれ……………あれ…?」

「え?」

「さっきから話し合ってるのそのこと?」

「まあ」

「……………」

茫然としている

「お願いって?」

「え、あ、うん、それはもういいや、強いて言えば夕食行こうかとか」

「あ、そうですね」

気付けば夕日が沈みかけていた。今日は密度が濃かったので体感時間は2時間程度だ、しかし得るものは一切無かったと断言したい。明日からは防衛戦訓練が始まると思うため、遊べたといえれば満足できるが

メイと共にハンガーを出る寸前

うずくまって痙攣するリリウムが見えた

Genius of the first day

『パーツが間に合いませんでした』

昨日言われた通りの場所と時間に集合したら、しょっぱなにセレブリティアツシユの訓練不参加を告げられた。リンクスは全快しているが、腕と頭が不在だという。よって今砂漠に集合しているのはアンフィスバエナ、メリーゲート、ヴェーロノークの3機のみで、2対2をやるにも1機足りない

ちなみにセレブリティアツシユはオーメル部隊到着までの訓練期間はGAに留まる事が確定しているが、その後の本番に参加する予定は無い。理由は単純だ、戦力として考えられていない

それでも稽古つけてやるのが上層部の僅かに残った良心なのである

「じゃあどうする？三つ巴？」

「そんな乱戦を訓練する意味は何です？」

「いや、必要になるような気がして」

とりあえずまだ訓練開始は遠そうなので砂漠の真ん中に3機集まる。
特にメリーゲートの新型ライフルが気になっていたので思い切り接近

G A製とは思えないくらいシャープな形をしている。B F Fの影響を受けているのは明白だが、それでも弾倉や機関部などの配置は既存の技術のみで作ったらしく、今回はこれで様子見、みたいな感じである

それ以外のわかりやすい変更点といえば、アンフィスバエナ左手の063ANRとタメ張れる全長になるまで銃身が切り詰められている点

『今メタトロンが出ましたから2対2でいきます、5分後には到着するので仮想敵役は位置について下さい』

指示されたのでアンフィスバエナを海方向に向かわせる、ヴェーロノークがついて来た

仮想敵はできる限り敵の戦闘方法に似せて味方の経験値を上げる必要がある。そうするとライフルフレーム使用の陸は攻撃側に回るのが

が当たり前であり、逆に防御側はG Aグループ優先で揃える必要があった

当初の予定では

攻撃

アンフィスバエナ

ヴェーロノーク

セレブリティアッシュ

防御

アンビエント

メリーゲート

2分遅れでメタトロン

の予定だったが、まずリリウムがカラードに呼び出されて欠席、先程の通りダンも機体が未完成のため脱落。なし崩し的にこの組み合わせとなった

『そういえばカラードが全業務を再開するって聞きましたが』

「そうなの？」

リリウムの欠席理由で唐突に思い出したようだ、エイプールが言うカラードが停止していたのは『運用すべきネクストが極端に減った』からで、オーダーマッチはもとよりミツシヨンの幹旋場としても機能を失っていた。ORCAとの戦闘や天災クラスストレイトの無双で大部分を喪失した後、新規リンクスを補充したり、リンクスが生き残っている場合は補助金を出したりして数の確保に尽力している

それが復活すると？

『その件ですが、つい数時間前に業務再開したそうです。ランクに
関しては実戦の戦績からとりあえず算出するそうで、昼には出ます』

「仕事の受領はどうなんの？」

『カラード経由になります、世間への体裁を整えるためだけに』

本当にそれだけなのか

カラードが動いていた時代に陸はいたことが無いのでよく知らないが

『しかし、そうなればインテリオルとも連絡手段ができるかもしれ
ません』

『……………』

『……………もしもし？』

『え……………あっ！』

インテリオル所属であることを忘れてた奴が1人

- - -
- - -
- - -

『アサルトアーマーの使用を熱望した人がいるので、高機能なシュミレーターを用意しておきました。全員立ち上げてください』

新しくインストールされたソフトを選択する。HMDのPAゲージが擬似的に補充され、上の方にAPが現れた

『射撃及びAAの命中判定はこちらでやります、弾は装填していませんが弾道を計算してグラフィックが出ますので』

つまりほぼゲームだ、本人にとっては必死の攻防戦を繰り広げていても、端から見るとエア戦闘してるだけなのである

『APが無くなった時点でオートモードに切り替わり訓練区域から離脱します。ですので戦闘だけに集中してください』

「了解」

防御側との距離15km、アンフィスバエナのみなら1分程度で詰める距離だが、それでは2対2の意味が無い。それにただ突っ込んで待つているのは狙撃とミサイルの雨だ

うまく味方と連携しなくてはならない

「どうする？ 出会い頭にミサイル全弾ぶち込んでみる？」

『狙撃の範囲外からというのを考えると命中は期待できませんが…』

「…」
「やっぱ弾幕芸は駄目か」

となると正攻法通り散開、適度に撃ち返しつつ狙撃を気合いで避ける

……正攻法？

『私が囫になります。後ろをついてきて、射程に捉えたら突撃＋乱射というのは』

「大丈夫？」

『案外タフな機体なので』

なら文句はないが

『訓練開始します、各員準備を』

ネクスト本体の戦闘システムが起動する

ジェネレータのリミットが外れ、AMSも立ち上がった。普通はこれで脳に負担がかかるそうなのだが

「……………別に何ともないよなあ……………」

『それはおかしい』

切り捨てられた

こと防御力に関してはG Aは世界最高だと思う

実弾防御はもとより高い耐久性によりエネルギー兵器に対してもしぶとく稼動し続ける。その分機動性が犠牲になっているが、正面からの撃ち合いを想定しているG A機は多少鈍足でも問題無い

今に限って言うならばB F Fの狙撃機が支援についており、射界を邪魔する障害物も無い。この状態で抜けられたらそれは奇跡か天災だ

そうメイは考えていた

レーダーに機影が映って、距離1000あたりからメタトロンの狙撃が始まった。ジグザグ機動で回避しない所を見るとヴェーロノークで、砲弾を喰らいつつもこちらへ接近してくる。ミサイル射程圏に入ったら迎撃しようと16連垂直発射器を選択

ミサイル射程に入った直後、ヴェーロノーク後方から何かが飛び出してきた

それがアンフィスバエナだと理解する頃にはライフル射程まで接近され、空中からのグレネード爆撃を喰らう

慌ててミサイルを撃ってみたものの軽く回避され、グレネード弾切れまでにA Pの60%を喪失。そのまま流されるように近接射撃戦を強いられていた

「ちよつと撃つて！！早く撃つて！！」

『そんな超高速飛行物体に命中弾出せるかアホ！！』

換装した新型ライフルは近距離でも取り回しやすく、それなりの連射力をもってアンフィスバエナに命中弾を送っていく。しかし腕部の運動性能が追い付いていない感があり、ライフル弾程度ではぶ厚いPAに弾かれてしまう

このシュミレートシステムの欠点は命中時の衝撃が無い所だ、ミサイル当てても平然と動き続けやがる

「後ろのだけでもどうにかからないの！？」

『丁度よくメリーゲートという障害物があつてだな』

鈍足であることを真剣に悔やんだ

「だあああつー！！」

飛来する高速ミサイルはなんとか回避し、分裂ミサイルはライフルで迎撃。そうしたら今度はVTFミサイルの至近発射に見舞われ、避けられずにPAを持ってかれる。AP80%喪失

対峙するアンフィスバエナも無傷ではない、相当数のミサイルを喰らってるはずなので少なくとも1万は削り取った。残りは垂直ミサ

イル3斉射分、連動ミサイル1斉射分、バズーカ未使用、ライフルはまだまだ

向こうのフレアは使い切っているので仕掛けるなら早い方がいい。
アサルトアーマーでPAを剥ぎ取ってミサイル斉射を叩き込む、チャンスは1回、外したら試合終了だ。当てるにはまず意表を突く必要がある

ので、オーバードブースト点火

「お!？」

どうせ向かっていっても追いつけないのでアンフィスバエナに背を向ける。一応メリーゲートの全速なのだが、あるうことが普通のQB連打だけで追いつかれた。ライルなんてそんなもんだ、別に悲しくなんてない

OB停止、急制動。オーバースhootした所にミサイル48発を叩き込む

よし、吹っ飛んでしまえ

アサルトアーマー起動

「……………ん？」

しかし数秒経過してもアンフィスバエナは視界に入らず、ベネッタからの撃破勧告も無し

しいて言えば、至近距離で3砲身ガトリングを突き付けられているくらいで

『戦術は良かったんですけど……次は移動する方向も考えましょう』

「そのようで……」

『待ってくれ！タイマンだ！』

「え……」

『俺はアイツ前衛でやってたんだ！アイツがいなけりゃ、このままだる意味も無い』

「む……」

『それに、あんた達はまだ生きてる、1対2だ！それに模擬戦！』

「……………」

『な？わかるだろ？1歩2歩3歩d（ry』

アサルトアーマー

「もうちょっと耐えられ無かった訳？」

「お前ももつとマメにリーダー見れなかったのかよ」

結果、攻撃側の勝利。最初の狙撃とミサイルの雨でだいぶダメージを喰らったため圧勝とは言えず、やはり開けた場所での弾幕とスナイパーキヤノン強いという事を表している。ただそれを軽く押さえる形で高速機が勝ったという結果があるが

「これはまずいですよ」

管制塔から降りてきたベネッタが言う

「よりによってオーメルの機体に圧倒されて」

「並のリンクスはあんな超高速飛行しません！」

「敵の評価は高めにしておいた方が後のためだと思いますが」

アンフィスバエナを見る

第2戦に備えて武装変更に勤しんでいた。近接信管ミサイルを外してチェインガン、左のアサルトライフルはレーザーブレードへ

陸はその足元で帰ってきたリリウムから何か説明を受けている。カリードの呼び出しはそれが理由なんだろうか。いくらなんでも話が飛びすぎだと思うが

何か書類を差し出された

それを陸がお断りし

ですよね、という感じに破り捨てる

「暫定ランキング発表の時間です」

話し終えたりリウムがこつちに来て、一言目にそう言った。さつき破ったものとは違う書類を取り出し、今すぐにでも発表し始める体制

「さっきのは何を渡してたの？」

喋り出す前にメイが質問

「たいした事ではありません。ローゼンタールから引き抜きの話が来て、伝えて、拒否しただけです」

「へー……………へ？」

「よくあることです」

「よくあるのか」

「いきます。ダン・モロ様ランク19」

「えっ！？そんな上……！！」

「下から3番目です」

「あ……うん……」

「エノク様ランク17、エイプール様ランク13」

軒並み上がっている。別に実力でも何でもなく数が少なくなっただけであるが、それでも10代前半は嬉しいようで、エイプールが跳びはね始めた

「GAバズーカ（メイ）様ランク11、王大人ひげじいランク10」

名前が酷い

「一条様ランク8」

……ん？

「では機体の準備があるので」

「いやいやいや！ランク8で……上から8番目……」

「事実です」

表を見せられる

6 ・マイブリス

7 ・レ・ザネ・フォル

8 ・アンフィスバエナ

9 ・ルーラー

ガチか

ベスト10入り、まあ予想はしていたが、まさか現実になるとは。

5から先は政治的都合が顕著に現れるので普通のリンクスとしては最高レベルといえる

にしたって過大評価の気も

「とりあえず模擬戦で叩き伏せようと思います」

出る杭は打たれるらしい

『ではこれより最悪の状況を想定した防衛戦闘訓練を行います』

基地から西に進んだ場所にある廃墟へ布陣する。これは基地の代わりだ、要塞化を進める忙しい所で暴れ回る訳にはいかないため、かなり見劣りするものの障害物として選ばれた

また正午にパーツが到着し組み上がったセレブリティアッシュも今回参加している。無理矢理確保したような中古のオーギル頭とランセル腕だったが、本人は気に入っているので口出しする余裕は無い

『通常兵器はシュミレーターに吐き出させます。訓練開始と同時に

攻撃側は全速で進攻開始して下さい』

アンフィスバエナの周囲にノーマルACとミサイル車両が現れる。
上を見れば戦闘ヘリが飛んでいるのを見つけ、廃ビルの上に砲台が
鎮座していた

ネクストの友軍はメリーゲート、1機のみ。残り4機はすべて攻撃
側で、その実2対4で袋叩きに遭う仕組みである

『どうする？ 潔くボコられる？』

「とりあえず勝つ努力はしましょうや」

向かってくるのはアンビエントを筆頭にメタトロン、ヴェーロノー
ク、それからセレブリティアッシュ。前後揃っていて隙が無いよう
に思える

が、前衛の火力がやや足りなさそうだ

「1人つきりにしたらどのくらい耐えます？」

『3分くらいじゃない？』

180秒でメタトロンとヴェーロノークを切り刻む

無理くさ

「でもまあ、やるだけやりましょう」

『私はここで囿やればいいの?』

「イエス」

防御側が攻勢に出る事は禁止されていないはずだ

開始と同時に突っ込んで後衛を潰し、反転して前衛を挟み撃つ。勝率は…サバ読んで30%くらいだろう

やれるやれる気持ちの問題だ

『訓練開始』

オーバードブースト点火

『うおおお!?!』

マッハ1で廃墟から飛び出し、途中でセレブリティアッシュとすれ違う。後方で狙撃体勢を整えるメタトロンを捕捉したので方向修正、落下、体当たり、アサルトアーマー

『せめて1発撃たせろよおおお!!!!!!』

メタトロン脱落、PAを回復させつつ次目標ヴェーロノークを探す

レーダーには急接近する機影が映り

「ッ！！」

反射的にクイックブーストで回避する。さっきまでいた場所にライフル弾が突き刺さった

「こつち来ますか！？」

『私には貴方しかないの！』

サンドバック的な意味ですわかります

迫ってくるアンビエントにアサルトライフルで応戦しつつ左のチェインガンを展開、ミサイルにはフレアで対抗。レーザーがまずい、避けられない

ドガガガガ！！と弾幕を張った所でプライマルアーマーが復活した。さらに後退を続けつつチェインガンを撃ちかける

BFFレーザーが馬鹿にならない攻撃力を示し、既に6000超えのAPを持って行かれている。QB回避に追いつける運動性と高い弾速、貫通力、回避直後をしっかり狙える技量も合わせり、迂闊に近付いたらAPがゴリゴリ削られていくという有様だ

簡単に言うと、天敵k t k r

しかし、いくら速いといってもアンフィスバエナに追いつけるものではない。一度ぶつちぎってヴェーロノークを優先するか、メリーゲートの弾幕提供を受けるか、もしくはやられる前にやる

でもブレードもAAも当たらなそうだしなあ、という所だ

「そつちどうすか!？」

『ミサイルとライフル弾が降り注いでおりまーす!!』

あつちもどうかしなければならぬ、『実戦じゃないから』という理由でセレブリティアッシュがいつぱしの戦力になっていらつしやる

あとベネッタがFCSに仕込んだアレだ、遠隔操作によるロックオン選択を実現していて、ダン本人は適当に移動しながらトリガー引くだけの作業に軽減されている

とりあえず、ヴェーロノークをどうかしよう、あの火力は放っておけない

『そつ…そんなに他の女がいいのね……』

リリウムさん芝居継続中

反転、その際にレーザー1発喰らってAP20000を切り、OBを使わない最高速でヴェーロノークへ向かっていく

当然だが迎撃を喰らい、飛来するミサイルを振り切るのに横QB1
回。後ろからの低速ミサイルにはフレアをぶちまけて前進を再開する

「貰った!!」

ブレードを振りにかかり

『うわあああああああ!!!!』

「ぎゃああああああ!？」

ガトリング弾幕と御対面した

こうなるとブレードホーミングのせいで回避不能であり、しかもシ
ュミレーターのおかげで硬直もせず

ブレード体当たりからAA発動までに10000削られ、しかもP
A減衰のため撃破まで至らず。結果的に状況は最悪である

後はもうメリーゲートに頼るしかない

「本当に火力高いっすねえ……」

『アセンブル当初は某人物の重要性が認識されていませんでしたか
ら、よそ者同士組ませておけという意味で某機体の火力を補う事に
特化しております。しかし某機体はパーツ換装による火力補完を単
独で達成しているため、急遽近接戦闘でも十分な火力を求められた
結果、このような極端な機体に仕上がった次第です』

「……やけに詳しいね」

『ランク3ですから』

答えになっていない

………ん？

なんだ、ランクひとつ落としたのか

『……………』

「おおおおお！？」

無言のまま攻勢が強まった

『ローディー様が引退検討中としても、ネクスト保有数でG Aが優位にある以上、それ以外でのバランス調整が必要、そのような理由で、王大人も引退すればいいのに…見かけ上だけ戦力低下させる為だけに…！…！』

強く生きる

ミサイルの爆撃が止んだ

『っしやあ!!』

直後、メリーゲートの戦闘行動を束縛するものが無くなる。先程までは廃ビルに隠れながら散発的に攻撃してきていたが、今はもう隠

れる必要が無い、セレブリティアッシュの前に堂々と姿を現す

敵戦力を確認すると、戦車は真っ先に殲滅したため無し、砲台もヴエーロノークのおかげで沈黙している。残りはメリーゲートと、戦鬪へり

『はい時間切れ』

「えっまだ行けるだろだいぶ削ったし」

『何調子乗ってるの？バカなの？死ぬの？』

辛口すぎる

『こっちでやれるのはロック選択だけだってわかってる？命中率はそっちに依存したままなの』

「ああわかってるわかってる共同作業だろ？」

『死ねクソ野郎』

無線がぷつつり切れた

「……さあて」

装備変更してからの初陣となるが、なかなかいい感じだと思う。何せライフル2丁を撃ちまくるだけなのだ、背中にはASミサイルとレ

ーダーだし

廃ビルを回り込んで見つけたへりを順次落とし、メリーゲート横へ飛び出す

「行くぜー!!」

バズーカ喰らった

『悪いわね、ついさっきまで軽量高速機に弄ばれてたの!』

「な、なんだってー!」

まあ確かにアレと比べたら著しく見劣りする速度、というか比べてはいけないと思う

それが原因で目が慣れているようで、ネクスト戦じゃほぼ出番無しなはずのバズーカをボコスカ当ててきた。おかしい、セレブリティアッシュはここまで紙装甲じゃなかったはず

「考えが甘かったわね、出直してきなさい」

「ま…まだだ!」

「え?」

「まだ俺は!!」

以下お見せするほどたいした出来事は無かったため省略致します

今回の反省

陸

ただ突撃するだけでは1対多は勝てないという結論

メイ

壁にしろとは言ってるけども囷前提はどうかと思う

ダン

通常兵器といえど調子乗ったらあかん

リリウム

最低限の回避をしつつレーザーで削れば勝利することは可能、でも

もう戦いたくない

エイプール

ガトリング楽しい

エノク

出番をくれ

「で、貴様ら何しに来た」

「反省会を少々」

「それは木屑まみれの部屋で食物広げながらやるべき事なのか？
なあ」

「厳戒態勢下の基地でパーティーとか正気の沙汰じゃないすか」

「騒ぎたかっただけか」

別に普通の飲食店でもよかったのだが、企業関係者が長居すると野球のアウトバーに気まずいため、ボロボロビル1階にある家具屋にて集合、許可はリリウムが出した

当然すぐ近くで店主がガリガリやっている、しかし木屑ごときゴミに比べれば云々

「ライールの戦術マニュアルなんてGAには無い訳でありまして」

「……つまり、教師代わりか」

店内に集まってきたのは陸含めメイ、エイプール、ダンの4人。基本的に騒ぎたかっただけではあるが

今日の戦闘訓練におけるデータをノートパソコンに移して持ってきたので、一応店主に見せてみる

「ふん、それは別に構わんが……」

「案外すんなり見てくれるんすね」

「もうナルシストを演じる理由も指導者になる意味も無いんでな」

「？」

パソコンを開いて内容を確認。5秒毎の平均速度やら残りAPやらがずらっと並び、付け加えレーダーの記録動画、それを眺めていく

「ところで」

「はい」

「前も思ったが、何故インテリオルがここにいる？」

「あー、元々グローバルな働きをしてたらしくオーメルサイエンスと一緒にいた所を撃墜、捕獲」

「菌茎収集家か」

「俺じゃねっすよ」

最近よく出没するAFについて説明する。今のところ判明している特徴としては、砂に潜り、プライマルアーマー及びアサルトアーマー搭載、行動パターンから無人である可能性が高く、またオーメルサイエンスが少々臭っている

「潜砂型？ああ…アレか」

「知ってるんです？」

「見た事はある。……そうか、しぶとく生き延びていたか」

苦虫を噛み潰したような顔をした、どうやら嫌な思い出があるようだ
リンクス時代に遭遇して戦ったとかそんな感じだろうか、であれば
戦闘記録が残っているはずだが、ベネツタによればそんなもの無か
ったという

「わざわざ隠してやるのも癪だから特別に教えてやろう。アレはオ
ーメル製だが、オーメルの上層部はアレの存在を知らないのだよ」

「え」

「更に言うとアレ本来の使用目的は戦闘ではない、地底の調査及び
資源採集だ。サイズと比べて武装は貧弱だったろう」

「まあ、最初はハイレーザー2基だけだったかな」

アサルトアーマーは問答無用の破壊力だったが。できればもう喰ら
いたくない

「結局、レイレナードの亡霊から逃げ切れていないんだよ、この世
界は」

「……えーっと……ORCAだっけ？3年前出てきたのは」

「それはもういい、すべて終わった」

「あ、はい」

2秒沈黙

その後溜息

やはり昔は企業はかなり高い位置にいたに違いない。今の情報提供もそうだし、正にいまこの瞬間で「それをやらせない為にわざわざ気を使ってやったのに」とか「奴が邪魔しなければこんな事には」とか呟いている。本人は口動かしてないつもりのようなのだが、残念なことに筒抜けだった

「とにかく、次遭遇したら最優先で破壊だ。アンビエントにもこれは伝える」

「はあ」

「それと友軍だろうと無条件で信用するな、特に技術部門と製造部門、取り込まれている可能性がある」

「はあ」

「……………つむ」

言いたい事を言い切って、ノートパソコンの閲覧に戻る

「……ところで」

「ほい」

「あれは誰だ？」

顎で残り3人のうちへらへら笑っている男を示した。どうやら女性に囲まれて調子乗ってるようだ、後で言い付けてやろう

「ダン・モロ君です」

「……………誰だ？」

「搭乗機体はセレブリティ・アッシュ」

「……………誰だ!？」

「新参って訳でも無いんですがねえ」

どうやら本気で知らないらしい、それでも記憶から引きずり出そうと昔のランクラしきものを一から数え始め

「スカーレットフォックス…エメラルドラクーン……………カリオン…
…んん？」

苦悩している

「お二人さん、聞こえてますよ」

「む……」

ダンが沈んでいた

D e c l i n e o n t h e s e c o n d d a y

「……ああ……む……どこだここは……」

「起きたか。ここはレンタルガレージで、現在午前4時17分、出発まではまだあるからゆっくりしていいぞ」

「あ……さ……夢か……」

「だいぶつなされていたが、悪夢でも見たのか？」

「ああ……お前……セレン……お前がおバカすぎるアセンブルしてきやがるから……」

「ようっ

エノクが添い寝していた

「アール・ピー・ジイイイイイイ！……！！……！！……！！」

「連射力ッ！！……！！」

バスン、ゴロゴロゴロ

「何すか朝っぱらから」

「完全にG Aが板についたようで結構……」

G Aって常にこんなノリなのか

吹っ飛ばしたエノクがよろよろと立ち上がり、それを見届けてから陸もベッドから下りる。そして日光を部屋に入れようと窓のカーテンを解放、短S A Mが視界を覆っていた、陸はカーテンを閉めた

「今日のスケジュールだがな、通常軍の標的役やって欲しいんだ」

「オーメルは？」

「来ようと思えば今すぐ来るだろうな」

「大丈夫なん？そんな呑気に」

「ビビったら負けだ、どっしり構えとけ」

そういう精神的な作戦は相手を選んだ方がいいと思うのだが、なにせ腹黒オーメルだ、物理的に優位に立たなければ連中を焦らせるのは不可能だと思う

しかし、やるならば徹底的に

「じゃ、ボッコボコにされればいいの？」

「それも考えたんだが、最終的に『虚しい』という結論で落ち着いてな、通常軍が自信喪失しない程度にやればいいさ」

時計を確認、6時44分、訓練開始時間から逆算すると、あと30分ほど寝れたはずだ。早起きは三文の得というが、この場合は寝起きドッキリしただけに違いはない、何故あと30分待てなかったのか

つか、潜り込む必要はないだろ

「すまん、色々」

「いや別に低血圧じゃないから早起きはいいけど」

「それもそうだが、うん、すまん」

「？」

何か含んだ苦笑いをしながら後退し、そそくさと部屋から出ていった

なんだあれは、まだ何かあるのか。例えばいきなり床が抜けてそのまま耐久熱湯風呂とか、そしたらGAレーダーの宣伝をしなければ。えー、えー……

「改造すればスモークチャージャーになります」

「それだ」

「……」

「……………」

ベッド下から這い出てくるカメラ小僧ならぬカメラ少女

改めて容姿を確認すると、身長150cm以下の長い茶髪、ほぼ常に無表情だが感情は人一倍豊かなようで、笑いもするし怒りもする。一応GAグループ内では最高のランクである2。いや3を持っており、カラードでも重要な位置に座っているようだ。こうしてる内はただのお子様なのだが

「いいものが撮れました」

「いや、あの、リリウムさん」

「百合ウムです」

「……ナトリウムさん」

「ロリウムです」

「ろりうむ」

「ろりうむ」

なんだこれ

「夏コミの新刊は表紙これで行きましょう」

「表紙ってなんぞ」

「ちゃんと目の所に黒線入れますから」

「そんな犯罪臭い本売れるの？」

「確かに、ランク8となれば有名人の域、それが男食家という噂が立つては」

「そういう意味じゃなくてね、いやそれも重要なんだけど」

エノクをけしかけたのはこの子だったか。夏の戦場に送り出す薄い本作成に勤しんでいるようだが、売る側に回るには協力者が必要なのは。まさか駆り出されたりしないよな

「本日7時よりカレードからの公式発表があります、ポータブルテレビを用意したのでこちらでご覧下さい」

「へい」

ティッシュ箱より少し小さいくらいのディスプレイを渡された。こんなんだが性能はアホで、画素数は40型液晶と同じ、コードを繋げばPS3やXbox360がヌルヌル動く。それでバッテリー15時間というのだから中身がどうなっているか検討もつかない

「それと精神安定剤です」

「え？」

「心臓発作を起こされても困るので」

そんな凄まじい発表されるのか

錠剤と水を渡されて、それを胃に流し込む。用件はそれだけらしく、リリウムは出口へ

「ではロリウムはこれで」

「うん」

「引き戸はゆっくりお開け下さい」

「うん？」

退出

「……………」

とりあえず着替えよう、寝巻のままだ。シャツとジャージなのでこのままでも大丈夫っちゃ大丈夫だが

軽く伸びをしてから服の入ったクローゼットのもとへ移動

扉を引いて開ける

エイプールが詰まっていた

「むゝーーーーっ!!!!!!!!!!」

「ひゃああああああああああああああああああ!!!!!!
!!!!!!!!!!」

ドッスン、バツタン

「な、なななな…何が…?」

いきなり現れたエイプールさんに押し倒され床に転がる。見れば両手足縛られた上で口にガムテープを貼られ、当人は涙目でこっちを見つめていた。まさか自分で入った訳でもなし、あのロリ少女、こういう事が

「ぷはっ……………」

とりあえずガムテと縄を外してエイプールを解放

エノク、リリウム、エイプール。となれば

「メイさんはどこだ」

「あ……いないと思います……」

ドッキリ待機してると思ったのに

「始まりましたよ」

「うー」

着替えを終えて、抽出していた紅茶をカップに注ぐ。メイが言うにはダージリンがシルバーティップスとか何だかいうバカ高い茶葉らしいが、味覚に自信のない陸としては舌触りが良いか悪いかくらいの違いである

テーブルに設置されたポータブルテレビの画面では見るからに米寿済ませてるであろう偉そうな人^{ひょうつてい}が当たり障りのない話をしている。見るからにやる気なさそうな話し方は『この話に意味はありません』と強く主張していた、形式上仕方なくやっているんだろう

それ以外には各企業の要人1人ずつと、組織の要である所属リンクス数名。ただ人材不足も深刻なようだ、企業リンクスに混じって口イがいた

カメラ見て

手を振って

ウィン・Dにどつかれた

「ただのセレモニーって訳じゃなさそうですが…何か発表するんでしょうか」

「そりゃまあ、あの精神安定剤が一発芸で終わるとは思えないし」

「？」

エイプールにティーカップを差し出し、陸も椅子に座る。高級（と思われる）紅茶の匂いにエイプールが気付き、まずじっと液体を眺め始めた

「これ、デフォルトの備え付けなんですか？」

「いや、一桁ランクのお祝いにとメイさんが昨日」

備え付けはインスタントコーヒーである

エイプールはじっくり香りを確認した後、少しだけ口に含み、舌の上で転がす。やがて何か微妙な顔をした

「これ、どうやって抽出したんですか？」

「急須で」

「何を思ってそんなもつたない方法を…！」

絶望している

よくわからないのでテレビに目を戻し、じいさんがまだ喋っている事を確認。よく見ればテロップに『王小龍』と書いてあった、あれが噂のロリコンじじいか

話を続けるにつれ気分が乗ってきたようで、『であるからにして』みたいな喋り方になっている。もはや原稿など見ていない、完全なアドリブだ、スタッフ困惑中、ロイ爆笑中

数分後、リリウムに耳たぶ引っ張られて退場した

「……………え、この式典って北米東海岸でやってんの？」

「たぶんヨーロッパの方だと思いますけど……………」

ヨーロッパ、海の方こう

リリウム、ついさっきまでここにいた

「だから…1万キロとちょっとある大西洋を15分くらいで横断できる乗り物」

「マッハ30超えていますよ」

リリウム、恐ろしい子

『えー…少々予定を短縮させて頂きます』

まあそうなるよな

王小龍に代わって壇上に上がったのはウィン・D、合わせてプロジェクターが用意されスクリーンに向かって投影を開始

『…………あのBFF組は…後で説教しておきます…』

陸が正気を取り戻した頃には、ウィン・Dが自分の座席に戻っていた

「ど…どうなって何が内容は…」

「ああやつとSAN値が回復して……」

人間ってほんとに発狂するんだなと思いつつテレビを見る、
ロイ兄さんは居眠りこいていた

雰囲氣的には、後は閉式の挨拶して終わりのようだ

「何言つてたん？」

「うーん…要するに今後の方針について提案してたんですが…若干
非現実的というか……」

「うん」

「コジマ粒子の使用をやめようって」

「うん？」

どんな判断だ？

「地球の汚染源を根本から取り除くにはそれしかない」と

「いや、いやいや無理無理」

「ですよねえ」

コジマが無くなった世界について予想してみる

まずネクスト機の運用は論外、アンサラー等動力源にコジマを使っているAFも廃棄され、ノーマルACが傭兵の花形に返り咲く。あれだけ必死に守ったアルテリアは一斉に沈黙し、クレイドルは地上に下りる

それだけではない、国家解体戦争以前とは状況が違うのだ、化石燃料はほとんど採り尽くされて全人類を満足させられる量の発電所など稼働させられず、比例して工業施設もほとんど停止。太陽光発電で補充しようにも汚れた大気では思うように発電できず、同じ理由で農業も困難

そんな世界では企業も戦争する気力など無くなるだろうが

「生活水準が…弥生時代くらいになるんじゃないかな」

「私は新石器時代くらいだと思いますけど」

結論

無理

「ただそうでもないとその先続かないというのも事実ですよね」

「そりゃそうだけど……」

画面内の企業関係者を見る、予想通りの顔をしていた

インテリアだけは『やっぱりね』と言いたそうな顔だったが

「人間が大好きなんです、あの人。そのためならなんだって切り捨てる」

「だろうね」

「できる事なら1回戻って話がしたいんですが……」

「1回でいいの？」

「え？」

「え……？」

所属上はまだインテリオルのはずなのだが、この子

R i n g R i n g R i n g ! ! R i n g R i n g R i n g ! !

ガチャ

『インテリオルユニオンです』

「……はあ……」

『そちらG A社北米東海岸基地でよろしいですか？』

「はあ」

『えー…あなたのお名前は』

「メイ・グリーンフィールドと言いますけども」

『……何故リンクスが電話に出るのです』

「だって今厳戒態勢でほとんど全員戦闘配備だし残りも式典に取られてるし」

『……まあいいでしょう、エイ＝プールへ言伝をお願いします』

「はあ」

『いるんでしょう？』

「まあいるけど」

『今から迎えに行くが私は長年の恨みを優先するから期待して待っているアラ（ピーー）バア、と』

「……………」

『一字一句違わずお伝えください』

「……………そちらの名前は？」

『名乗るほどの者ではありません、では』

プッ

「陸、プーさん隠して」

「えっ…遂に養蜂業者が駆除に乗り出した…？」

いきなりだったので条件反射で返答してしまう。エイプールのプーだというのは少し考えればわかるが、そこを抜き出すという発送は無かった

というか『エイ』だけだと変な感じがして本当に困る

「なんかインテリオルから電話来たんだけど」

「なんて？」

「迎えに来るついでに復讐するって」

いつどこでどんな恨みを買ったんだろうこの子

現在ハンガー横の休憩所で待機中、メイが電話している所は終始見ていたがそんな大事な話を話していたようには見えなかった、いたずら電話と判断したんだろう。そう簡単に迎えが来たらここまで苦労していない

「ASミサイルで誤爆しちゃった人とかいる？」

「えーと…回数が多いのはウィンさん、ステイさん……」

回数が多いと言ったか

R i n g R i n g R i n g … R i n g R i n g R i n g …

「……………」

また鳴った

「次出てみて」

メイに促されて電話に歩み寄り、受話器を取る、いつも思うのだが専用窓口は無いんだろうか、どこでも電話に出れるというのは評価するが

『言い忘れました、迎えには行きます、行きますがインテリオルとGAは敵同士、よって接敵した場合はいつも通り行動しますので変な警戒はやめて下さい。私が望むのは速やかにエイプルを殴り倒して持ち帰る事でありGAとの戦闘ではありません』

「あのー…今敵態勢なんだけどそのへん大丈夫ですかね」

『お…誰ですかあなた』

「一条陸という者です」

『いちじょ……ランク8！？何故そんな所に！！』

「今お世話になってまして」

『うあ……いや……大丈夫、勝てる、所詮は仮ランク……』

「恐縮です」

『とにかく！下手な敵意は見せないようお願いします！これ以上余計に話を……』

エイプールに手招きして、それから受話器を持たせた

「……………」

スピーカーを耳に押し付けたまま数秒間沈黙し、一方的に喋り続ける相手の声に聴き入る。それが誰のものであるか判別するまでそう時間はかからなかったらしく

「ミドリちゃん……！」

言った瞬間、派手な音を立てて電話は切れた

「知り合い？」

「……っ……そうですね……ごく最近リンクスとして採用されたので、まだカレードには未登録ですけど」

そろそろ訓練開始時間だ、ハンガーに格納されている兵器のほとん

どが出撃寸前であり、陸のアンフィスバエナも標的役として待機中。残りのネクストはシュミレーター使って対ノーマルAC訓練をするらしいが

機体の方をしてみる、丁度ダンがコクピットに潜り込む所だった

「新人イジメやっちゃったんだ」

「やってませんよ！ただあの子、ミサイル回避に難があって……ひどい時は30秒くらいで……」

普段の模擬戦が問題だったようだ

「機体はラトーナを使ってますね。ウィンさん教育なので今どのくらい実力があるかはわからないけど……」

「ふうん」

レーザー祭か、できれば交戦は遠慮願いたい。本体装甲が終わっている以上、プライマルアーマーを無視されると本当にどうしようもない

「でもミサイルが苦手というんなら、ものすごい弾幕の人がいるし」

「え、何？戦うの？」

時間だ。メイに否定のジェスチャーを送りつつ部屋を出、自分の機体へ

「……ん？」

赤ランプが点滅し始めた

『第一種戦闘態勢発令、敵軍、目下ヴィクターヤンキーからタンゴズールーへ移動中』

全体アナウンス、そして警報

「あー、開始前にオーメるか…」

「何その斬新すぎる動詞」

「腹黒の行動により被害を被る事をオーメるといいましてね、主にオーメルサイエンス内で使われてて」

「自虐かい」

-
-
-
-
-
-
-

- -
- -
- -

『人数多い方がいいだろ！俺も出るぞ！火器管制返せ！』

ベネツタにFCS使用禁止を喰らったセレブリティアッシュの横を通り過ぎる。こういう事態を想定して実弾搭載状態で演習していた甲斐があった、軍全体が急速に戦闘態勢へ移行していく

『敵軍、基地南東に上陸、目下こちらへ移動中です。ただネクストが2機しか確認できていません、留意してください』

ハンガーから出てブースター点火し、アンフィスバエナを南東へ向かわせる。数秒遅れでヴェーロノークがついて来た

『補足できたのはランク5ノブリス・オブリージュ、及びランク16サベージビースト。通常兵器より先行しています、近付かれる前に迎撃を』

水際阻止、とは言えないが、基地と居住施設がコジマで汚染されるのは避けなければならない、オーバードブーストで迎撃予定ポイント

トまで移動する

『2機でなんとかありますか?』

「んー、まあなんとかしてみるわ」

ノブリスは置いておくとして、サベージビーストは良い機体構成をしているものの搭乗者が少々おバカである、グレネードで威嚇すれば帰ってくれるだろう

昔はオーメル中心のミッション受注だったためよく協働していたが、よくもまああそこまで素でボケれるものだ

ちよつと回線繋いでみよう

『もう帰っていいかな俺……』

威嚇するまでもなかった

「またぼんぼ痛くなった?」

『プレッシャーで痛くなりそうだ……』

通信機からは沈んだカニスの声が聞こえてくる。何を隠そう彼は楽な任務を好んで選ぶ性質があり、今回のような企業のパワーバランスをぶち壊しかねない戦闘はすべて受注段階で除去してしまうのだ。例え参加したとしてもその時のサベージビーストはソブレロも真っ青の耐久性になるという一種の呪いが発動する

マツハで

撤退する！

『あのすかした野郎…このミッションを拒否するのなら金輪際オメルはくとか抜かしやがってよう……』

やはり出たくはなかったらしい

『まあ…報酬分働いたら撤退すつからそのつもりで』

「うい」

通信切断

「とりあえずサベージビーストは帰ってくれるまで爆撃し続けてあげて」

『了解』

今の会話聞こえていたか、エイプールの返答は早かった

『これより友軍ネクスト戦力により敵軍ネクストを殲滅します、アンフィスバエナ及びヴェーロノークは敵陣正面のネクスト2機を撃破してください』

基地の大型レーダーとシステムリンクが入る

倍率が最小まで引き戻され、レーダーサイト内に敵部隊全体が投影された。先日の所属不明部隊よりは見劣りするものの、本当に上陸部隊かと疑うレベルの規模である。標的は突出している2機なので、倍率を戻して近接戦闘距離に合わせる

『なお、AFギガベースからの遠距離支援が予定されています、発射30秒前に予告を行うので留意を』

砂丘の頂上に2つの機影が現れた

「行くぞ!!」

VTFミサイルを撃ち放つ

陸から見て左側のネクストに向けミサイルが飛んでいき、それを追いかけるように最大速度で接近を開始。天使の羽みtainな武装をした機体だ、恐らくノブリス・オブリージュ

先行させたミサイルはライフルにより撃墜され、爆発煙の真ん中を突っ切って更に接近。相手も前進を続けながら片翼を前に展開させる

猪のように突撃して、そのまま止まらずに交錯

「脚部被弾：？」

レーザーが左膝を掠っていった、装甲に焼け跡がついただけで機能障害は発生していない、しかし完全に避けたつもりだったのだ

高速を維持したまま大きく旋回しグレネードの爆煙を前方に引き戻す。プライマルアーマーは大きく減衰したようだが、1発だけでは本体には大した影響を与えられていない

『ギガベース、射撃開始』

メインブースターが吠えるように炎を噴き出し、軽い機体を空中へ持ち上げていく

弾着予測点はノブリス・オブリージユのすぐ横に表示された。あんなものは軽く避ける、放っておいたら何の意味も無い

一瞬だけ視線をヴェーロノークへ向けて、サベージビーストと戦闘している事を確認、相手のやる気が無い上にランク差もある、まず負けはしないだろう

『弾着5秒前！』

距離700、高度差400

斜め上からの強襲を仕掛ける

『ッ！？アンフィスバエナ！早急にそこから退避を！！』

真上を取った瞬間にありつたけライフル弾を撃ち込み、急速反転してノブリス背後に着地した。直後の裏拳気味ブレードをクイックブーストによる後退で対処した上で、減衰させたプライマルアーマーにグレネード弾を突き立てる

『危な…ッ…!』

視界が黄色い砂塵で覆い尽くされた

「ぶっは…!!」

プライマルアーマー減衰、前面装甲変形、ショックアブソーバ損傷

やはり紙装甲がこういう事やってはいけないと思う

『ええいカミカゼか貴様は!!』

「のわ!？」

超長身ブレードが砂塵の向こうから現れた

右腕のアサルトライフルを前に突き出し、合わせてブーストで微調整する

必要なまでに尖ったライフルがノブリス左腕の関節に突き刺さって停止させ

『噂は聞いていたが、とんだ命知らずだな君は……!!』

「いや普段はもつと回避重視なんですけどねえ……!!」

今のはだいぶ効いたらしい、右翼外側の砲身がひしゃげてしまっている、それ以外は使用可能なようだが

『なるほど…これはなかなか楽しめそうだ!』

右腕が不協和音を立てて押し戻される

軽さ命のライール腕が中量万能なオーギルに敵うはずが無い、ブレードが消滅しているのを確認して後退した

「いつの間にな有名になっちゃったかな……」

『知名度とは一気に上がるものだ、いきなり高ランクになれば特にな。私も経験した』

なるほど

『まあ私は祭り上げられただけだが』

なるほど

作戦会議室と書かれたドアを開け放つ

まず第一に広がった、そして見た目にもしつかり気を使っていた。机は木製、椅子は車輪付きの布張りオフィスチェア―統一、浮きやすい大型ディスプレイは極薄の有機EL型を壁に貼付ける事で違和感を最小限に留め、更に観葉植物をどかんと配置してそっちに目を向けるよう工夫がなされている

うちひとつの椅子に腰掛けていた男性が他人の侵入を感知して立ち上がり、老化現象が如実に表れた顔を向けた。ランク4フィードバックのリンクス、ローディーだ

「久しぶりだな。といっても面と向かって会うのは初めだ……」

「素晴らしいなこの部屋は！！ここまで有機物を派手に使った部屋は久しぶりだ！！」

「……は……？」

「わかっている！！わかっているぞ！！このあえて無駄を配した椅子の数！！心身共に窮屈さを感じさせないレイアウト！！オーメルの枯れ草ども見習えと言いたくなる！！」

「お……おい……オツツダル」

「ああ布か！！布もいいな！！下手な仰々しさを与えずスタイリッシュにまとまっている！！デザイナーは誰だ！？会って話したい！！」

「……………」

「は……」

あまりの衝撃につい我を失ってしまった、気を取り直して適当な椅子に腰掛ける

「それで何の用……座り心地いいな、やはり木では勝てんか」

「いつから椅子マニアになったんだ？元からか？」

「……………まあそれはどうでもいい、わざわざこんな所に呼んだ理由を聞かせろ」

正面にローディーが座り直す。もうかなりの年齢だと聞いていたが、実年齢よりは若く見える。しかし仕事中コジマ浸けのリンクスだ、見えない所でガタがきているのかもしれない

「家具屋をやっているそうだな、何の意味が……………趣味か」

最初の質問は聞かれずとも答えてしまったらしい、出鼻をくじく格好になった

「何を勘繰っている、今お前の目の前にいるのは理想を折られた抜け殻だぞ。金もない人もいない、たった1人で何をやるか？」

「機体ひとつ隠してあれば1億人は軽く殺せる、リンクスとはそういうものだろう」

どうやら今の例えは嫌味のようなだ。無益な殺しなどこれっぽっちの興味もないとしても、部下の不始末は上司の責任と言うし、ここは大人しく黙っている事にする

「とはいえ、お前は使い方を間違える輩でもあるまい、結果はどうあれ思想は正しいと思う」

必要悪

この混沌とした時代に正義や悪を語る意味などないが、少なくとも地球視点で考えればORCAは正義だった。未来を省みない企業にとっては迷惑以外の何物でもないとしても、誰かがやらなければならぬ時もある。前はその役がマクシミリアン・テルミドルだったというだけで、別に特別だったとは考えていない

事実、今こうしている間にもどこかで誰かが第二手を打とうとしている

「その思想を実行した者として意見を聞きたい、今の状況をどう思う？」

「この閉鎖された世界か？貴様らが選んだ事だろうに」

「アレの存在は知っているのだろうか？リリウムから聞いた」

「……ふん」

あのアームズフォートについて聞いてくるという事は、あれが戦闘用ではないと知っている。恐らく企業としてではない、例のカラードの集まりとして情報を収集、使用目的に辿り着いたという所か

ならば今頃痛感しているだろう、いかにORCAが優しかったか

「……まあ、喜ばしい状況ではないな」

「そうか…ではこちらの予想は当たっていたんだな」

「今どの段階だ？止まるのか、止まらないのか」

「この間、GAの基地が襲撃された。意味もなくそんな事はやらんだろう、巢は見つかったと考えていい」

手遅れとは言えない、が、阻止するには厳しすぎる

「アレを壊せば良いのか？」

「卵を手放す前であればな。恐らく肝心な所はもう地中深くだ、リモコンを壊しても時間稼ぎにしかならん」

金属探知器で探し出す気ならそれでもいいが、と付け加える。もちろん不可能だ、掘り出すよりもボタンをひとつ押す方が遥かに早い

「巢の磁気が落ち着くのが早いか貴様らが奴らを皆殺しにするのが早いか。どちらにしろ未来があるとは思えんな」

「ああ、一番の問題はそこだ。現状維持は論外、かといってこれを見過ごすのも心苦しい」

企業に関わっている時点でローディー自身の生命は保証されている、止める努力をするというのは返り討ちに遭う危険を犯すという事だ。どんな人間であれ、死に恐怖しない者などいない

それでも阻止しようとした人間は、知っている限りでは2人

「人類滅亡か文明衰退か選択式だな。私は後者に乗ろう」

「指示するのか？あれを」

「実に奴らしい考えだ、実現可能かはともかく見てみたいとは思っ
いずれそうするしかなくなるのだ、ならやらせてみるのも悪くない。
その案をそのまま通そうとは思っていないだろうし、ある程度妥
協した上で段階的に行っていけば企業がOKを出す可能性もある

「ではここまでだ。北米の基地は死守することを勧めておこう、巢
の近くに敵がいるのは誰にとってもいい事ではないからな」

話すべき事は話した、ローディーが沈黙したのを見て椅子から腰を
離す。仕事が切羽詰まっている訳ではないがここに長居するつもり
もない、帰って進めるだけ進めてしまおう

内容は大方の予想通りだったが、手伝えとは言ってこなかった。無
論言われても断るし、もう戦場に戻るつもりもない。ただ口にして
こないあたりどっかのヒゲジジイとは訳が違う、ローディー

「オツツダルヴァ」

扉に手をかけた所で、呼び止められた

「まだ」答え」は残っていると思うか？」

どこことなく弱気な口調

それを聞いて少しの笑みを顔に出し、ノブにかけた手で扉を開け廊下に出る

そして不敵に笑ったまま、もう片方の手でローディーを指差し

「It might be there」
そこにある かもしれない

扉を閉めた

性能としては申し分ないのだが、やはり継戦能力が少なすぎると思う

残弾確認、ミサイル2回分、グレネード弾切れ、右手のライフルも撃ち尽くし格納ハンドガンにすり替わっていた。ノブリスがあとどれほどもつかはわからないが、少なくとも背中レーザーのエネルギーは使い切ったはずだ、全部回避してやった

『向こうがやられる前に仕留めたかったが…そういう訳にもいかないな。小休止しないか？』

一度補給に戻ってからやり直そう、と言っているらしい。既に双方とも相手を撃破できるだけの火力は残っていないのだ、ブレードとアサルトアーマーの乱打戦になるよりは遥かに安全である

『GAに在るといっても君は独立傭兵、私もオーメルサイエンスに付き合わされているだけだ。お互い、命をかける意味などないだろう』

「そつすねえー、一応ここで食い止めるって言われてるんだけど」

『それに今戻ればタイミングも合う』

「うん？」

話しつつも戦闘は続け、ライフルを撃ち合いながらミサイル発射、PAを削り取ったが致命的なまでにはいならず

アサルトアーマーで吹き飛ばせば楽なのだが、畳み掛ける火力が無いし、何よりランキング上位相手に下手な手は打ちたくない、昨日の模擬戦ではひどい目に遭った

『できれば完全な一騎打ちで戦いたいな、君とはッ！』

ロングブレードが迫ってくる

「さすがに！！ランク5には勝てる気しませんか！！」

あの刀身長では左右に逃げてもからめ捕られる、前方へクイックブーイストを噴射、ノブリスの肩を掠めて反対側へ

急速反転、ガラ空きの背中へ最後のミサイルを叩き込む

『なんの！！』

緑の推進炎がミサイルを振り切っていく。近距離戦闘を睨んだ低速

気味のものだったのが裏目に出たか、うまく迎撃され距離も空けられた

『サベージビースト、撤退しました!』

エイプールが報告してくる

そちらを見ればオーバードブーストで逃げ去っていく虎柄がかすかに確認でき、フリーになったヴェーロノークがガトリングを乱射せんとこちらに向かっていた。これで2対1

『潮時だな、一時撤退する。補給と応急処置が終わる頃には一騎打ちも期待できるだろう、続きは後でな』

ノブリス・オブリージュも後を追っていった。一応、水際阻止は成功したと見ていいだろうか、獲物に逃げられた弾幕生産機はやや落胆しているが

『敵部隊の撤退を確認、支援射撃を終了します。通常兵器部隊が近付いているので、アンフィスバエナは補給撤退、ヴェーロノークはできる限り戦闘続行を』

『了解しました、じゃあ先に帰っててください』

「……………」

『一条さん?』

「あ…ああ……ごめん、ちょっと寒気が」

機体を基地方向へ向けて出力レベルをOBに持っていく、巡航目的なので、噴射控えめ、めいっばいチャージ。総火力不足なのは明確なので、今のうちに武装を変更しておこう。しかし恐ろしい捨て台詞だった

「残りのネクストは？見つかった？」

『はい、数分前に捕捉に成功、目下アンビエントとメリーゲートが迎撃中です』

レーダー倍率を落として戦域全体を確認、反応は北にあった、回り込まれたらしい

オーメル通常軍は南と西の二手に別れ進軍しており、東の海上では海軍同士が取っ組み合っている。さらに北からネクストとなれば、完全に囲まれる格好となった

『大丈夫です、単純な殴り合いならGAは絶対に負けません』

言い放つベネッタ、BGMはダンの出させるコールだった

なんかボタンをぶっ叩く音

静かになった

『とにかく今は早急な補給を、AFイクリプスの接近も確認されて

います』

「はいよ」

チャージ終了、オーバードブースト点火

帰ったらダンを落ち着かせる作業に加わろうと思う

Subsequent natural disaster

高出力ブースターを吹かして緑色の機体に物理ブレードの先端を突き刺す

『つつつ…！』

硬い、プライマルアーマーはそれほどではないものの本体装甲が馬鹿らしいほど厚く、ただ衝突させるだけではこちらの刀身の方が先にひしゃげそうだが、現状では殴り続ける事しかない、第一会敵目は弾を温存しろと言われたのだ

反撃される前に再び懐へ入り込み、何の工夫もない金属製の板を薙ぎ払う

『116…！』

ガギン！と、敵ネクストの太い左腕がブレードを停止させた。GAの初代制式ネクストサンシャインをベースとする重量機のパワーはアリーの全力を難無く受け止め、残った右腕がライフルを突き付けてくる

「ッ……」

連射速度はマーズに匹敵しているだろうか、プライマルアーマー干渉中に1弾倉ぶち込まれ、装甲に穴が開いてから離脱

システム障害無し、単に穴が開いただけだ。ただもう一度やられた場合、間違いなくコクピットが吹き飛ぶ

『ランドグリーズ！5秒後に相手交換だ！お互い相性が悪いだろ！』

同じく戦闘しているファープニルから通信が入る。向こうは白っぽい機体とブルファイトしているようだ、ネクスト最速クラスの突進は軽く避けられ、カウンターのレーザーで劣勢に追い込まれつつある。まあ、ライールの宿命だろうあれは

「了解」

牽制としてマシンガンを小量ばらまき、ファープニルと背中合わせになるよう移動、バズーカは最低限の回避の後厚いPAで弾く

『3、2、1、ゴー！――』

急速反転、最高速度でファープニルとすれ違う

交戦目標、緑に代わって白っぽい。機種はBFFの063AN、空中にいたのが今降りてきて地上を滑走している。サンシャインほど硬くはない、刺突すれば相応のダメージが入るだろう

クイックブースト噴射、ブレードを叩き込むべく突撃をかけ

『機動がわかりやすい』

ガン！

「え……？」

蹴られた

『長い間実験体をやっていたと聞いていますが、戦術的な訓練は受けていないようですね』

今度は肘打ち、両方ともコクピットのあるコア部へクリティカルヒットしており、モロに衝撃が伝わってくる。目が回ってきた

ぐるぐる回る思考で考える、ACとはこんな旧世代のロボットアニメのような攻撃法を想定していただろうかいや違う、機種ごとの特性はともかく基本は射撃だ、格闘するにしても装甲を焼き切るためのレーザーブレードを使用する訳で、そんなさっきのハイキックと

か肘打ちとか今喰らってるQBタックルとか

わけがわからないよ！

「あわ……」

吹っ飛ばされ転倒、無意識下でAMSに指令を送りランドグリーズを立ち上がらせる。ぐらつく視界で敵の銃口を視認し、ブースト急噴射、回避に成功したものの建物に突っ込む

『素人ですか』

厳しいコメント

壁を突き抜けて反対側に出、GA基地内部へ。途端に襲ってきた装甲車2両をマシンガンで吹っ飛ばし、防壁を飛び越えて外に戻る。改めて敵機体を正面に見据えた

『予想していたAMS適性を考えると軽ストレイド的なものだと思っていました、マトモな訓練をした覚えは？』

「お……お義母さん……」

『は……？』

「ごめんなさいごめんなさい……次からしっかりしますから……！」

『……………』

アンビエント、停止

『ランドグリーズ!! テレビの見すぎだ!!』

数秒静寂の後再稼動した敵に合わせて動き、今度は慎重にマシンガン射程まで近付こうと試みる、もう蹴られるのはごめんだ、節約な
ど知ったことが

が、そうになると実戦経験の差が如実に現れるようで

ついでに敵も動揺しているらしく

『その程度でリンクスを名乗れると思っているんですか!』

ライフルとレーザーの雨が降り注ぐ

困った、このままだと近付く前に機体が壊れる。向こうの射程から
でも反撃できる武器、無し

いやある

背中物理ブレードを前面に出し、しかし腕には装着せずアームだ
けでブレードを支える。モードを射撃へ切り替えると、刀身が中央
で分離した

中に入っているのは試作レーザーバズーカだ、これも近距離寄りだが、最大射程は700ほどある

『……隠し子…？』

相手より数倍太いレーザーが飛んでいく。奇襲になったがさすがに当たりはせず、余計に距離を空けられた、とりあえず全速力で引き戻し、機動性では勝っていることを確信

そのあたりでレーダーの友軍反応がひとつ増えた

『予定通りだ、全力で押すぞ』

上空に現れたAFイクリプスが基地への爆撃を始め、合わせるように弾幕も撃ち上がる。あれで本隊の注意を逸らしてから派手な攻撃に出るとの指令

『まずこのネクストを片付ける、いいな？』

『実家に帰りたいです……』

『帰るな！！頑張れ！！』

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

どっちにしる早期的な決着は必要だと思う、ライフルを取り替えた
おかげでメリーゲートの継戦能力は若干低下しているし、アンビエ
ントなんか発射可能数少なめなレーザーをトリガー引きっぱなしで
乱射している。ブレードを装備している分持久戦では向こうが有利
だし、何よりリリウムの暴走は明らかだ

『メタトロンを対AFに回します、アンフィスバエナの補給が終わり次第そちらへ回すので、それまで耐えてください。勝てるのならそれで構いませんが』

「いや…この速度は無理だわ……」

地上戦主体である事を除けば行動パターンはアンフィスバエナと似ていた、ただ搭載しているブースターが違ふようで、あつちは前後左右まんべんなく速いのに対し、今戦っているこれは前進のみに特化している、ミサイルがあっけなく振り切られるのを見て勝利するのは諦めた

「1斉射当てられればそれで勝てるんだろっけどなあ……」

『じゃあ弾数増やしますか？』

「え？」

レーダーにシステムリンクが入る。支援攻撃の弾道予測らしき直線が表示され、続けてそれが3つ

『ギガベース及びミサイル車両に支援を要請しました、目標ファースト、数は200と少々』

どうもベネッタさんは限度というものを知らないらしい

『30発ずつ行きます、合わせて攻撃を』

「りょ…了解」

まず第一陣がレーダーで踊り出す

『ち…!!』

アンテナ頭なライールにミサイルが殺到し、否応なく回避行動に移した。ファープニルはメリーゲートへの突撃体制を取っており、そしてあの前進特化だ、振り切るには向かってくるしかない

すれ違いざまにバズーカを1発

『危ね!!』

プライマルアーマーに大穴が開いたが機体には当たらず、30基のミサイルをやり過ごしてから反転、垂直ミサイル展開

『2回目行きます』

同じように30発、今度は迎撃しようと思ったらしい、マシンガン
を撃ちかけて片端から迎撃していく

ので、追加してあげた

「落ちろ落ちろ落ちろーッ!!」

通常ミサイル64発にVLSミサイル16発、個々の能力は低い
が数で圧倒する弾幕である、もし全弾命中するならライールなんぞ一瞬で消し飛ぶ

『まだまだあー!!』

こっちに向かって吹っ飛んできた

ミサイル弾幕の中突撃してくるのだ、あつという間にプライマルアーマーが無くなり、到達する頃には尖った胸部がひしゃげていた。特攻紛いの攻撃により垂直ミサイルと支援射撃は目標を見失い、レーザーブレードがメリーゲートを襲う

「づ…ッ!!」

システムが狂ったようにエラー音をわめき立て、しかしランドグリーズにぶん殴られた時のような衝撃はない、レーザーとは超高熱で焼き切るための兵器なので当たり前といえは当たり前だが

エラー音を切ってから損傷箇所を調べると、左腕全体の機能停止を示していた

首を振って目視で見る

二の腕あたりから先が無くなっていた

『メリーゲートに重度の損傷を確認。通常軍を出します、アンビエント及びメリーゲートは後退してください』

それを見たベネッタはこれ以上は危険と判断したらしい、離脱援護とばかりにとんでもない量のミサイルが撃ち上がる。だが今すぐの撤退は無理そうだ、まだファープニルが極至近距離にいる

腕ごと軽量化した機体を最大出力で加速

「こんにやろおおお！！！！」

ライルは見た目以上に軽かった、肩を押し付けただけで面白いように動かされていく

一方的な相撲を続けながら残った右腕を限界まで曲げ、ちょうどそこにあったファープニル右腕へ向けライフルを発砲、数秒で1弾倉撃ち切って、片腕の恨みはなんとか晴らした

どうもこのライフル、零距离で使うのがデフォルトらしい

が

『近付きすぎだぜ嬢ちゃん』

ビル解体用の鉄球を叩き付けられたような衝撃を受けた

「は……」

肩の散弾兵器が展開している、どうやらあれを喰らったらしい。被害は、まあ後は転倒するくらいしかできないだろう、ダメージ表示は軒並み真っ赤、メインカメラも吹っ飛んでいる

破片と部品をぶちまけつつメリーゲートが地面に沈んだ

『悪いな、しばらくそこで倒れててくれや』

残った機能、前後と右側の補助カメラ3つ、右足のみ。アサルトア

「マーは使えそうにない、ミサイルは展開状態で残っていたが、肝心のFCSがバグっていらっしやる

「ちくしょう……メリーゲート、戦闘続行不可能」

ファープニルを睨み付ける。向こうもボロボロだ、マシンガンは潰したし装甲も穴だらけ、プライマルアーマーがある以上ライルは戦闘可能だろうが

「ランドクラブ1機をそちらに追加、アンビエントは後退続行を、一時的に押し返したのち回収ヘリを……所属不明ネクスト急接近……」

オーメル以外に何か来たようだ。しかしレーダーもいつているため何も見えない、せいぜい補助カメラを動かして目視する程度

数秒ほど頑張ったら、西から何かすっ飛んでくるのを視認

「何しとんじゃワレああああああああああああああああああああああッ……………!」

判別、黒いアリーヤ

「ストレイドおお!?!」

なんかもうありえない勢いで突っ込んでくる、レイレナード製ブースターに高容量ジェネレーター組み合わせてMBとQBとOBを同時に使ってるとかそんな感じだろう、きっと

目標は、進路からしてファープニル

『がつ…!!』

逃げようとしたファープニルを超絶機動で捕まえて背中の有澤ゲレネードをどてっ腹に叩き込んだ

吹っ飛んだ

丘の向こうに消えていった

『ナイッショー!!』

「……………」

何やってんだあの人

『いや…そつちじゃない…そつちじゃないんだ……』

100基以上のミサイルスコールが地面を耕すのを空中から見守った後で着地、スクラップと化したメリーゲートに走り寄る。さすがGA製、これだけボコボコになっても原型を留めていた、これなら修理も可能だろう

「大丈夫か!？」

『え……まあ大丈夫だけど…何しに来たの…?』

「君を助けにさ!」

『違う、逆だ、何を言ってる、なんだその爽やかさは、聞け』

ノイズ（セレン）を完全無視して左手のマールヴを投げ捨て、戦闘区域外まで引きずっていこうと緑色の右手を掴む。俺のメリーゲートがそんなに重いはずが無……無理でした

いやできないって事はないが、恐らく到着前にブースターが焼け潰れる

「……しかし派手にやってんな、オームルだよな」

『状況を観察する前に武器を拾ってこい。情報はこっちで収集中だ、少し待て』

捨てたばかりのライフルを拾い直し、最も戦闘の激しい南方向を見る
ギガベースの砲撃を要として通常兵器の攻勢を退けていた、正面からのぶつかり合いではGAが優位だろう、それをやるための兵器ラインナップだ

ただ、反対側からネクストが突っ込んできたらまずい事になるかな
ーと

「こりゃ俺が来なかったらかなりまずい事になってたな」

『完全に自分の目的忘れてるだろお前』

「あーあーわかってるわかってる。ただ状況がややこしいからネクストだけ殲滅したら帰るぞ」

まずメリーゲートは除外、これは最優先防衛対象だ、既に大破してるし丁度いい。周囲には青いアリーヤと、少し離れてアンビエント。突然の乱入に驚いているのか共に停止している、依頼内容を考える。と撃破すべきはアンビエントのみ、しかしあれを倒すのは時間がかかる。リンクスの生存を考えなければ話は早い、なぜかセレン個人の指示により人的損失は避ける方向性になった

いやちょっと気になる事がな…、とのこと

『やー』

「ん？おーう」

ランドグリーズが話しかけてきた。確かリンクスはフェイと言ったか

「腹に大穴できてるが大丈夫かー？」

『なんか粒子検出器がピーピーいってるー』

「よーしお前今すぐ帰れー」

『でももう手遅れだから気にしないでいいって偉い人がー』

「えっ…そ…そーなのかー……」

とりあえずあれは置いてこう、敵意なさげだし

「よっじょー」

『貴方に言われると若干の恐怖を感じますね』

ずずと後退再開するアンビエント。あのまま撤退してくれるならそれでいい、が後ろからランドクラブがずもずも歩いてくるのは頂けない

『情報が入った、G Aと交戦中の勢力はオームルサイエンスで間違いない。投入ネクストは4機だが、既に1機が撤退、今のを合わせると残り2機だな。機体は…ノブリス・オブリージュ及びランドグリース』

右背中のマッセルシエルを選択、ミサイル16発を一気に放ってから突撃を開始する

「撤退したってのは？」

『虎柄』

なぜそこにリザリアをチョイスしなかったのか、防御に回すタイプでもないだろう

後退しつつ飛び上がったアンビエントの下に潜り込み、モーターコブラとマールヴで撃ち上げた。反撃してくるかと思っただが回避するだけに留まり、撤退することを最優先にこちらから離れていく。その先にはランドクラブ、当然といえば当然か、ハイエンド型をばたばた薙ぎ倒してきた身にとってはただの障害物ではあるものの、弾薬を持っていかれるのは頂けない

オーバーブースト点火、ネクスト最高クラスの瞬発力をもってアンビエントとランドクラブの間に割って入る

『ッ…！』

そこでもようやくアンビエントが射撃を開始した。ついでにランドクラブも撃ち始めたがまあいいでしょう

が、ライフルのみ

「……」

背後のランドグリーズ、指揮官からの指示がまだ来ていないのか棒立ちしたままだ。腹に大穴が開いているもののそれ以外に目立った外傷はない、せいぜい装甲が溶けかけているくらいで

「どうした」

『一度予想を下回った評価がじわじわと挽回を……いえ…そうですね、ぶっちゃけて言う途中から記憶ありません』

やはり、弾切れ寸前のようなだ

『そもそも貴方は何故このタイミングで…依頼主の確認はしましたか？』

「してない」

『ですよね』

元々そういう薄い関係で成り立つ職業だ、そこに余計な感情とか思想は不要である。金貰って戦争するという特性上、いちいち喜怒哀楽やってたら精神がイカれるだろう、それくらいの割り切りは必要だと思う

申し訳程度の弾幕を強引に突破して極至近距離へ、ランドクラブの砲撃は命中率がアレだったのてひとまず無視し、マニュアルで照準しながらモーターコブラを発射

数秒続けると、アンビエントのライフルが吹っ飛んでいった

「まあどっちにしる依頼受けちまったんだ、しばらく寝てくれ！」

急速回転、反対を向いてマージンを手放す

何をしてるかリリウムは察したようで、クイックブーストでの後退を試みる。だが遅い、こういう場面で勝つためのアリーヤだ

逆噴射が機体を動かす前、格納ブレードがアンビエントの下腹部をぶった斬った

下半身の機能を失い、メリーゲートほどボコボコではないものの同じ末路を辿る

勢いそのまま回転し続けて、落下する前のマージンを掴んで再起動

『ッ……まあ、この場合は仕方ないでしょう、殺されないだけマシ
というところで』

「おう、悪いな」

『ただ一言言っておきましょう、○ね』

怖

面白いくらいに無線がパニックを起こしている、そのおかげで前線まで指示が届かず、各部隊の判断で防衛戦闘を続ける羽目になった基地の北側にいるのは竜巻か落雷か、とりあえず人の太刀打ちできない何かである事は間違いない

『現状、アレとともに戦えるのはあなたしかいないと思います』

「なかなか面白い冗談をおっしゃる」

左側の作業車にムーソライトを装着してもらって、その間に右腕をコンテナに突っ込んで、オーメル製集束ショットガンを掴んだ

戦況はなんというか、ミッドウェー海戦終了後の旧日本軍みたいな感じである、逆転不可能とは言えないが、主力であるネクスト部隊が半壊に陥っている、まあ向こうも結構な打撃を受けているが

『補給完了しました、戦線復帰を』

燃料パイプが引き離されたのを確認してから前進、ハンガーから歩いて出る。丁度、AFイクリプスが大炎上しながら落ちていく所だった

『勝てる気はまったくしないがやるしかないか。行くぞ』

司令塔の上からメタトロンが降りてきてこちらの援護位置に付く。
とりあえずやるべきはあれだ、帰ってきた所で天災と遭遇したヴェ
ーロノークをハンガーまで後退させる、そうしないと南の戦線が少
しばかり維持不能になってしまう

「仕方ないか。アンフィスバエナ、嵐の中で輝きます」

『いやそこは突っ込んで』

南に移動したストレイドを追って前線に近付く

無線が使い物にならなくなってからだいぶ押されてきていた、防御
側最大のアドバンテージである基地機能が思うように使えないのだ、
無理もない

付け加え内側で暴風雨みたいなのが暴れていては

『えいぷーちゅわあああああああん』

『ひああああああああああつ！！！！！！』

否、嵐でも暴風雨でも何でもない、あれは変態だ

「どうしよう、ツッコんだ方がいいのかな」

『うんまあとりあえず突っ込んでけ』

更に前進、2機の間割って入る

「ちょっとなにやってるんですか！！警察呼びますよ！！」

『いやお前がボケてどうする』

ショットガンでストレイド正面に弾幕を張り、なんとかヴェーロノークを後退させようと試みる。遠距離からメタトロンも射撃を開始し、いわゆる十字砲火というものを展開

が

「へ…？」

なんか黒いものが緑の炎を出しながらすれ違っていた

『あつっ！！！！』

背後で爆発音、直後にヴェーロノークがレーダー上から消失する

『ようやく来たな、噂は聞いてるぜ天才さんよ』

ガラガラとヴェーロノークの破片が散らばって、黒いアリーヤがこちらに振り返る。出てきてから数分、目標不達成が確定した

まずい、あの速度は反応できない

『…予備戦力をすべて出します、弾切れするまで消耗戦で行くしか……』

少なくともベネッタは今ので心が折れたようだ、オーメルは二次にして、まずこれをどうにかすると

「いや…とりあえずやってみる、戦力は保持しといて」

『しかしここでネクスト全滅なんて事になったら……』

「大丈夫、引き際は考える」

どれにしる逃げられるとは思えないが、こうなってしまったのだ、戦うしかない

ストレイドを正面に見据え

『行くぞ！！』

突進を開始した

s h o o t a n d s h o t a n d b e t r a y e d .

背後からのマシンガン弾幕 回避可能

真下からのライフル撃ち上げ 回避可能

近距離マッセル 回避可能

超加速グレネード かい…ひ…？

『一瞬だけです。マッハ3出てます、ここまで来るとFCS処理が間に合わないはずなんです。』

どうせマニュアル照準だろう、さっきからそうだ、コンピュータ処理とは思えない攻撃が時折混ざってくる

ロック速度もレーダー更新もまったく足りていない、双方速度重視という組み合わせでは攻撃タイミングは一瞬、致命的だった

『駄目だ、この距離じゃ威嚇にしかならねえ、前進するぞ』エノクが言うが、それを確認することはできない、口を開く余裕すらないのである。止まったらそれで終わりだ、普通に飛んでいるだけではエネルギー管理し切れず、たびたび地上に降りる事を余儀なくされている

ライフル連射からのミサイル攻撃を横に回避したらマシンガンの網に搦め捕られ、プライマルアーマーを持っていかれる。そうになると次の攻撃は絶対に避けなければならず、必然的に再度横へ回避、速度を失って距離を詰められる

さつきからこの繰り返しだ、いまだかつてここまでバックブースターを酷使した事があっただろうか、後退能力も残しておいて本当に良かったと思う

『え、すげえ、当たんねえ、なんで？』

それだけ必死にやってるにも関わらず相手は余裕の口調だ、嫌になつてきた

『いや…でもなんか機動に見覚えが……』

見覚え？少なくとも戦場で遭った事は無いはず。というか、一度遭ったらそれつきりだろ

と

「ッ…!？」

グレネードが左肩のフレア射出機を吹っ飛ばしていった

回避は間に合っていたはず、相手が相手だ、偶然ではないだろう、なら機動を読まれているという事。普通は回避パターンを変更すれば済む事だが、今まで戦った中でライールの速度についてこれるのはほとんどいなかったのだ、レパトリイはたった2種類、従来通りの回避と、家具屋の店主に教えてもらった回避。飛んでいる事前提での従来通りでは効果が上がらないと思い、今やっているのは教えてもらった方、となるとリスクは高いが空中戦を仕掛けるしかない

『オーケーわかった、貴様には水底が似合いだ！！』

ブースターを下に噴かせる直前、あの猛突進が発動した

旧式ながら気違いじみた出力を誇るアリーヤ標準ブースターと、クイックブーストの制限解除した最大噴射を組み合わせているのはなんとか見える。問題はその後だ、黒い何かがちらついているようにしか見えない

ブレードは間に合わない、アサルトアーマーも危険すぎる

なら勘だ

オーメルさんの腕武器はどいつもこいつも格闘できそうなデザインで助かってます

『お！？』

ショットガンのフレームがグレネードの砲身を下から押さえ付けた。途端に機体のOSが絶叫したが、まあいいとしよう、目立った障害は無い

『すげえなマジで、なんつーか動体視力？』

「あんたよりや低いと思いますがねえ……！！」

『自分以外止まって見えたり』

「それは無い……っつーか何か忘れてません？」

左腕のムーンライトに火を入れる

「……ああ……完全に忘れてたよ……」

衝撃

「つう……ッ……！」

紫色のレーザーはストレイドまで届かず、マーヴの殴打により機体ごと弾き飛ばされる。反射的にメインブラスターを出力したが、姿勢が安定する頃には緑色の粒子しか残っていなかった

レーダーで索敵して、後方600ほどで小刻みに動いているのを確認。何をしているのかと思ったものの、後方といえばメタロロンが陣取っているはずで

『近付いた途端にこれかよ!?!』

反転し、フロート形態での高速移動でストレイドの砲撃から逃げ回る049ANを視認、やたら走り回っているせいで基地施設が次々爆発していく

「ここじゃ駄目だ!北の方まで連れてって!」

『無茶言っな!?!』

レーダー上では向こうが一番何も無い、派手に暴れるならあっちだろう。唯一ランドグリーズが陣取っているが、さっきから微動だにせず、いつの間にかネクストにあるまじき脅威レベルまで引き下げられていた

手が開いたついでに全体の戦況を確認してみる、通信を管制塔へ

「どつ?」

『4対5の9回表ツアアウト、二塁です』

修羅場らしい

『ところで、悪いニュースがあります、聞きたいですか?』

「いや別に」

『聞きたいですか？』

「……はい」

速度を殺さずに大回りしたメタトロンが北に進路を取る、受けているのはミサイルに変わっていたが、周囲が大破壊されるのは変わらずその破壊の先端、メタトロンを追って北へ

間もなくランドグリーズを視認した。相変わらず停止中だが

『西の方に、少々、ソナー反応が』

「…ん？」

『いると思われます、アレが』

アレ

ああアレか

『この状況であのAFが出てくるという事は、やはりオーメルのものか…』

「オーメル製だけどオーメル所属じゃないとか聞いたけど」

『は？その情報、ソースはどこです？』

家具屋のおっちゃんとは言えないな

『……とにかく注意してください、オーメルはともかくこちらに攻撃してくるのは確定し………』

と

通信が切れた

『コードを受信、DAMS起動』

あのライールは時間かかると判断してまず狙撃四脚を追い掛け回していたら、通信機から何か漏れてきた

「む？」

見てみればランドグリーズと回線繋ぎっぱなしだった。あれから無音だったという事はずっと黙りこくっていたのだろうか、もしくはコジマ浸けになったか

『AMS停止確認、機体直結、確認』

まさか本当に浸かってしまったのか様子がおかしい、何かコンピュータアナウンスのような機械的な声だった。さっき話した時はもうちょっと抑揚があったはず

『おい、目標が停止したぞ』

セレンの声が割り込んで言う。見れば追っていた四脚が完全停止していて、大破した後みたいにだらりと両手を落としていた。あれは完全に機能不全だ、そこまで攻撃した覚えはないのだが

「なんだ降伏か？通信来てる？」

『別に来ていない、というか繋がらな……いや待て、何かおかしい。戦闘が止まった』

GAとオーメルの戦闘は東西南北すべてにおいて展開していた、北については多少の紆余曲折の後収束していたが、オーメルが猛攻をかけているという状況は変わらない。そして、ドンパチが続いている限り世界最高峰の騒音が発生するはずである

それが突然止んだ

『どうなってる、どこにも繋がらない』

「あー？」

とりあえずメリーゲートとの通信を試み、それからアンビエント。双方共にスクラップ状態のままだが、通信機は健在のはず

結果、ノイズしか聞こえなかった

「ふむ……そのガリと歯茎諸君ー？」

『はい』

『な、何か…？』

アンフィスバエナとヴェーロノークとは通話可能を確認、片方はスクラップだし、単純に壊れたという可能性は低いだろう

『駄目だハッキングすらできない、施設機能が完全に落ちてやがる』

「通常軍は？」

『双方共に完全停止だ、まあ一部の猛者どもは車両を捨ててライフで撃ち合ってるようだ』

とりあえず現状で唯一稼動しているネクスト、アンフィスバエナへ寄って行く。つい数十秒前まで敵だったような気がするが、細かい事は気にしない事にしよう

とにかく静かだ。さっきまで湯水のように火薬が消費され、リンクス戦争も真つ青の大激戦が繰り広げられていたはずである。炎上する建物から上がる黒煙くらいしか目立った動体が無いというのは、さながら戦場跡地の様相を呈していた

一応、戦闘真つ最中のはずである

「どうにか本部と連絡取れないのか？何が何だかさっぱりだ」

『そりゃ簡単ですよ、機体から降りて徒歩で建物入ればいい』

「そうだな、じゃあまずはこのあたりのコジマを一掃する所から始めようか」

『まずPA切りますよ』

「え？マジでやんの？」

せーの、でプライマルアーマーを消してみる

『じゃ、ちょっと行ってきます』

「あ、マジで行くんだ」

企業は環境汚染なんぞ気にしていないと思ったが、大破時のコジマ漏洩対策は意外としてあったようだ、何を隠そうこの区域内だけでスクラップ状態のネクストが4機いるにも関わらずコジマ濃度は下がりは始めている。安全値まではほど遠いが、本部施設まで行く頃には結構な値まで下がるかもしれない

コジマ濃度低下、低下、低下

上昇

『誤情報かと思ったが、まさか本当にいるとはな。この事態は君の仕業か？』

気付けばネクストが1機増えており、その背中に生やした三連装レーザーからノブリスオブリージュと判断できる。装甲が所々ボコついているあたり、応急処置明けらしい

とりあえず、これで稼動確認は3機

「消せ」

『は？』

「その無駄に汚染を撒き散らす緑の膜を今すぐ消せ」

『な…何故…』

「いやもうむしろ消えろ」

『……』

また下がりはじめた

「それで、動ける動けないの基準は何だ」

『君は独立傭兵だろう』

「ん？ああ」

『私はローゼンタールだ』

「おう」

『動けなくなっている連中の所属は？』

「GAとオーメル、あとBFFか？」

と、言うてから気付く。アンフィスバエナも独立傭兵、家出中だがヴェーロノークはインテリオル。企業で区切った結果のようだ

アンフィスバエナがハンガーに消えていくのを確認してから手近なレーダー施設まで移動し、屋上に突っ立っている全方位レーダーを観察してみる。壊れた様子は無い、電源も生きているようだ

『おい、機体のFCSからプラグ引っ張り出して繋いでみる、復旧できるかもしれない』

セレンから無茶振りが来た

「俺あメカニックじゃねーぞ」

『この元凶を探す必要があるだろう、こちらのレーダーではカバーしきれん』

そりゃ安全圏の輸送機からじゃ限界があるだろうが

仕方ない、と座席後方の配線ターミナルを開けてみる。コードもユニバーサル化が進んでどれがどれかわからないが、なんとかレーダー用のコードを見つけ出してぶっこ抜いた

と

『ん…？ランドグリースが動き出したな』

「レーダー切った途端にかよ？」

ノブリスのレーダー上ではあのアリーヤが動いているらしいが、今ストレイドのレーダーは真っ暗だ、何もわからず

『おかしいな、あれは完全なオームル所属だったはずだが。それともこの分け方自体が間違いだったか……………』

バツゴオオン！というコンクリート破砕音、同時にジェラルドがしゃべるのをやめる

「なんだ！？」

咄嗟にコードを手放して機体を反転させる、確認できたのは壊れたGA施設と、倒れたノブリスと、青いアリーヤ

あの大型物理ブレードで張り倒された、と見ていいようだ

『接続良好、敵性兵器2を確認、破壊開始』

無機質な声

「おいおい、味方が混ざってるぞ、ちゃんと判別しろよ」

『他人の心配してる場合か、来るぞ』

応戦するしかないか

リーダー切ったままだというのに

Those who break a shield

駆動系統、まったく異常無し。コジマ回りも重大は障害は見られず。武装健在。ただ、衝撃でぶらぶらしていたレーダー行きのコードがちょん切れた

なんというか、久しぶりだ、この水平感の無さ

『どうした？』

「どうしたと言われてもねえ……」

A F用のドックだろうか、天井は無く、アホみたいに長いクレーン数本と、その根元の作業施設で構成されている。今いるのはパーツの保管倉庫だが、ランドクラブの装甲板が無ければここも突き抜けていたかもしれない

まあ簡単に言うと、同じ事をされたのだ。レイレナードOBを使った猛突進、零距离グレネードではなく金属板での殴打だったが

「突っ込んできてからの反応速度が予測より2倍近く速かったな、ありや訓練云々の問題じゃねえぞ」

『そうだな…それはこちらでも確認している。正確な値はまだ出ていないが、お前と同じかそれ以上』

「はは、もう超えられたか？短かったなあ俺の時代」

とりあえず首を動かして前方を見してみる。味方であるはずのノブリス相手にランドグリーズが戦闘、というかボコボコにしていた。象徴性重視といってもランク4、それなりの実力は持っているはずだが

このままでは1分もたないだろう、戦闘復帰するべく転倒していたストレイドを立ち上げらせる

『一応、行動パターンはまったく変わっていない、まっすぐ突っ込んでくるだけだ。場数の差で勝てるだろう、基本能力で完敗だがな』

リンクスとしての適性で負けている、そう言われたのは傭兵として働き出してから初めてだった。どのような相手であれ、この4〜5年間でセレンの口からそれが出てくる事は無かったというのに

『大事をとって撤退するか？戦果としては十分だが』

「誰に向かって言っただよそれは」

プライマルアーマー再展開、残弾少ないマープを捨ててレーザーブ

レードに切り換える。レーダーがお逝きになられた現状、ロック手
段は熱源探知だけだ、役に立たないマッセルもパージ

マシンガンとグレネードの弾数は…ネクスト1機だけならなんとか
なる

「おい、新人にボコられてちゃ世話ねーぞー」

『開始早々吹っ飛んでいった奴に言われたくはないな…!!』

戦闘参加する前に補助カメラをすべてサーマルに切り換える。レー
ダーが使えないのだ、赤外線でやりくりするしかない。この状態で
どこまでやれるか

なおこの『どこまでやれるか』は『どこまで損害を抑えられるか』
という意味である

少なくとも、普段は

『エネミー1の復帰を確認、多目標戦闘へ移行』

ランドグリースの物理ブレードが腕から放れ、中のレーザーバズー
カが展開される。それをノブリスに向けつつ同時にマシンガン2丁
をストレイドへ

鉄の雨が襲ってきた

「ちょっと待てFCSがおかしい!!」

『確かあの武器は独立した火器管制装置を搭載していて両腕武器と並列使用可能だったはずだ！！実用性皆無で開発中止になったがな！！』

つまり最大で3目標を同時攻撃できる訳か、ザコ掃討くらいには使えそうである

予測射撃を通り越してもはや预言射撃レベルの弾幕を更なる预言回避で突っ切って反対側へ抜け、反転してからマシンガンを撃ち返す。当然のように当たらず、反撃から逃げるために再度反対側へ突っ切る

これは駄目だ、弾が足りない。ここまでワンサイドゲームかつ最低限の攻撃量といってもネクスト6機目だ、普通なら遙か昔に撤退している

数回交差した後にバッククイック数回分の距離を取り、OGOTOの砲身を展開。距離400、相手も突撃してきてるから、照準する時間的余裕は…だいたい0.1秒くらいか

頭がおかしいとよく言われるが、本当におかしいのはそれを可能にするアリーのレスポンスである

『反』

オーバーブースト始動、噴射と同時にすべての前進力を注ぎ込む。3000km/hをゆうに超える速度で極至近距離まで接近し、有澤グレネードの太い砲身を

「が…ッ!？」

突き付ける前、ブレードを脚部に引っ掛けられた

『撃に成功、追撃実行』

1回、2回と横転して、コンピュータ任せの姿勢制御でなんとか制動をかける。止まった途端にマシンガンとレーザーが飛んできたので息つく間もなく戦闘機動を再開

今のは読まれていた、それも完全に。速度一辺倒の天才ライルを圧倒した猛突進を被験体上がりの新参が攻略したのだ、若干の動揺を覚える

『あー…劣勢のところ悪いが…GAのハンガーから何か出てきた。主戦力はノーマル、GA製だが識別コード上では所属不明、数はまあ、いわゆる”ありったけ”というやつだな』

闘牛よろしく突っ込んでくるランドグリーズをかわしながら一瞬だけ視界を横へ。確かにノーマルACが複数、施設内から現れていた。状況が状況なのでたいした数ではないが、動けない目標を蜂の巣にする程度なら十分事足りる

考えている間に、味方であるはずのGA兵器群を掃除し始めた

「いでで……どこもかしこも反乱ブームってか…？」

『むしろこの戦闘自体が仕組まれていたという可能性も……ちょっと

と待て、依頼主はインテリオルだったな』

セレンとの通信が途切れる

『あちらの援護に回る、ここにいっても足を引っ張るだけだろうからな』

「物好きだねえ」

『君もな』

出てきたノーマルに向かっていくノブリス。ランドグリーズは反転を完了させたものの再突撃はしてこなかった、突っ込むだけじゃ勝てない事を悟ったらしい。そうなるからこそちから攻めるしかない訳だが、突進してすっ転ばされた手前、下手に攻めたらこちらが危うい

結果、沈黙

「……………メリーさんの中身ー中身ー中身ー」

『落ち着け、口ずさんでる歌が危険すぎる』

と、そうだ、近くに本人がいるのを忘れていた、もし聞こえてたら軽く死ねる

『……………なあ……………』

「ん？」

睨み合いを続けているとセレンからの通信が復旧。何故か声が震えていた、なんというか、MK5（死語）的な雰囲気である

.....

MK5とはマジでキレる5秒前の略ですね……

『今日働いた分の報酬が手に入らないと言ったら…お前はどつする…？』

「すまん、よく聞こえなかった、何だった？」

「だから……」

すう、と、息を吸い込む音

『依頼主が完全にドロンしやがったんだあああああ！……！……！』

「く、なんだってー！！！」

ランドグリーズのメインブースターが尋常じゃない噴射炎を出した

「うおおしまったああああああ！！！！」

一瞬で極至近距離まで迫ってきたアリーヤにほぼ脊椎反射でブレードの迎撃をかけ、しかし物理ブレードを少々溶かすのみに終わる。こういう時エネルギー兵器は不便である、防御に使うことができない

振り抜いた直後の脇腹へ殴打を喰らい横へ吹っ飛ぶ。腰の間に軽度の障害発生、すぐにセレンが脚部の可動域を増やして対処

『敵腹部に破口を確認、撃破可能』

転倒するのはなんとか避けて、次に対応するためランドグリーズを再捕捉する。距離役5メートル、測定機が壊れたか、いや壊れてない

ガゴン！！と衝撃

「アッー！！」

『いや…お前は…この状況で……』

開いた穴にブレードを突っ込まれた

それだけならよかったのだ、レーザーのように焼き切られる訳でも無し、普通に後退すれば引き抜ける

が、フレームが開いてレーザーバズーカがこんなにちはしてきた時はふざける余裕を失った

「ちょ待て待て待て！！！！！！」

全速後退で引き抜きにかかるも広がったブレードでしっかりロックされて瞬時に離れられず、いくら反応速度の速いアリーヤでもレーザー発射よりは遅い、カウンターも間に合わず

機体全体に衝撃

『チエストオオオオオオオオ！！！！！！』

真横からやってきた雄叫びによってランドグリーズが転倒し、レザバズもストレイドから引き離された。入れ代わりで正面にきたのはややカラフル配色なごちゃまぜアセンネクスト

『お待たせしました、これより残存戦力での支援を開始します』

続けて青黒ツートンカラーのライールが飛来、ショットガンをぶちまけてランドグリーズをさらに引き離す。アンフィスバエナだ、それはいい、問題なのは目の前のオーギル頭

「……セレン、あれ」

『セレブリティ・アツシュ』

「だよな」

『だいぶ変わってるが間違いないな』

「それがさ、かつこよく見えるんだ」

『ああ、奇遇だな、私も同じ幻覚を見てた所だ』

ライフル2丁にASミサイル、全距離で戦える汎用性を捨て、恐ろしく単調な武器構成になっているものの、エンブレムは間違いなくアッシュのものだ。少し見ない内に成長しやがって

『ややややってやったぞこんちくしょうじゃんじゃ…散々バカにしやがってザマーみるHAHAHAHA……』

前言撤回

「おいおい無茶すんなよ」

『あんだけ言われてタツクルひとつかませない男なんていねえ!!』
使い方を心得ていらっしやる

『いや本当にやめろって言っただけだ』

そうでもないらしい

『とにかく、今こちらが動かせるのはネクスト1機とアッシュ1機です。本来その噛ませ犬を当てるべき有象無象はノブリスが止めているので、死ぬほど不本意ですが今のうちに連携して撃破を』

「はははははwww」

そりゃタツクルがましたくもなる、妙に納得してしまった

しかし、復旧できたのはオペレーターの通信だけのようだ。私物を

寄せ集めたか、通信機だけG Aのネットワークからぶっこ抜いたか

「ま、ラウンド2といこうか。いつも通り罠を頼む」

『いや罠になった覚えねえんだけど』

衝撃の事実だった

- - -
- - -
- - -
- - -

『行けよ、ほら行けよ！！』

『無理無理無理だ！！』

『金属板で殴られても死なねーから安心してボコられてこいや！！』

『さっき死にかけてたのはどこのどなたです！？』

などと言い争いながらも意外と連携がうまい最凶&最弱コンビである。ド素人丸出しのセブリティアッシュを前面に据え、援護位置に張り付いたストレイドが攻撃してくるランドグリーズへひたすら迎撃し続けている。確かにアッシュが危険に晒されるほどストレイドの攻撃タイミングが増えるだろうが、ダンにそれを求めるのはいささかかわいそうというか何と言うか

「俺が囷やりましょうか？」

『お前は駄目だ、速すぎる』

あの重武装で追隨してきたあんたなら軽々こなすだろ冗談きついでとか言いたくなったが、嫌だというのなら仕方ない、空中からぶつた斬る機会を伺う作業に戻る

とりあえず今の状況を簡単に説明すると、『3対1で囲んでるにも関わらず被弾らしい被弾をしないランドグリーズは何なのか』という疑問で表せる。消耗しきっているとはいえ、現行最凶、暴れる様は正に天災、カロード発表の仮ランクでぶっちぎり1位のストレイドがいるというのに。確か被験体上がりの新人だったか

「最近の新人ってすごいね」

『『『お前が言うな』』』

「えっ」

あらゆる場所からツツコミが飛んできた

『……とにかく、このままでは埒があきません。予備戦力が揃いも揃って寝返りやがりましたので、ノブリスも限界が近いと思われるます』

『正確な値は？』

『電子機器がダウンしているため確認できませんが、確かノーマル50、車両120』

それを予備戦力と言えるかどうかは別として、ノブリスの限界とは弾切れのことを指しているんだろう。ブレードは装備していたが、特化でない以上振る度に被弾することになる

それから目下戦闘中のランドグリーズ。いつの間にか空中から観戦してるだけになってしまったが、下の2人は必死のようだ。ブースターの関係かストレイド以上の瞬発力がある突進で攻め続け、有効

な手を打てていない。やはり息切れが辛いのだろうか

『そちらでアッシュのオペレータをできますか？掃討戦に最適化してあって、かつFCSに細工してあるんですが』

『リンクさえできれば可能だが…その盾が無くなるとこちらが厳しい』

『盾！？』

オペレーター2人が話し合っている間にノブリスへと視線を向け、少々押され気味であることを確認、それから地上へ降りる。軽くランドグリーズを眺めてから、通信をストレイドへ

「報酬無くなっても帰らないんですね」

『まあまだGAからふんだくれる可能性が残ってるからな』

ネクスト3タテ決める寸前までやっといて金貰えるかどうかは怪しいが

「それで、もしもの話なんですが、フルで弾丸詰まった武器があったらどうなります？」

『お前そりゃそんなもんあったらこんな突進女なんてピーピーポーポーだよ』

オーケー、実行してもらおう

「ベネッタさん、俺の予備パーツ出せるようにしてー」

『換装ですか？』

自分ではないが

パーツが詰まっているコンテナは施錠装置のみのアナログな代物なので開かないという事は無いだろう、そうなれば、天変地異が再臨することになる

「言いたい事はわかりますね？」

『……え、使っていいの？』

「致し方ないので」

『よし、気が利く君には後でコジマパンチをプレゼントしよう』

くっそいらねえ

伝えた途端にストレイドが後退を始め、連動してセレブリティアッシュもノブリス救援のため戦闘から離脱

結果

『攻撃目標をエネミー4へ変更、ブーストバランス調整』

ロケット打ち上げよろしくランドグリーズが飛び上がってきた

「まそうなりますよねー！！」

消費の高いアリーヤにクイック特化の地上専用ブースターで空中戦となると、やはりバツミたいな動き方になるらしい、ブレード殴打を回避するとそのまま落ちていった

着地を狙ってグレネードを叩き込んでみたものの、着弾する頃には既に移動済みで、虚しくアスファルトが爆発する。大きく回って反転する機動から再び大ジャンプが来るものと予想し、頭上を取るように前進、攻撃範囲外へ

『機動修正、噴射点を追加』

そうしたら空中で180度曲げてきた

「馬鹿な！？」

サンシャインやアリーヤを殴りまくってたいたダメージを与えられない金属板であるが、ひよろひよろライルになら結構な脅威となるだろう、いくらPAが厚いとしても弾丸とは質量が違う

ブースターを切って真下へ落下し、寸前で攻撃をやり過ごした。そのまま地上まで降りて、できる限りの距離を取る

『1分もたせろ！！そうすりゃ俺がなんとかする！！』

ストレイドは無事ハンガーに入れたらしい、何か”ロボットが壁に体当たりしたような派手な音”が聞こえた気もするがそれはいいとする。彼が好みそうな高火力武器はあまり無いと思うが、まあなんとかしてくれるだろう

問題なのは自分が1分も稼げるかだ

『平均速度計測、射撃兵器での攻撃困難、戦闘比重変更』

恐ろしい瞬発力でブレードレンジまでたどり着かれ、捻ってかわすと急速反転して畳み掛けてくる。この理不尽な反応速度は見覚えがあった、それもついさっき

「どいつもこいつも……！！」

運動性能においては最高峰に位置するライールの腕部をもってしてもギリギリ間に合わせるのがやっとというのは意味がわからない、『動かそう』と思ってから実際に動き始めるまでの時間が極端に短いのはわかるが、実際に計算してみるとやはり意味がわからない

なんとか合わせて、ムーンライトで迎撃をかける

『ッ……』

この大剣がどれだけ危険な代物かは知っていてくれてよかった、久々にランドグリーズが退いて、空中に戻る機会を得た

『対空戦闘ではそれなりに動きが悪くなるようです、吹っ切れてる事には変わりありませんが』

というベネッタからの報告。確かにあの機体では飛行は無理だし、いちいち助走する必要があるとなれば相性は悪くないかもしれない、あくまで理論上では

そして反撃するなら突っ込んできた所をカウンターするしかない、自分より低速の相手しか考えていなかった以上、高速で走り回る機体に当てられる武器を仕入れなかったのだ

「相打ちはまずいよねッ!!」

跳ね上がってきたランドグリーズへショットガンを撃ちかけ、その後左へ回避

『あなたの機体はGAでは生産していませんから、修理不能が出た時点でアウトです』

追隨するようにクイックブーストしてきたのでムーンライトで威嚇、追い払う。そうしたらEN警報がピーピー鳴り始め

『うちの製品でよければ上層部が喜んで用意すると思いますが』

「マジ勘弁……!!」

高度を下げてエネルギーを得、しかし再び浮き上がる余力は無い、落下を続けつつ後ろへ吹っ飛んで何らかの建物屋上へ着地、滑ってまた落ちて建物の影へ

「そもそもこれ以上のパイロード手に入れた所で何積みばいいかまったくわからな…うおおお!？」

セメント壁を派手にぶっ壊してランドグリーズ出現、機体と対照的な赤い複眼が余計に恐怖感を増幅させる。回復しきっていないENを再び消費して反対側へ

『案外、ライールの燃費は悪くないんですが、その大剣がすべて台無しにしてますね』

それはわかってる

こっちがこれだけカツカツな思いしているというのに向こうは息切れのそぶりすら見せない。ジェネレータに細工してあると思えなかった

オーバードブースト点火、足りない推進力はPAを削る事によって補い、なんとか距離を確保する。残った最後のエネルギーで180度反転し、右背中のグレネードを選択

防御力を維持できなかったが、まあ壊れはしないだろう

『機動予測射程範囲内、進路調整』

感覚はさっきと同じでいいはずだ、であるなら、来る場所がわかっ

ている時ほど対処しやすいものはない

左腕を機体の前でかざし、とりあえずコクピットは守る

そこまでやって、ランドグリースがオーバードブーストを始動

『攻撃開』

照準も何もしないそのままグレネードのトリガーを引いた

まっすぐ前方に発射された砲弾は突如現れたランドグリースによって射線を阻害され、信管が作動、派手に爆発する

『しッ……い……!?!?』

しかしそれで猛突進が止まる訳もなく、体当たりを喰らってもつれながら吹っ飛んでいく

「おっしやあああああああ!!!!!!」

不完全ながら迎撃に成功したのは純粹に嬉しかった、よくよく考えれば何の事はない、眼前に来るのはわかっているのだから

「あああああだば!!!!!!」

勢いそのまま建物に衝突

『エネミー…4…脅威レベル修正、シンクロ障害、接続深度再設定、最優先目標として戦闘再開』

まずランドグリーズが動き出し、一歩退いた間合いからブレードを腕から引き離す。流れるようにレーザーバズーカを展開しつつマシンガン2丁をアンフィスバエナへ

逃げよう、と思ったが、破壊したコンクリ壁に背中が引っ掛かり

『いいもん持ってたんじゃないかあああああ！！』

先程のセレブリティアッシュとまったく同じ動きでストレイドが現れ、ランドグリーズをぶん殴った

『づ…ッ！！』

ただ殴っただけではない、手首付近に装着された武器から鋼鉄製の杭が飛び出し、ランドグリーズの物理ブレード中央に命中、射撃を失敗させると同時にフレームを畳めなくした

不協和音を極めたような金属音が鳴り響き、火花を散らしながらパイルバンカーが突き立てられる。内部で充填されていたエネルギーが誘爆を起こして、レーザーバズーカの砲身が脱落

『主武装に重大な損害…ノイズ増大…DAMS接続維持不能…!!』

なぜコンテナの一番奥で一度も使われず化石となっていたMUDANを引っ張り出してきたのかは置いておくとして、黒煙を噴き出すランドグリーズから全速で離れ安全を確保する。無機質だった相手の声もだいぶ人間らしさを取り戻しており、動揺している事を如実に表していた、もう一押しか

『余裕ができたなら駆動系を破壊して止める、葬り去るには惜しいものが山ほどある』

オペレーターから指示が飛び、まずストレイドが行動を始める。左手のマージュを乱射しながら一気に距離を詰めて右手から杭を発射、既に壊れた物理ブレードで防御し、根本あたりに2発目が突き刺さる。背中に何か積む暇は無かったらしい、ストレイドの武装はそれだけだ

『畳み掛けるぞ！撃ちまくれ！』

言われたので、上空からの火力支援を行うべくグレネードとミサイルを選択、どうせ命中は望めないと思ったため恐慌状態に陥った新兵の如くトリガー連打する

爆発、爆発、思ったとおり高速で動き回るランドグリーズに命中することは無く、むしろストレイドの方が着弾点に近い

その爆発をかい潜りながら鬼ごっこするアリーヤ2機はほとんど互角、いや青い方の動きが少しずつ鈍っていく、逃げ回るのがやっとという有様だ

そうなるとどんどん移動していく訳で

『ええいこっちへ近付けるな!!』

十数秒でノブリスの背後まで到着、前を見ていなかったらしく、裏拳気味に振り抜いてきたブレードをよろけるように回避した。連鎖的に速度を失って、依然連射中のグレネードが追いついてしまう

アスファルトとは違う着弾音

『ブースター…致命的な損傷…起動限界到達…DAMS…強制シャットダウン……』

トドメとばかりにパイルバンカーが左足へ突き刺さり、つんのめって転倒

『ぎゃああああ!!?!?』

2、3回転したのち、セレブリティアッシュに直撃して停止した

『……………止まったか？』

「まあ止まってはいますね」

『機体壊れてる？』

「カメラアイは死んでいます」

『……………オーケー、共同撃破ってことにしよう、最後のトドメはセレブリティアッシュ』

『あ…俺なんだ……………』

ストレイドの横に降りて、停止したランドグリーズを正面に見据える。隣ではセレブリティアッシュが立ち上がっていて、少し離れた場所のノブリスオブリージュは、最後のノーマル1機を片付ける所だった

「一応片付いたけど、そっちはどう？」

『かなり絶望的です、メインサーバーがウイルスに感染したのは判明したんですが、有線無線問わず広がれる所まで広がりきってしまつて』

基地の状況はそんな感じらしい。機能ダウンは一斉に起きたので、常軌を逸した感染力をもつて数秒のうちに末端まで行き渡った事になる、ワールドネットワークのファイヤーウォールが頑張ってくれなかったらとても楽しい事になったんだろうが

『セレン・ヘイズより全機へ、機体状況を知らせてくれ』

今度はストレイドのオペレーター。いまだほとんどの兵器が沈黙している、全機というのはここにいるネクスト4機という意味だろう

『わかってるだろうが一応言っぜ、レーダー使用不可、行動に支障はないが色々とガタが来てる。それから腹に大穴、コジマが漏れそうだ』

『あー、セレブリティアッシュ、装甲がボコついてる以外は問題無し』

「アンフィスバエナ、腕がやや曲がってるのと各部間接で異常音、残弾僅かだけどブレード1本あればなんとか」

『ノブリス・オブリージュ、これ以上の戦闘行動は不能。指揮官にも報告しないといかんから私は帰らせてもらっぞ』

破壊天使がふらふらと離脱していく

『…ああそつだ。サシでの勝負はお預けにしよう、次の機会

にな』

正体不明の寒気再び

白い機体が砂丘に消えていくのを確認してから視線を戻し、ランドグリーズが再起動していない事を確認。普通はしないだろうが、ストレイドなんかさっきからガン見している、それほど恐ろしかったという事だ

とりあえず、コクピット内で腕を伸ばして深呼吸

『多少の障害はあれ残りはまだ動けるようだな』

地響きがし始めた

『じゃ、第3ラウンドといこうか』

ボツゴオ！！と砂漠が爆発する

中央から浮上してきたのは巨大な鉄の塊。ステイグロに近い流線型のフォルム、色は砂漠と同じ黄色で、砂中から完全に浮上して航行を開始している。砂に潜れる機械なんてこの世には1機しかない、1機あれば十分だ

「勘弁してください…」

『まだいるぞ、北東から巨大な飛行物体、インテリオルの識別コードだ』

次から次へと、お前らはここを人の住めない土地にしたいのか。などと考えている間にA Fがハイレーザーを斉射してきたので散開して回避、B G Mはダンの「ふわああああ！！」だった

『インテリオルが何しに来たんだ？』

『わからん』

北東からの巨大物体もA Fと見ていいだろう、ただ所属不明ではなくインテリオル、…インテリオル？

何か忘れているような気がする

『ちょっと何やってんですか！！変な行動するなって言ったのに！！』

ああ思い出した、エイプールのお迎えだ

「すみませんちょっと今基地機能が完全にダウンしてて」

『何故!?!』

十中八九目の前のコイツが原因だと思われるが

通常の二倍くらいチャージの速いハイレーザーを主に左右への回避でやり過ごす。また武装が強化されたようだ、上部にVLSがマウントされている

そこから発射されたミサイルはアンフィスバエナではなく、ストレイドでもなく、よくわからない動きをするアッシュの頭上を通って北東へ

『とにかく今すぐ戦闘を中止してください!!でないと……え?…
…撃たれてる!?!』

ああ、そっちへ向かっているのか

『ええ!?!撃ち返す!?!試射もまだなのに!?!』

そして反撃するのか

「逃げといた方がいいかもしれません」

『なんで?!』

「インテリオルがなんか新兵器っぽいのを撃つらしい」

『ほほう、さぞかしインテリな武器なんだろうな』

『レーダーで捕捉、ミサイルだ』

「数とサイズは？」

『1基、かなり大型』

『いや、お前ら、聞いてた？インテリな武器って』

AFが回頭、基地内へ侵入してくる。依然ハイレーザーを撃ちながら前部のハッチらしきものを開け、自律型ネクストを1機射出した行き先は、ランドグリーズ

『おいあれ回収するつもりじゃねえか？』

『何だと？貴重な研究材料を、何としても阻止し……』

上空で照明弾みたいな発光

「うわー!!」

いきなり雨が降ってきた、と思ったが、降ってきたのは水ではなくレーザー、AFを中心にミサイルから飛び出してきた光線が大量に降り注ぎ、砂漠色の装甲を蜂の巣にする

今までで一番大きな爆発音が発生した

『なんだこれは…』

突入するタイミングを失い、ランドグリースがさらわれるのをスルーしてしまう。いきなり大破させられたAFは再び回頭し、派手に煙を噴き出しながら自律型ネクストを回収、砂に潜っていく

2回目の雨が降る頃には地上から消え失せており、残ったのは煙と装甲の破片

『……』

「……第4ラウンドは？」

『無しだ』

無くて本当に良かったと思いつつ

本日の戦闘は、ようやく終結を迎えた

分厚いハッチをこじ開けたら、中で緑髪の女の子がうずくまっていた

「あ……」

急に差し込んだ光にメイは顔を上げ、少し赤くなった目を見せる。
表情は、ようやく一安心といった感じ

「……泣いてたの？」

「や……だって真っ暗だし……どこにも繋がらないし……爆発してるし……」

手を差し出し、コクピットから引つ張り出す。そうしてようやく基地を惨状を目の当たりにしたらしい、見た直後に息を飲んだ

「これ……」

「大丈夫だ、なんとかした」

ボコボコになったアリーヤであるが、親指で示して勝利した旨を伝える。勝ったという事を聞いて完全に緊張の糸が途切れたようで、大破したメリーゲートの上、へたりこんで震え出す

「ごめ…無理……」

どれほど閉鎖空間の暗闇が怖かったのか、思わず微笑を漏らし、アリーヤまで移動するのを手伝おうと自らもかかむ

「おっと」

そのまま抱き着かれた

「だからもう大丈夫だって」

「…っ…!!」

もはや声になっていない、すがりつきながら嗚咽を漏らすその姿がたまらなく愛しくなってしまう、背中に片手を回して、もう片方で頭を撫でる

「案外泣き虫だな」

首を横に振った

少し笑って、撫でていた手を下に、足の裏を通してメイを抱き上げ

「う……」

顔が近い

近い上、もうそついう雰囲気になってしまったらしい、僅かな距離を徐々に詰め、その綺麗な唇を

「きいいいいいたああああああああああああああああああああああッ!!!!!!!!!!!!!!」

という所で目が覚めた

「……………」

「……………」

「……………」

「……………よし、始めようぜ」

吹っ飛ばした椅子を元に戻して腰掛け、集まったメンツを一通り眺める。自分、セレン、リリウム、エノク、なんかよくわからないピンク髪の女の子。うちピンク髪は不機嫌らしく、ぶすくれながらテーブルをじっと見つめている

「では予定より早いですが、これより臨時会議を始めます」

不機嫌といえはこっちも不機嫌そうだが、常に無表情なリリウムであるが、ゲンドウポーズで両肘をついている様は輪をかけて無表情、いや、僅かに怒りが滲み出ている

「……………とりあえず…どうした？」

「何でもありません、ちょっと夏コミ出場不能になっただけです」

「あ、そう……」

どうやらバックアップはUSBメモリなど独立した記憶媒体ではなく別のPCがサーバーに入れていたらしい、基地のネットワークが隅々まで破壊されたと聞いたので、どう考えても回収不能という訳だ

「なお、司令官はヨーロッパのBFF基地まで逃亡、副指令はGA自体から逃亡、よって緊急措置としてリリウムが議長を務めさせて頂きます」

ひどい上官だ。まあ、すべての機能を失ったここを基地と呼べるなら、だが

「まず施設状況ですが、復旧には少なくとも数ヶ月かかります。メインサーバーから発生したコンピューターウイルスによってソフトウェアが完全に破壊されていますので、回復させるには機材の交換が必要となります」

「インストールできねえの？」

「目下実行中ですが、大部分はインスコするためのソフトウェアも破壊されたので」

HDに全部詰め込むからこうなる、と小さく呟き、テーブルの下から小型PCを取り出した。側面が開けられて中が見え、磁気ディスクと基盤がひとつずつはいつているのがわかる。コストダウンを徹底した作りのようで、他機種との互換性は無さそうである

「サンプルとしてお持ち帰りください、H D内に例のウイルスが入っています」

「解析はしてるのか？」

「稼動状態にある最も高スペックなP Cがベネッタ様の私物という有様ですので、やってはいますが、ここで作るのは表計算程度だと思ってください」

インターネット網も壊滅しているし、他の基地と満足に連絡も取れない状況らしい

なお、ベネッタP Cの性能はハード16TBメモリ128GBで32コアとのこと、バカじゃないのかと思った

「総体をまとめると、この東海岸基地に残された機能は居住施設としてのみとなります。若干の重機が残っているので、鈍速ながらネクストの修理を行ってはいますが」

「ちなみに人員は」

「100名以下とだけ言っておきます。残りはすべて撤兵しました」

つまり完全に基地として見られていないという事だ。敵の動きは監視しないといけないから、とりあえず見張り台として残しておく、みたいな感じだろう

「ウイルスはどこから来たんだ？外部へのファイヤーウォールを通

れなかった以上、インターネット経由ではないだろう」

渡されたPCを触りつつセレンが聞く。近くで見ると中身がスカスカである事がわかる、中華製だとひそかに確信

「メインサーバーには直接線を繋ぐしかアクセス手段がありません」

「つまり内通者が…… ああいや、大量にいたか」

「サーバールーム入室には一定の権限が必要です、上層部にも入り込んでいるでしょう。それに関しては心当たりがありますから、^{ひげじい}容疑者捕縛はすぐに実行します」

基地に関しては以上、と言ってゲンドウポーズに戻る。よほどダメージがかいらしい、この後襲われるであろう容疑者が心配になった、老化しきっているのだから

「じゃあ戦力について俺から説明させてもらうぞ」

エノクがノートパソコンを出し、一覧表を見せる。2つに別れており、稼動可能と要修理のようだ

「つつても、この通りなんだけどな。アンビエント、メリーゲート、メタトロン、その他兵器群も1ヶ月は動けない、今戦えるのはアンフィスバエナだけだ。『お互い騙されてた』ってことでオーメルとは和解したが、目下の問題はそこじゃないよな」

画面を切り換え、北米大陸の地図に変わる

「真ん中より右、このへんからこつち側は防衛部隊がまったくいない」

「増援は？」

「相手がオーメルとかインテリオルなら出るんだろうがな」

ただ、と付け加え、パソコンをしまう

「天下のオーメルが謀略で負けたつてのは我慢できないらしい、あつちはあつちで勝手に戦うと言ってきた」

冷静さを失つたら負け確定だと思うが

「GAは意気消沈、オーメルは暴走気味。つて所でインテリオルはどうなんだ？」

ピンク髪に話が振られる

「……ふっ…今更そんな話をしてるようじゃ駄目駄目ですよ皆さん」

ぶすくれ状態から立ち直り、顔を上げながら印象のよろしくない笑みを見せる。ピンク髪というが色は薄く、桜髪のほうがイメージに近い、肩甲骨あたりまであるそれを後ろで束ねており、体型はかなり小さい、リリウムほどではないが”一部の方々”に狙われそうなルックス

「あ、申し遅れました、わたくしインテリオルユニオンのミドリと

申します」

「あ、おう」

「で、ここまで被害受けといてようやく対策開始とか何ですかおじいさんですか、ユニオンは既に準備を完了させています」

ミドリさんが自信満々に言う。インテリオルといえば最近プチ鎖国していた印象しかない訳だが、あとそれから今回の依頼主がインテリオルを名乗っていたが

聞いてみよう

「最近俺に依頼したとかいう話知らねえ？」

「は？何ですかそれ意味がわかりません」

予想通りの解答

「インテリオルグループ内にいた内通者はここ数日ですべて排除しました、故に外部からの交流を断ち切っていた訳です」

「……で、早速最愛の人を迎えに来たと」

「なんであんなミサイルバカが最愛ですか！！」

「本当に？」

「なっ……」

「ウィン様から回ってきた情報によると、それがリンクスまで知らされたのは昨日の話、それから数時間後の新型AFテスト飛行に便乗し、予定ルートを曲げてまで迎えに来た相手が最愛ではない？」

「ぐ……」

新人を手玉に取るリリウム。相変わらず完全な無表情だが、やるべき事はやるらしい

そしてわかった、この子ただのツンデレだ

「……とにかく、こちらも勝手にやらせて頂きます。防衛部隊がないなら大丈夫でしょうが、変な気は起こさないように」

「協力って可能性は」

「ナイアガラが逆流するくらい有り得ません」

言いたい事は言ったとばかりに沈黙、エノクも持っている情報はすべて出したようで、次の人どうぞとジェスチャーした

「では…今一番気になっているだろうランドグリーズについて」

隣でセレンが言い出した

「記録していた音声通信からだ、ある1点で別人格が現れたとし

か思えない豹変をしている、被験体という経緯を考えれば多重人格を発症している可能性も否定できないが、それにしてもタイミングが良すぎる」

確かにあの変わりようは凄かった、ダウンしていた人らは知らないだろうが、ぼけーっとしてそうなのがいきなり機械みだいになったのだ、何かあるとしか思えない

「そこでDAMSという単語を調べてみたんだが、案外すぐ出てきてな。基本的な機能はAMSと変わらないし、技術自体も枯れている、Dはディープとかダイレクトとかそんな所だろう」

「どんなだ」

「開発はレイレナードだがオーメルが研究を受け継いでいる。通常のAMSは機体と脳を繋ぐ際に緩衝材を儲け、さらに脳波の受信箇所を浅く設置することでリンクスの負担を軽減しているが、DAMSはもつとわかりやすく、脳と機体を直接、何の装置も介さず、有線で接続する」

想像して、少し気持ち悪くなった

「プロトタイプネクスト『アレサ』の発展型といえばわかりやすいか？」

「それ、まずいんじゃない」

「だろうな、普通じゃ5分もたないし、リンクスの精神状態では

接続すらできなくなる。しかもこの豹変ぶり、確実に”機体から脳へ”指令が飛んでるぞ。もしこれ専門の被験体だったというのなら」

「……もってあと1年」

リリウムの呟きにセレンが頷いて、さらに細かい捕捉をする

「脳の各所が退化しているのは確実だろう、体に指示を出す必要が無いんだ。じきに機能不全が始めて、そうなれば呼吸すらできなくなる」

そうでなくともダメージが致命的だが。桁外れな反応速度は割に合わない代償を持って行くという事か

「少なくとも、私はこれを表舞台に出すべきではないと思う」

というのがセレンの意見

「……よし」

依頼を無かった事にされてさでどうしようかと思っていたが

やるべき事は決まった

「潰すぞ、今すぐに」

「高速機への対処」

「負けるな、追いつがれ」

「火力不足」

「無駄に撃つな、刺すようにやれ」

「レーダー更新速度」

「脳内レーダーで補え」

「了解です」

「……………いや今ので了解するな」

あの一大戦闘があつた後でも街は普通に暮らす人々がいて、店主はいつも通り椅子を作っていた。逃げようと思った所で逃げ場が無いのが現状であるが

破壊し尽くされた基地にいても暇だったため、機体からデータを抽出して家具屋までやってきた陸である

「いやまあ認める、この程度のアトバイスでお前はその通り実行できるというのは認める、だがもう少し詳細というものをだな」

ストレイドとランドグリーズ相手に立ち回った戦闘記録をざっと流し見て、前回教授された事はすべてものになっていると確認してくれたようだ、「しかし相変わらずだな…」と呟きながらノートパソコンをいじる。過去の全データは喪失していたが今のところ問題は無

かった

「奴相手にここまでやれるならもつ……いやまだ私の全盛期の方が……」

「やっぱ有名なんすねあの人」

「有名どころの話ではない、奴と戦って無事帰ってきたのはお前が2人目だ。1人目は……パ……パツキ・ザ………忘れた」

それほど強いリンクスの名前を忘れるだろうか

「……それで、こいつは何だ？」

ストレイドの後、ランドグリーズとの戦闘記録に移る。改めて見てみると、戦法や動き方に関しては取るに足らないものである、反応速度というただ一点だけがすべてを補ってストレイドすら超越している

「AMS適性で奴を上回るとは少し考えられんな、何か小細工しているだろう」

「えー、ここ来る前にレポートを貰ってきたんですが……」

一度デスクトップに戻ってワードファイルを選択、陸自身もまだ見ていないため脇からのぞき見

主に『DAMS』というシステムの説明だった。大元はレイレナード、オーメルが引継、実用化にはアスピナが関与

「ああ…まだ楽になれていないのかあの娘」

やはりこの店主なんでも知っているらしい

「ネクスト『ランドグリーズ』、リンクス『フェイ』ね……捕捉しておいてやろう」

キーボードを叩き始める。機体ではなくリンクス中心の情報のようだ、強化被験体3号、性別女性、年齢17、オーメルサイエンス内で培養された試験管ベビー

「生まれてこのかた自由を与えられなかった者を自由にすることは果たして『助ける』と言えるのか」

「え？」

「そいつにとってはそれが普通なんだ、今の今まで何の疑問もなく実験台として過ごし、しかももうすぐ死ぬような奴を助けた所で、知らずに済んだ絶望を与えるだけではないか、という話だ。哲学的ではあるがな」

まあそれは置いておくとして、とノートパソコンを閉じる

「AFはどうなった？」

「蜂の巣になりました」

「あのけつたいな雨でか？あれでは内部までは貫けんだろうな。元

々が調査用だ、武装は貧弱だが殻だけは硬い」

砂漠潜行のための外殻、第一、第二装甲板、AIボックス、それぞ
れがギガベースの砲撃に耐えると説明が入った。たとえ貫通できな
くとも武装を破壊することでAIにダメージは与えられるらしいが、
そんなちまちまやっていては駄目だろう、砂漠にいる限りいつでも
撤退できるのだ

というか、いまだ目的がわからないのはまずいと思う

「あのAF、名前はなんていうんですか？」

「名前らしい名前は無いさ、XAF-0、AF及び奴らを指す時は
『ネームレス』と通称していた」

名無しの兵器と

「なんでも『名前などいらない、ただ復讐するだけだ』だと。飾り
気のない奴らさ」

感じからしてまだ情報を持っていそうだが、サービスタイムはここ
までのようだ、ノートパソコンを返却される

「要点は敵の位置を常に把握することだ、それさえできればどうに
でもなる」

もう帰れ、どうせ基地は無防備なんだろう、と言って木材の削り出
しに戻る。この人もここから逃げる気は無いのか、我関せずとばか

りに木屑を大量生産していた。その姿はなんというか、世捨て人のようにも見える

もう話す事も無いし、確かに基地も心配だ、変な事が起こる前に帰宅することにしよう

じゃ、と店主から離れ、外へのドアに手をかける

店から出る寸前

「……容赦無く殺してしまうのも、それはそれで救いだと思っがな」

そんな呟きが、後ろから聞こえてきた

「で？つていう」

「ふふふ、驚いて声も出ないようですね。では説明してあげましょう、あれは……」

「インテリオルグループの全企業が合同開発した最新型A F『ヘリオスファイア』です、主にアンサラー建造で用いられた技術を踏襲しておりますが、コジマクラフトと通常エンジンの組み合わせにより垂直離着陸と高速飛行を両立。武装はインテリオルユニオンの精髓を注ぎ込んだ新兵器でガチガチに固め、しかしアルドラ社にフレームを丸投げしたため実弾防御がE N防御を上回るといふ矛盾を孕んでおります。それによりグローバルアーマメンツ社単体では破壊不可能とさえ言われ……」

「ちょちょちょ何べらべらと喋ってんですか！！」

それに乗ってきたミドリを差し置いて説明し始めるリリウムを止め、そのままずんずん離れていく。その引っ付いて揉み合う姿を写真に収めようと携帯電話を取り出したもののセレンにより没収

「対A F用A Fといった所か、従来型のように小回りは効かなさそうだな」

砂漠に鎮座するそれを2 kmほど離れた管制塔から眺めているので、細部まで見るとなると双眼鏡が必要になる。とりあえず色は白系で、縦に長い胴体からこれまた長い後退翼が伸び、クジラがヒレ広げると言われればそう見えなくもない。だが中央部の造形、あれは確実にフェルミをベースに作られている

推定全長1500 m、目立つ武装は機首下の砲塔と、翼の根元にあ

るミサイルランチャー。ここから見えるのはそれだけだ

「近接防御用の兵装が見当たらん、自慢の高火力で一気に叩き潰して、うるさいハエは他人任せネクス、だとは思うが、お前はどうか？」

双眼鏡でじっとり眺めるセレンが言う

「……」

その後ろ、いまだ格闘を続ける少女2人

「俺あっちの方が興味ある」

「よしわかったしばらく黙ってる」

セレンは双眼鏡での観察に戻り、以降話し掛けてこなくなった。それを確認してから、寝技を決められつつあるミドリのもとへ

「やゝー！ー！ー！その間接はそっちの方向には回らなゝー！……」

「おう第三世代」

「えゝ……？」

リリウムに技を緩めさせ、話し掛けながらしゃがみ込む

「カレードにはまだ未登録だったな」

「まあ……といつても近いうちに登録しますけど」

確認したかったのはそれだけだ。であれば、こちらの思惑通りに事を進める事ができる

「登録は明日だ、やってもらう事がある」

「……何故」

では追って説明していこう

「リリウム、リンクスがカラードに入ると何ができるようになる？」

「ミッションの優先的受注、オーダーマッチへの参加、ネクスト整備施設の借用、等が主な項目です」

「そのうちオーダーマッチはどういう形式で行われる？」

「下位ランクのリンクスが上位リンクスに挑戦するのが常です」

「挑戦の拒否は？」

「原則として不能」

「今こいつが登録したらランクはいくつになる？」

「22」

「ランク21は誰だ？」

「フェイ様、ネクストはランドグリーズとなります」

説明終了

「.....え？」

とりあえずお前は逃がす、と言われた

「ここまで徹底的にやられてちゃ普通に侵攻する意味無いし、来たとしてもAFとかネクスト、だらだら居続けたって意味が無いの」

「そりゃわかるけどよ……なんか1人だけ逃げるのは…なんつーか……」

「邪魔なだけだから」

「ぐ……」

言った所で既にセレブリティアッシュは搬出されているし、脱出便も到着して離陸体勢に入っている、今更逃げたくないなんて言った所で迷惑を上塗りするだけだった

ダンの他に乗客は数名、施設の回復に最低限必要な物資を運んできた輸送機に乗っていく形であるため、ほとんどが業者関係、後は自らの生命を最優先したい人間、いわゆる脱走兵。逃げたいなら止めないと言われたとのこと

「……これからどうすんだ？」

「しばらくは偵察だけ。今こっちに戦闘機が向かってるからそれ使
って見回りよ」

「防衛戦力無しか？」

「ここまで叩きのめしたのにまた来るとは思えないけど、万一来たら逃げる」

基地から出て飛行場へ、離発着を妨げていた大量のガレキは少ない重機で必死こいてどかし、滑走路としての機能はなんとか復活させていた。耐久力の高いタイヤでないとパンク必至な状態であるが

風は無い、砂漠特有の強烈な熱線が襲い掛かる

「それよりも不安なのはそっち」

手で顔を守りながら隣のベネツタが言った

「目付けられてたらずいわよ。どこに何がいるかわからないし、かといってここじゃ守れないし」

確かに敵味方がまったくわからない状況だ。今まで親しくしていた相手でも安易に信用するなとエノクが言っていたが、かといって孤立しても的になりそうな気がする。そのあたりの加減は注意しなければ

今から乗る航空機は発着スペースにて既に待機中、出発まではあと10分切っているのでそのんびりはしていられない。隣にインテ

リオルのロゴマークが入ったヘリがいるがあれは何だろう

そういえば砂漠の向こうにインテリオルのAFがいるんだったか、砂丘に邪魔されてまったく見えないが

「いざとなったらストレイドのガレージに逃げ込んで、協力は取り付けておいたから」

いつの間にそんな交渉をしていたのか

「なんか悪いな、色々と」

「…本当ならそっちのガレージも安全確保したいけど…ここからじや何もできない」

「そこは大丈夫だろ、さすがに」

「どうだか」

ダンのガレージはカレード管轄下にあるレンタルガレージで、戦闘禁止区域の奥深くにある。本気で戦わない経済戦争が大前提なのだ、絶対に手を出さない地域というものはいくつもある

まして傭兵の武器庫となると、破壊した所で誰も得しない

話しながら航空機の前まで到着し、後は階段を登って機内に入るのみ

ここまでだ、ベネッタはここから先に行くことができない

「最終的には自分の身は自分で守ってもらわなくちゃならない。腐ってもネクストだしそう簡単にやられないと思うけど、私からはもう何もできない、だから」

階段の前、改めてダンに向き直る

不安を押し殺してどうにか作ったような強気な表情

「生きて、今言えるのはそれだけ」

言って、ベネッタは1歩下がった、早く行け、という意味らしい

「……………」

何か言わないといけない気がする、下手したらもう会えないのだ、どちらがどうなるにせよ

なら、少しくらい調子に乗っても罰は当たらないだろう

「まあ…なんだ、次会えたらさ、その時は…」

「彼女作ってくるわｗｗｗｗｗｗ」

「!?!?!」

いつの間にか第三者が急接近していた、今の横槍を入れたのは桜髪の女の子で、後ろ手にエイプールを引っ張りながら早足で向かってくる。インテリオルの新人リンクスだったか、恐らく目的地は隣のヘリ

「おいちゃつきになられてる所申し訳ありませんがねえ！それ死亡フラグですよH A H A H A H A H A！」

桜髪が横を通過

「みみミドリちゃんちょっと待ってまだお別れしてない……！！」

続いてエイプール

「やかましあ！ここにいたら搾り切られる！主に私が……！！」

どういう意味で搾られたんだろう

ヘリに旅行カバンを投げ入れて、パイロットに短く指示、数秒遅れてメインローターが回り出した

「すいません後でメールしますからとりあえず皆さんにお礼をあわわわ……！！」

引き続きエイプールを押し込み離陸準備完了、ドアは解放したまま浮き上がって砂漠方向へ

「トーラスハブって……トーラス………テクノクラート……？」

最後に残したのは意味不明な叫びだった

「……………」

「……………行けば？」

「あ……おう……」

階段を上がる、すぐに機内へ到着

ベネッタはまだ下にいた。言いそびれてしまったが、時既に遅し、大声で言うには恥ずかしすぎる

と、階段の向こうにいるベネッタが片手を上げ

一言

「続きは今度聞く」

陸が帰ってくると、メイが1人でぼーっとしていた

「あ…おかえり」

「やること無さそうすね」

「機体壊れたらリンクスなんて二ートじゃん」

「いやそれはどうだろう」

最近ではテレビさえも光に繋がっているらしく、電子機器の壊滅した休憩室はまさしく休憩以外に用を足さない空間と成り果てていた。付け加えあれだけいた人間も数えるほどしかいなくなり、全体的に静か、というか、もう廃墟にしか見えない

稼動しているといえばしているが、もう基地とは言えないと思う

「寂しくなっちゃったねえ」

「まあ」

エイプールが連れ去られたのはさっき聞いたし、ダンの乗った輸送機は歩きながら見送った。それ以外もナイアガラ大瀑布のごとき忙しさに襲われていて、落ち着くにはもう少しかかるだろう

「機体早く直んないかなー」

「パーツごと交換すれば？」

「パーツっていうか全取っ替えになるのよね」

確かにあのスクラップぶりは全取っ替えものだ、もしアンフィスバエナが喰らったら跡形もなくなるレベル

いくらACといえど全壊してしまえばパーツ分けされている意味が無い

「……………ヒマだ」

「そつすね」

帰ってきてまだ数分だが既に飽きてきた。この生活を率先してやっているお坊さんとか修道女は一体どんな精神力をしているのか

何かヒマを潰せるもの。そういえば昨日リリウムが持ってきたポータブルテレビはネットワークと無関係だったような

「持ってきてまさあ」

なんとかして環境を整えなければ孤独死が出る。入ってきたばかりのドアへUターンしてノブに手をかけ

「……………!!」

廊下で誰か騒いでいるのが聞こえてきた

戦闘前であればどこで誰の怒号が飛んでいようとまったく気にしなかったが、この寂れた基地でなお騒ぎが起ころとなると少し気になっってしまう。どっちにしろドアは開けなければならぬのだが

解放

「ぬおおおおおおおおお!!!!?」

幼女がひげじじいに乗ってスライディングインしてきた

「……………ええー…？」

なんだこのじじいライドオン幼女は、新手の暴走族か

「ナイスタイミングでした」

声を聞いて、幼女がリリウムであるとうやく気付く。リリウムならしょうがないとその奇行に納得してしまったあたり陸も末期症状かもしれない

リリウム、であるならば、下のひげじじいは高確率で

「では改めて。王大人、昨日はどこで何をしていたか教えていただきますしょう」

「だから丸一日カロードに詰めてたと言つとるうに…！」

「キャバクラに入り浸ってた等の方がまだ説得力ありますよ」

「この歳でキャバクラなんぞ行けるか…！」

何か尋問が始まった

「もうストレートに聞きましょう、ウイルス垂れ流したのは貴方ですか？」

「やる訳無いだろう！不利益以外の何物でもない！」

「実際、戦力規模においてBFFがGAを上回ったようですが」

「えっそれは真の話アルか……………違う！上回ってどうする！」

「ヨーロッパを制圧するなら今のうちですよ」

「あ…………いやだからそういう裏切りはだな……………」

長くなりそうなのでとりあえずテレビを持ってこよう、変人親子の脇を通って廊下に出て、建物の奥の方にある自室へと向かう。ごく普通に個室を割り当てられたのでこれがスタンダードなんだと思っていたのだが、寂れた建物内を見回ってみた結果平社員は同じ大きな部屋に5、6人詰め込まれていた事が判明した。どうやらVIP扱いだったらしい

部屋にたどり着いて携帯ゲーム機サイズの液晶を掴み再度休憩室へ

「さあ、このCOAMがチャージされているカード（ヘソクリ）を折られなければ正直に言うのです」

「や…やめろ！！それにいくら入ってると思ってるんだ！！」

尋問も最終局面に入ったようだ

メイにテレビを渡して、正常に映る事を確認してからテーブルに置いた。これで幾分かマシになったか

「違う……！本当に私じゃないんだ……！」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナル……アンサー……」

「……………」

バキヤッ！！

「のおおおお……！！！」

じじい悶絶、幼女立ち上がる

動かなくなった王小龍を放置して膝に付いた埃をはたいて落とし、リリウムは視線を陸とメイへ

「どうやら本当に違うようです」

「そう思ったならカードは折らないであげようよ」

生きてるだろうかあのじいさん、本当にぴくりとも動かない、シヨックで逝ってしまわれたか

「結局内部の人間がやったの？」

「ほぼ間違いないでしょう、中枢ネットワークにアクセスするためにはパスワードが必要ですし、サーバーに直接注入した痕跡からしても外部からでは不可能です。たった今容疑者の疑いが晴れてしまったため犯人特定のためは立っておりませんが」

「じゃあこれからの予定は？」

「とりあえずこの『GAバズーカの砲身』で釣りを仕掛けようと」

ポケットから出てきたそれをメイが掠め取った

「…下着を洗濯機で洗う場合はネットでまとめるのが最適とされます、取り残しも防げますし」

「ああそう…次から気をつけるわ……」

女性に拾われた事を良しとするかりりウムに拾われた事を悪しとするか。どっちにしる言いたい事はひとつだけだ

でかすぎだろ

「とにかく…手掛かりが無いなら犯人探しは置いとけば？どうせもう逃げただろうし、機能復旧の方が先だし」

「そうですね、こちらとしては手詰まりですし、後は企業に恨みのある人間を洗い出して……」

と

突如リリウムが停止した

まるで何か光明が差したような、犯人がわかった瞬間の小学生探偵の顔といえわかりやすいだろうか

「……申し訳ありません、急用を思い出したため失礼させて頂きま
す」

一礼、反転、王小龍を引きずって退室していく

ぱたりと、室内に静寂が戻った

「…何を思い出したんだ？」

「さあ？」

真面目な事、だいいが

T h e r e i s n o t n e c e s s a r i l y a r e a s o n f o r

「確認しよう、今日俺は何のためにここまでやってきた？」

『インテリオルの新人リンクスを釣り餌にランドグリーズをオーダーマッチに引っ張り出してデータ採取するため』

「んで、何故俺は今ネクストなんぞに乗って戦う準備してるんだ？」

『それはだな、この前のグレートブリテンが関係している』

「どっかのババアが年齢詐称して違反がバレたあれか？」

『……その罰則だ。カロードランク1ストレイドは特別ルールを用いたオーダーマッチに参加すること。今回はランクに関係なく挑戦したければ挑戦できる事になっている、まあカロード再開記念のイベントみたいなものだな』

要するに宣伝塔だ、というセレンのセリフを聞きながらAMSを立ち上げ、それから荒れきった荒野をひとしきり見回す。少し離れた

所にネクスト用ハンガーがあつて、参加者はそこで待機しているはずだ

知っている限りでは、インテリオルの新人リンクスであるミドリの『ダガーアーク』、それからローディーの『フィードバック』も機体を確認していた。引退試合とのたまっていたが実際どうかはわからない

ランドグリーズはちゃんと来ているだろうか、挑戦は拒否不可能だが、無視される可能性も否めない

『それと背部に変な装備が付いているのは気付いているな、宣伝塔になるにあたつてトーラスの実験兵器を受理したものだ、確認しておけ』

両背中を占有しているそれを選択する、搭乗前に目視で見た限りでは、細長い棒が2本左右の背中から生えていた、内側にブースターノズルがついていて、銃口が見当たらなかった事から射撃武器ではないと思われる。それ以外の特徴として、上部に剣の柄みたいなもの

『カテゴリではブレード扱いになっている、刀身を超音波振動させて切断力を得るからレーザーブレードのようなエネルギー消費は無い、ちよつとした隠し機能もあるようだ、まあランドグリーズのように連続で振り回せる設計だな。背中に付けている間は追加ブースターとして機能するから、腕武器を使い切ってから持ち替える』

「ブースター？」

モニターを操作して推進力の性能値を表示、フレームがアリーヤな

のは前回と変わらず、恐らく内装もそのままだろう、となると

「連動してねえぞ、スペック上はそのまんまだ」

『ああいや違う、見る所はそこじゃない』

「あ？」

『追加オーバーブースターだ』

「はははははwww」

思わず笑った。そっちへページを移してみればなるほど、数字が3倍くらいに跳ね上がっている

『発動時にほとんどのコジマ粒子を使い切るから実質的な噴射時間は0.8秒、瞬間最高速度が約7000km/h、シートベルトはグレードアップしておいたが、使う時は踏ん張れよ』

「いや…お前な…実用性ってわかる？あの実際に使えるかどうかかって……」

『知るか、使いこなせ』

そこまで話した所でカライドからのアナウンスが流れ、同時にレー

ダーに反応、対戦相手が向かっている事を表していた。どうやらこれ以上の文句を言っている場合ではないらしい、積んでしまったものは仕方ないと諦める

『今回は複数の相手と連戦することになる、1戦ごとに戻って補給できるが、そのまま続けるのも許可されている。どうせなんだ、お偉方にコネを作っておけ』

少し待っていたら視界に赤いネクストが入ってきた、フレームはラッセル統一、武装もローゼンタールオンリーで、全身で企業所属をアピールしている

表示された機体名は『トラセンド』

「おや、ダリ男くんではないか」

『発音に違和感があるが…まあいい。3年ぶりか？こうして会うのは』

完全な行方不明だったのだこの男、本気で搜索してる訳ではなかったがORCAを潰し終えたあたりで見かけなくなり、以降まったく姿を見なくなってしまった。しまいにはカロードランクからも名前がなくなる始末だったので死んだものとばかり

「今まで何してたんだよ」

選択武装を変態ブレードから腕の重ショットガンに戻す、右はそれで、左は超高サイクルマシンガンVANDA、ライール以上に突き刺す事に特化しておられる

『なに、すぐにわかるさ。まずはここで俺が戻ってきた事を知らしめる、土台になってもらうぞ』

含んだ笑いを漏らしながらトラセンドも戦闘準備を整え、後は戦闘開始の合図を待つのみ

距離300、1歩踏み込めばいけるか

『5秒前、4、3、2、1…始める』

前方へのクイックブーストを最大出力で噴射する

『ッ!?!』

驚くトラセンドへ散弾の雨を見回って、交差、反転、マシンガンで畳み掛ける。開始2秒ほどだろうか、プライマルアーマーが消し飛んだ

『は…!?!ちよつと待つ…!?!』

ショットガン2発、さらに1歩踏み込んで左手のマシンガンを投げ捨て、右肩越しに出てきた柄を握る。途端にものすごく細かい振動がコクピットまで伝わってきた、動作良好

『ほお…』

セレンの感嘆を聞きながら抜刀、コクピットを避けるルートで斜めに振り降ろされたそれはトラセンドのコア左側を削ぎ落とし、続い

て腰部、右足と綺麗に切断、五体のうち三体を一瞬で失った赤いラ
ンセルはガランガランと荒野にパーツをぶちまけた

『そんな……馬鹿な……』

マッチ終了のアナウンスはかなり送れてやってきた。戦闘時間は9
秒を示している、無理も無いか

ブレードを収納、マシンガンも回収し、戦闘前の状態へ

「おらさつさと次こいやああ!!」

「私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない
私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない
私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない
私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない私は負けない
い……」

「……………」

とりあえずこの自己暗示かけようとしてる人どうにかしてくれないだろうか、大型モニターでオーダーマッチを観戦している陸は思う

ストレイド

天災が暴れ回っている地点から少し離れたカロード施設、予定ならここにランドグリーズがやってくるはずである。搜索するにも人手は必要だったためヒマの極地にあるメイと共にやってきた次第だ

ランク最下位のオーダーマッチであるため、順番は一番最後、といってももう次だ、もともと人数が少ない上に”順位関係無しでトップを狙える”という餌に皆さん食いついてしまっていた。まあ、開始10秒足らずで参加者全員が後悔する羽目になったが

まずトップバッターのトラセンドは文字通り秒殺、続いてやってきたダブルエッジを一刀の下に両断し、ブラインドボルトの重装甲を散弾の雨あられで撃沈。現在、4戦目となるマイブリス、ロイ兄さんと戯れていた

戦闘開始からもうすぐ1分、最高記録である

一旦モニターから目を離してトランシーバーを操作

「……正面玄関どうすか？」

『正面玄関異常無し、ハンガーは？』

窓を覗き込んでネクスト用駐機スペースを観察する。大破したトラ

センド、大破したダブルエッジ、大破したブラインドボルト。青いアリーの姿は無い

「スクラップヤード…じゃなかった、ハンガー異常無し」

階下のロビーで張り込んでいるメイへ返答、視線をモニターへ。あの鉄屑の山に兄さんが混ざらない事を祈るばかりである

それ以外に天変地異へ立ち向かう予定な愚者はあと1人、さっきからソファに座ってのんびりモニターを眺めている

「まだ見つかっていないようだな」

「あ…はい」

自称老兵、引退試合と銘打ってここにやってきたGA最高のネクスト戦力。フィードバックのリンクス、ローディー

「オーダーマッチに参加していないならハンガーには入れんな。余裕があれば私が見てこよう」

「恐縮です」

ストレイドのマシガンが弾切れを起こした。投げ捨てて、小型のパルスガンを引っ張り出す

「ここ一連の戦闘ではよく頑張ってくれたな、君がいなかったらと思うとゾツとするよ」

「ああいえいえ」

借金の件忘れていいのかこのジーさんと思ったが声には出さず

モニターの向こうではロイが奮戦している、無意味な抵抗にしか見えないが奮戦してはいた。こないだの自分とややデジャヴュしていて涙を禁じ得ない

そのまま粘り続けて重ショットガンも投げ捨てさせた。後はハイレーザーの1発でも当ててくれればスタンディングオベーションものである

が、ブレードの居合い斬りをモロに喰らって、右腕がだらりと垂れ下がってしまった

「……君はこの状況、どう思う？」

「え？」

「3年前に起きた事は覚えているだろう。あれが問1とするなら、もうすぐ問2が突き付けられる」

残ったガトリングを焼き切れんばかりに回して応戦するものの、細長い刃に捉えられて砲身がレンコンのようになってしまった

「守るべきは人か世界か、もしくは今か未来か。どちらが最善かはわかりきっているのだがな、犠牲を許容できるのが人という生き物

だ。それでもどちらかを選ばなければならない、であれば」

もはや打つ手無し、マイブリスが自ら停止した。しばらくしてマツチ終了のアナウンス

「……いや、君に言っても仕方ないな、すまなかった」

ロイがリタイアしたのでローディーは早急に機体へ向かわなければならぬ、立ち上がって部屋の出口へ

まあ、なんというか

「……なぜその2択限定なんです？」

「む……？」

3年前に何が起きたかは理解しているつもりだ、理由も、結末も。断片的な情報を寄せ集めただけなので何とも言えないが

「確かに突き詰めればその2つになるんでしょうけど。何て言うか……そんな理不尽な選択をさせた要因はひとつだけですよね」

「……………」

「俺なんかが気付くんだからみんなもうわかってるんでしょう？ 必要なものは何なのか」

「そうだな……だが、それは限りなく不可能だぞ」

過去の歴史を見ればわかる、どんな絶望的な状況であっても、こんな選択など無しにどうにかなくなってしまっているのだ。だが、それは今ほど世界が分裂していなかった時の話

「企業首脳せいずが説教して反省するような人間なら、そもそもこんな状況にはなつてなどいまい」

「そうですかね」

「ああ、そうだ。……だが……」

一瞬、ローデীর視線がモニターへ

アップで映っているのは、黒いアリーヤ

「善処はしてみる事にしよう」

僅かに微笑んで、ドアを開ける。そこで何か思い出したらしい、少し停止したのち、また微笑

「”そこにある”か、案外その通りかもしれんな」

呟いて、ドアが閉められた

変装しようとも思ったがやめておいた、意味が無い

飛行場から直接繋がる玄関ロビー、メイは置いてあったテーブルセ
ットに腰掛けてポータブルテレビを眺めていた。ヒルベルトに続い
て出てきたのは赤いキョンシー、ではなくサンシャインE型、機体
名はフィードバック

朝から来てここに陣取っているが、いまだ標的は現れない、そろそろ陸と交代してもらおうかと思う、なんかめんどくさいのもやってきたし

「実感無いだろうけど、君かなりモテるよ、ファンクラブ作ったら軽く黒字が出るレベル」

「……………」

「いや別にどうしろって訳じゃないけどな」

正面に座るイケメン兄さん、さっさと帰ればいいものをなにゆえナンプアなんぞしにきてしまったのか

「いいよな安定収入、俺も企業に雇って貰いたいよ」

そつのたまるロイ・ザーランド、手をひらひら振って存在をアピールしている。今のところ無視で対応しているため目障りなことこの上ない

横目で玄関口を確認してフェイが来ていない事を確認、先は長そうだ

「そついやさ、一条陸、あいつもうランク8か、まずいな追い付かれちゃったよ」

「……………」

「あいつはまあ弟みたいなもんでさ。初めてコクピットに突っ込まれた時は初心者らしく目回してたんだが……………」

「……………」

「つかあいつ、乗ってまず何したかってトリガー引きやがったんだよ、あれはマジで死ぬかと思ったな」

「……………」

「ふむ……少しは興味ある話題だと思ったが」

無視を継続していると話すのを打ち切ってやや困った顔になった。そのまま困れ、そして帰れ

が、帰らない、何か話題を探している。そのまま数秒、顔を上げて笑みを見せ

「じゃあ言いたい事だけ言っちまおう。君、動けるネクスト欲しくない？」

「は…？」

つい声が出てしまった

しまった、と思ったが既に遅い、ロイが僅かに笑みを深める

「廃品回収なんだけどな。ジャンク好きな奴が昔いてさ、ベースはとある地点から引き上げた特注ネクスト機ホワイトプリントで、それを拾ってきたスクラップで修理してる。ちょっとばかり改造部分が多過ぎてアーマードコアとは言えない気もするが…まあ機能的にはネクストだ」

写真が1枚出てきた

最低限の錆止めとおぼしき仮塗装は灰色一色、壊れた腰部を無理矢理結合してあったりあらぬ所に武装がジョイントされたりしているが、後部に背負ったOBユニットから元ホワイトグリントというのだけは判断できる。恐らくパーツ換装は不可能だろう、接合部が規格外れの形だ

「本当ならこれを”アナトリアの傭兵”に渡そうと思ってたみたいだが、奴にはもう戦う力は残ってなかった、んでお蔵入りしてたんだ。持ち主は死にしまったし、このまましまつとくのももったいないだろ？」

どうせなら有効活用しないと、付け足しながら鍵をひとつ取り出して写真の上に乗せた。ガレージ266、カロード直営のレンタルガレージか

「……何考えてるの？」

「別に何も。ま強いて言うならば、間接的な陸の手助け？」

「手助けて……」

「実はだな、このままだと変な団体に接收されちまうんだ。そしてら多分、誰も太刀打ちできなくなる」

写真を指で小突いて、パーツ換装不可能な点を強調する。稼動部の形が違うのだ、従来品と合うはずがない

「ちょっと技術的問題があつてパーツ換装ができないんだが、その汎用性を捨ててひとつの戦術に特化してる、自分好みに組み換える事はできないが、戦い方を合わせてやればクレイドル最強といつてもいいくらいの性能が出る、元が高性能だしな。それにDAMSなんてもん搭載された日にゃ……」

「あーもういい、どれだけすごいかはわかったから」

話すのを打ち切らせて、差し出された鍵をつまんでみる。興味が無いと言えば嘘になるが、この男が信用に足るかどうか、そもそもネクストなんて高級品、ほいほい譲るものではない

「そこに入ってるからいつでも持つて行つてくれ、君以外が乗つても構わないが、なるべく早くな」

ロイが立ち上がった、言いたい事は言い切つたらしい。メイに背中を向けて2階への階段へ、陸の顔でも見に行くのか

完全に消える前、疑問をひとつぶつけてみる

「なんで私な訳？」

「俺が気に入ったから、それ以上でも以下でもないね」

ひらひら手を振りながら消えていった

数秒黙つて、それからトランシーバーを操作

「……………こちら正面玄関」

『はいこちら待機室』

「キミのお兄さんは信用できる人かい？」

『信用……………させてくれないです。…え…？……………いやできます、できますとも』

もうそっちに行ってるようだ

『優しいし強いし空気読めるし彼氏には最適……………いやそれはどうだろう……あ痛たたたた……………』

もみ合いが始まった

「……………まあ……………」

少なくとも、害はなさそうか

ミサイルを振り切ってバズーカをかわしフィードバックの懷に突入、補給したばかりのマシガンをぶちまける。通常ブーストを少しだけ吹かして射線から逃げられ、至近発射されたバズーカをぶっ飛んで回避

マイブリスとの戦闘後、次の相手が判明した時点で弾薬だけ補給しに戻った。G Aのネクストを両断できる性能がこのトールラス製変態ブレードにあるか怪しかったし、何よりバズーカの零距离カウンタ―は喰らいたくない

「なぜいきなり引退!？」

高速ミサイルは引き付けて回避、だが後からやってくるハイアクト

は燃料切れまで鬼ごっこするしかなく、そのうえ変な動き方をした時点でバズーカが突き刺さるのだ、止まったら確実に死ぬ

『各々、やるべき事はあるだろう。私の役割は戦場に出て戦う事ではないと思っただけだ』

弾幕を張りつつフィードバックの周囲を旋回。クイックブーストを1発吹かせば事足りる距離ではあるが、1アタックで破壊できるような装甲ではない、待っているのはカウンターだ

「上に行ってそれで？」

『最悪クーデターしてでも企業を変える』

フィードバックが大きく踏み込んでくる、同じぶんだけ後退すればそれで済むのだがそれでは決着がつかない。ショットガンで迎撃をかけながらこちらも踏み込みブレードレンジへ

「ORCAがッ……！！やって軽くノされてんだぞ！」

左肩に砲弾が命中、タイミングを失ってそのまま交差した。装甲がへこんだのみで動作に問題無し

『あくまで例えだ』

乱射、乱射、乱射。距離300後半を保ったまま互いの尻を追い続け、少ししてマシンガンが弾切れを起こす

「まあ、正面きつての戦いは任せるよ、いざとなればな」

手放してパルスガンに持ち替え、る前、ミサイルの斉射を喰らう。
咄嗟に横へ避けて、ハイアクトはショットガンで迎撃

気付いたらパルスが無かった

「報酬、弾むんだろぅな!!」

オーバードブースト起動、途端にプライマルアーマーがかき消える。
連動してシートベルトが引き締められ衝撃吸収機構が作動した、ぐ
らぐら揺れる座席

「……って…」

しまった

ついいつもの調子で

『ぬおおお!?!』

噴射開始してから1秒足らず、気付いたらフィードバックに体当た
りをかましていた。蓄積粒子は完全なゼロを示しており、アリーヤ
の厚いPAを一瞬で食い尽くした事になる、本当に実用性なんてあ
ったもんじゃない

「なにくそ!!」

もうノリで行くことにした、慣性で飛んだまま弾の残っているショットガンを投げ捨てて両背中のエモノを抜刀、着地すると同時に体勢を整え速度そのまま通常ブーストを再噴射する

悲鳴のような振動音を上げるブレードを前へ突き出してフィードバックの武器腕を狙う。長い刀身は肩部に接触したものの、装甲に阻まれ運動エネルギーを喪失、切断には至らなかった。もう片方を同じように叩き付けるが結果は変わらず

砲身は既にストレイド頭部へ向いている、このままだとカメラ喪失は確実

横には避けず更に接近、砲身の内側に入り込む。僅かに間に合わず砲弾に頭部側面を削り取られ、右側の視界を喪失。補助カメラに切り換えながら反対側へ抜け急速旋回、助走スペースを確保する

『君はどうする？守るか？壊すか？それとも、利益の大きい方か？』

「んなもんはその場で考える！」

最大出力でクイックブーストを噴射した

両腕を交差させ2本のブレードを同時に横振りする、それがフィードバックへ到達する前に腰部に衝撃が入ったが無視

左右両方の武器腕バズーカが宙を舞った

そのまま右に1回転、最後のあがきに撃とうとしたミサイルランチ

ヤーを頭部ごと本体と分離させる

フィードバックの全武装が荒野にぶちまけられ、数秒でマッチ終了のアナウンス、戦闘続行不能と判断したらしい

『……まあ、戦いがいつ始まるかはわからん、準備はしておくとい
い』

フィードバックが離れていく

こちらもすべての試合を消化し終えた、速やかにハンガーまで戻って、次試合のために場所を空けねばならない。マシンガンとショットガンを回収してから後に続いた

「準備とか言うけどよ、奴らが何考えてんのか俺はまだ知らない」

『む……。ここで話すのはまずいな、後で来てくれると助かる』

次は本命、ランドグリーズだ。まだ姿は確認できていないようだが、来なかったら来なかったで罰則というものがある、遅かれ早かれ出てくるだろう

「何だ、スパイでもいんのか」

『いることはいるだろうが問題はそこではない』

「?」

ハンガーまでたどり着いて、ビーコンに従い割り当てられた格納庫へ
フィードバックが建物に収まる直前

『衛星軌道を埋め尽くしているアレだよ』

「ああ……時間ですね……もう行かないとですね……」

「って言い続けてもう5分経った訳だが」

「初めてなんです、勘弁してあげてください」

ソファに座って天を仰ぐミドリである。フェイはいまだに未確認だったが、呼び出しアナウンスがミドリのものしか放送されないあたりもうハンガーまで行ってしまっているのか

「励ましてやれよ」

「あんたの方が適任でしょ」

「いやーなんつーかなー、やっぱり若いもん同士の方が見てて絵にな

るよな」

「…なんかこのシチュエーション前にもあったなあほんとにもう…」

エイプールといいミドリといいインテリオルは励まさないと立ち直ってくれないのかと思う。それに若いといったってロイも十二分に若いだろ

兄に急かされてほとんど見えず知らずの女の子を励ましに赴く、なんというか目が死んでいた、完全に押し潰されていらっしやる

「……とりあえず深呼吸しようか」

「えー……ヒッヒッフー、ヒッヒッフー」

「あ、いやそれはラマーズ法です」

「すう……………うっ…」

「吐いて吐いて！」

どれだけ緊張してるんだこの子と思いながら咳込むミドリの背中をさする。やりながら思うが、これ何か意味があるんだろうか

「はあはあ……くそっ！オーダーマッチがなんじゃい！やってやる！やればいいんでしょ！」

吹っ切れた

「結局は訓練と一緒にだっつーの！いつも通り撃ちまくってそれで終わりだ！」

「うん」

「相手はなんだ！オーメルのがきんちよだ！鬼軍曹じゃない！」

「うん」

「格の違いを見せてやりますよ！こちらら戦闘訓練受けまくってます！被験体上がりになど！」

「うん？」

「勝利をこの手に！」

「いや行こう」

「え？」

「やる気出たんならもう行かないと」

「……………ああ…そうですね…機体…機体まで……………」

そしてループが始まる

「これはどうすりゃいいんですか」

「そうだな…何か衝撃を与えてみたらどうだ？例えば抱きしめるとか、プロポーズするとか」

「ああなんかもうさっきからデジャヴがひどいんだけど……」

そうかそうかとケタケタ笑うロイ。その後ひとしきり笑った後ソファから立ち上がり、陸へ近付いてくる

「じゃあ手本を見せてやる、こういうのは相手の性格をよく考えてだな…」

と

「あ、エイプール」

「！…！？」

痙攣

「行ってきまーす！！」

疾走、ボタンとドアが閉まる

「……………」

「プライドを守るために人間は死ぬ気になれる」

「プライドっていうかなー……なんだろ、愛？」

とにかくミドリは出ていった、肝心の対戦相手が確認できていないものの、後はモニターを眺めているのみとなった

「ハンガーに青いアリーヤとかいた？」

「いなかった」

「え？」

「断言する、ここにランドグリーズは来ていない」

と

キィ、とドアが開く

「……相手の機体が修理間に合わないから延期だって……」

「嬉しそつすね」

「うっ嬉しくなんかねーですよ!!」

にやつく顔を引つ張って戻して、とりあえずソファに座り直す。それから数秒、モニターがシャットダウンされた

「じゃあリンクスの方も来てないのか」

「いやいるっぽいですよ？状況説明に来てたのは変なおっさんでしたけど」

「おっさん？」

「んー…あれは確かファープニルの……」

あのちよつと熱血入ってる人か

「ロッカールームで待たせてるとか…」

ロッカー？

ロッカーというと、今いるのは恐らく

「見張りは…どうなったんだ…？見張りは……」

『わからん…裏口から入ってきたとしか……』

機体から降りて、着替えるためにロッカールームのドアを開け、中に青髪の女の子がいるのを確認してから全力でドアを閉め直した

一体何が始まるんです？

『まず…オーダーマッチは延期になった、今ファープニルの…リゲルとかいうのが日程を話し合ってる。一応本人も連れてきた、という所か？』

「……………」

ドアを少しだけ開ける

覗き込む

長椅子で寝そべっている

「と…とりあえず無害そうだ…入るぞ」

『わかった』

携帯電話を終話させ、覗いた体勢から滑り込むように中へ

フエイ、ランドグリーズのリンクス、青い長髪で女性、現在死んだように眠っている。それに一步、二歩と近付いて、完全に意識が落ちていたのを確認した、これはちよつとやそつとでは起きたりしない

いやたかが小娘に何を怯えているのか

「……………」

若い、自分も若い方だがそれ以上に若い、すべてのリンクスと比較しても最年少の部類に入るだろう、しかも生まれる前から実験体生活が確定していたのだ、生まれてからネクストを動かし続けている、そりゃこの年齢で手遅れにもなろう

自分だってセレンに拾われるまで底辺やっていたが、だからといってここまで

「……………」とりあえず、着替えるか」

ちょっと誰かORCAルートのifで10万文字くらい書いて夏コミ出場助けて

ロッカーから私服を引っ張り出して、それから対Gスーツコンバットエッジを脱ぎ捨てた。この状態で起きられるのはちょっと勘弁願いたいので急いでズボンとシャツを着る

それが終わってどうするか考えていたら、携帯電話が振動を始めた

「おうどうした」

『オーダーマッチの日程調整が難航しているようだ、やるなら今しか無い』

「何やるって？」

『いいか、よく聞け』

電話の向こうにいるセレンはかなりの小声、どうも事務室かどこかに潜入しているようだ。もしあのババアがドアに耳押し付けて聞き耳立ててるっていうのなら全力でやめさせに行く所だが

『チャンスはまだある、まだあるが今を逃すつもりはない、だが機材を用意する時間もない』

「ふむ」

『幸いというかなんというか、お前の財力とはんでもないものがある、下手すれば企業を立ち上げられるほどに』

「財布握ってんのはお前だけだな、んでそれがどうした」

『1人養うくらい造作もない』

「は？」

『お前ラチが育てるんだ』

「.....」

『その.....子供、欲しくないか...?』

「うるせえ黙れ踏み殺すぞ」

なんかもう駄目だこいつ、せめて冗談である事を切に願いながらフエイを観察、まだ起きていない

『じゃあそうだなあ…とにかくDAMSの存在だけでも確認してくれ』

「どうすんだ？」

『体のどこかに接続端子があるはずだ、探せ』

それも十二分に変態行為な気がするが

まず様々な角度から見回してみる。当然ながらそんなわかりやすい場所にあるはずも無く、昼寝する少女をじっと観察する変態という構図が完成するだけで終わった。これが緑のナイスバディさんだったら理性も吹き飛んだのだろうか

「……まあ…場所を弁えれば…」

まず可能性の高い頭部から

首、無し。耳、無し。頭全体を撫でて異物が無いことを確認。自分の変態さ加減に涙が出てきたがなんとか堪えて腕に移動

服の上から触ると、左手首の上あたりに金属の感触がした

これはきたか、袖まくるくらいならなんとか耐えられる。長袖シャツ1枚、軽くつまんだだけで袖が上がっていく

手首通過、そこから少しだけ進んで、途端に肌の色が変わった

手首から数センチほどの全体がどす黒いアザのような色だ。酷くガサついており自然にできたものとは思えず

何か、何百回と注射を打たれたような

「ッ……！」

そう思い当たった瞬間、反射的に袖を戻した。脳が見る事を拒否したのだ、気付けばさらに2、3歩後退している

『どうした？何があった？』

携帯電話からセレンの声。それを握る手も汗がにじみ出ている、濡らすのはまずいと持ち方を変える

「……いや…俺だってそれなりに不幸な目には遭ってきたよ、理不尽な人生も経験済みだし。でもこれは駄目だ、格が違う」

詳しくはわからないが多分それだろう、人間の底辺を知っていると
思っていた、だから今見たものが信じられない

薬漬けになって脳みそにコード繋がれて、これをやった奴は本当に
人間なのか

近付けない、また何か見つけてしまうことを恐れている

『ああ、時間だ、保護者がそっちに向かった』

聞いた途端に足音、慌てて携帯電話を切らないで畳み、汗を拭っ
て無関係を装う

「……………うおっ……」

入ってきた途端に怯まれた

「なんだよ人を化け物みたいに」

「ああいやすまん、俺からすりゃ完全に化け物なんだな」

苦笑を交換しつつ着替え終わって出ていく風に見せ、フェイを揺す
って起こすりゲルを観察。目を擦りながら起き上がって、それから
こっちに気付いた

「やー」

「おーう」

普通だ、ちゃんと抑揚があり無機質などでは決して無い。既に原因はわかっているので当然だが

「悪いが遊んでる暇は無いぞ、すぐに帰らねえと」

「頭痛い……」

「だから帰って頭痛治さないと」

こないだボコボコにしたから寝込んでたのかと思いながらゆっくり出口に向かう。後から2人ついてきた

「延期はいつになったんだ？」

「3日後だな、その頃には機体も調整終わるだろうし」

「ソフトウェアが特殊だからな」

「そりゃ……」

一瞬止まった

この男も無関係ではないらしい、当然か

「で、お前はどっち側の人間なんだよ？」

「……」

ロッカールームから出た所で止まり、しかし向こうは歩行速度を落とさず、眠そうなフェイを連れて離れていく

「保護者だからな」

言い残したのはそれだけ、すぐに角を曲がって見えなくなった
いなくなったのを確認してから携帯電話を開いて耳元へ

「とりあえずあいつは黒で」

『ああ』

「んでアサルトセル関係、オメールあたりで3日以内に変な行動起こしそうな団体を調べとけ」

『既にやっている』

その返答に満足して通話を終了させる。まだ情報不足ではあるが状況はだいたい理解した、後詰めはGAの連中に任せるとして自分もさっさと帰って準備しなければ

どう潰すにしろ負ける訳にはいかないのだから

終わりだ、水に溺れて溺死しろ

爆発と破片を喰らいまくって歪んでしまった扉がギチギチと音を立てて解放される

『偵察機の離陸に少々手間取っています、外で待機してください』

「了解」

機体を前に動かしてハンガーの外へ。機材が壊れてしまったためかなりアナログな方法で調整したのだが、各部関節に違和感はない、作業員の腕か

午前3時、空はまだ暗い。基地の照明があるので真っ暗という訳では無いが、今のうちにナイトビジョンへ切り換えておく

正常動作を確認して駐機スペースで停止

「他の企業がどうしてるかはわかってるの？」

『それがまったく。各々勝手にやっている状態なので、レーダーが復旧しない限りは。まあ攻撃してはこないと思われるので大丈夫でしょう』

飛行場からジェット機が飛び立っていった

『準備完了しました、これより基地西部の哨戒およびソナー設置作業を開始します。アンフィスバエナは方位280を維持してまっすぐ進んでください』

真西ねと思いつつ陸は機体を前進させる、基地から1歩出ると砂しか視界に映らなくなった

『なお、仮に敵と遭遇した場合、でき得る限りは交戦せず離脱してください、この基地には1会戦分の余力もないんです』

それはブリーフィングで聞いた。構造が比較的簡単な車両は順次復旧しているらしいが、複雑な動作をする人型兵器となるとインストールするソフトウェアも膨大となるようだ、よくてノーマル、ネクストなど夢のまた夢だろう。それに人員もいない

今動かせるのは車両十数台、ランドクラブの主砲1基、それから複座戦闘機とアンフィスバエナ、それだけだ

『確認しましょう。あなたの任務は航空機部隊の護衛となります、敵と遭遇した場合、全機の安全圏離脱まで時間を稼いでください』

「はいよ」

じわじわ離れていく戦闘機を見送りながら周囲を確認、砂しか見えない。一昔前まではここも自然の宝庫だったのだろうか

砂、砂、砂、4つ目の砂丘を越えたあたりで飽きてきた

「帰っていい？」

『ナマ言ってると砲弾ぶち込みますよ』

命懸けの帰還は嫌なので前進を続ける

そのまま10分経過、相変わらず砂しか見えないが、ずっと西へ進んでいたのが破壊されたネクスト基地が近くなってくる。このままならあと十数分でリーダーに入ってくるはず

「あそこ今どうなってるの？」

『わかりません』

「ですよね」

以前の航空写真では何もいなかったはずだ、実際はなんか変なのが埋まっていたが

そもそもあそこが教われた意味がわからない

『……行ってみます？』

「e？」

『このまま行けば30分後には到着します、ついでに寄って調査しましょう』

「りょ……了解」

いらぬ事を言ったか、副次目標が追加されてしまった。仕方ないので基地跡目指して前進する

武装を確認、いつものグレネードと近接信管ミサイル、左腕はストレイドから貰った強化マシンガンに変わっているがそれだけだ、戦法はそれほど変わらない

『む……前方、オーメル部隊』

ブースターカット、急停止。ノーマルの群れが大移動していくのを見送る、こちらに気付いてはいるようだ

『こちらG A社、前方のオームル部隊、応答してください』

「……………」

『……………』

「……………」

『……………』

見えなくなった

「見事なまでの無視だ」

『……………先に進みましょう……………』

ナメられているというかなんというか、まあ実際ナメるしかない惨状ではあるが

「近くに基地でも作るんかな」

『基地というか、防御陣地兼物資集積所でしょうね、今から作ってもまず間に合いません』

こちらの本拠地から100kmと少し。最悪の自体も考えてギリギリ連携可能な位置に置いた、ではないだろう、奴らが睨んでいるのはこの騒動が終わった後だ

『ではソナーのシステムリンクを確認するので』

「うい」

接続が切れる

「さて……………ん？」

また繋がった

『こんばんは腐女子です』

「…なんでしょうか」

『旧ネクスト基地に行くという会話が聞こえたので少々、ついでにやって頂きたい事が』

あっちの基地にいたのだろうか、先日 にじい を引きずっていつてからまったく姿を見ていなかったリリウムさんである

『前回の作戦で大部分のPCは破壊しましたがまだ生き残っているものがある可能性があります、それを探して頂けますか』

「……え、降りて？」

『はい降りて。見つけた場合は起動し、中のデータを抜き取ってください。今そちらにセキュリティ解除プログラムを送信しますので』

なんか大変な事になってきた

『4TBのメモリースティックが常備されているはずなのでそれにダウンロードしてください、マスターキーになるはずです。では到着したらまた連絡します』

「……了解……」

色々と言いたい事もあったが黙っておく、何せリリウムだ

溜息をひとつ、諦めて砂漠を突き進む

もうすぐです、もうじき早くお待ちください

到着

『粒子濃度測定……ただちに影響の出るものではありません』

「お…オーケー」

ハッチを解放し、コクピットからはい出る。放棄された後に砂嵐でも来たのか、アスファルトは分厚く砂を被っていた

陸が降りたのはネクスト基地跡のハンガー付近で、その向こう側に司令部、隣接して居住区画がある。いずれも原型を留めていないが『まず居住区へ向かってください、最優先で確認して頂きたいものがあります。武器は持ちましたか？』

「あー、一応持ったけど」

『アンフィスバエナのレーダーからでは建造物内すべてが死角となつています、まず人がいないか確認してください』

と言われても、自らの手で銃を握るなど滅多に無い訳で

コクピット内で置物と化していたサブマシンガンを眺め直し、とりあえず動作を確認。ボディにはMP5Kと型番があるがなんのこっちゃわからない

その他の持ち物はメモリースティックと懐中電灯、それからインカムのみ、本当に会敵なんかしたら10秒ともたない自信がある

「……色々と置き去りにされてるね」

ハンガーはスクラップと瓦礫で散らかりきっていたが、そこにあったすべてを壊しきれてはいない。予備パーツ、弾薬、燃料、価値のあるものはたくさんある。特に主力を担っていたメリーゲート、これだけあれば再起動も可能だろう

『持ち帰っている余裕はありません、当時の”誰か”ほど困っていませんし』

「あい……」

通信機の向こう側にいるリリウムに急かされハンガーを通過、司令部前に出る。東の空は僅かに明るみ出していた

居住区はここから左に50メートル、壁の破口から中に入って廊下を直進。内部はそれなりに原型を留めていたが、やはり砂嵐にやられたらしく荒れ果てている。そして何より暗い

『……そう、あれは3年前でしたか、私はORCAの襲撃に備え夜勤をしていました。一人で事務処理をしていると外からぴちゃぴちゃと水音が』

「やめてください、やめてください」

怪談話を始めたリリウムを静止させつつ居住区へ到着、ここから先は一般社員の寝室がずっと続いている。社員以上の個室は3階より上階段、崩落してなければいいが

『ノイズが酷く完全に確認できませんが、施設全体から電磁波が放出されています、生きている発電機があるのかもしれませんが』

「電気来てんの？」

『はい、ですがエレベーターは使わない方がいいでしょう』

懐中電灯の光を壁へ、照明のスイッチを探して切り換える

割れていない蛍光灯がぼつりぼつりと灯った

「有り得る？」

『不自然の極みです。一切人の出入りが無ければ、の話ですが』

変に点滅してもいない、安定した電圧が供給されているようである。そもそも燃料がもつはずもなし、放棄後も誰かが手入れしているとは思えない

とにかく上へ、というリリウムの指示に従って階段（だったもの）をよじ登る。3階まではどうにかなったが、そこから先は跡形もなかった

どうも5階まで行って欲しいようだ、そこまで上がるとかなり上級の人間が住んでいたあたりになる。例えばリンクスとか

まさかりリウムのPCから執筆データを回収してこいとかそういう理由じゃないだろうな

『廊下を20メートル進んだ地点で壁が崩落しています、登れるか確認してください』

明かりを点ける。少し先に瓦礫の山があった、が、4階まで積み上

がるまでには至っていない

「ちょっと無理かな」

『では離れていてください、アンフィスバエナを遠隔操作します』

それはここに対物ライフル弾をぶち込むという理解でいいだろうか
ハンガーの脇に停めてあるアンフィスバエナが勝手に動き出しライフルの銃口をこちらへ

で光った

「早いよ！……！」

名前の上ではライフルだが威力は戦車砲なんかよりも遥かに高い。
すぐ背中を向けダイブし、同時にやって来た轟音と衝撃と爆風により陸は床へ張り倒される

ガラガラと瓦礫が崩れて煙りが巻き上がった

『できましたよ、階段』

「……そうですね……」

加害範囲の計算はしたのだろう、現に目立った外傷は受けていない、
付け加え面倒なので今のデンジャークロスは不問とする

起き上がって、頭の粉塵を払拭、即製階段に視線を向け

なんか女の子めいたものが転がってるのを発見

『サーマルに人影が映っています、確認できますか？』

「あー…いるねえ…目回してる…」

『敵？』

「いや敵ではないかな…」

見たことのある、というか、よく知っている顔だった。つい先日まで同じ建造物内に住んでいたはず

インテリオルのロゴが入った対Gスーツ、同じくインテリオルのものと思われるライフル、半分ほど気を失っていて目は渦巻き

なんだ今日はリンクスの歩兵戦デーなのか

「エイのプーさん……」

『えっ…それはさすがに危険すぎると……』

サバゲ始めました

「いやえーとですね…哨戒中だったんです、それで何か手掛かりでも残ってないものかと」

と、5階の廊下を前進しながらエイプールが言う。情報収集目的ならこちらと同じ理由だが、果たして何の情報を集めていたのか

『機密情報は回収済みです、今更漁られた所で被害はありません』

インカムからリリウムの声

『502号室、そのあたりにあるはずですが』

502は誰の部屋だったか、あいにく表札ははがれて無くなっていた中に入ろうとドアノブに手をかけ、押しても引いても開かない事を確認

「鍵かかってます」

『ではマスターキーを』

マスターキー？そんなものあっただろうか、あったとしても見つかる可能性は

と考えている間にエイプールが陸とドアの間に割って入り、背負っていたアサルトライフルを脇の下を通して前に持つてくる。陸のSMGと比べ倍以上の長さがあり、トリガーと弾倉が2つずつ。そのトリガーの片方に指をかけ、やはり2つある銃口をドアノブへ

ガン！！

「開きましたよ」

「ずいぶん乱暴な鍵っすね……」

ポンプアクションレバーを後退させて空のショットガンシエルを排出、それからセーフティーをかけ直した。ライフルの下にショットガンがくっつけてあるようだ、やけにでかいと思ったら

ひとまず室内に入り、内部を一望。陸の部屋とほぼ同じだ、カーテンなど住人の趣味で変更されている点もあるが家具の配置は変わっていない。ただ異常な箇所は入ってすぐ目についた

パソコンが1台、起動状態でテーブルに鎮座している

「何ですかこれ……」

まずエイプールがキーボードに取り付き、数秒で行き詰まる。ロックがかかっていたようだ、パスワードの入力を要求されている

その後ハッキングを試みようとしたようだが、待つのも面倒だ、メモリースティック（マスターキー）をぶっさした

「うわ……」

途端にモニターが暴走を始める、パスワードを割り出してくるとか単語をローラーするとかそういうやり方ではない、恐らくセキュリティ機能を根本から消滅させようとしている。しばらくして画面が落ち着き、何事もなかったようにデスクトップへ

動いていたのは何かの計測ソフトだ、右から左へと動く波線グラフが延々と流れ続けている

「これは…磁場を計ってるみたいです」

「ジバって何？」

「えと、磁石の物を引っ張る力が影響を及ぼす範囲の事で…」

説明しながら、エイプールがＣドライブの中身を洗っていく。途中で全データをコピーしろと指示されたのでメモリースティックに片端から入れてもらう

「恐らく、これとおなじものがいくつかあるはずですが、それとデータを集積している親機」

コピーを終わらせてメモリースティックを引き抜く。それからＰＣの裏に回って繋がっているケーブルを確認、固定されていない青い線は窓から外に出て司令部方向へ

「親機は中央指令室？」

「そこに置くのが一番手っ取り早いでしょうね」

床に置いていたライフルを構え直しエイプールが先行。人がいることはほぼ確定している、警戒はした方がいいだろう、見様見真似でサブマシンガンを構えて後に続いた

「人の熱源反応とかは」

『あつたら撤収指示していますが。まあそうですね、地下に隠れている可能性はあります』

地上はすべてサーマルで探知できているようだ、もし出て来たとしても態勢を整える時間くらいはあるだろう

整えたとしても生き残れる自信は無いが

「今のだけじゃ駄目？」

「ぱつと見ですが、つまらないデータしかなかったので」

司令部に行くにはまず3階まで降りる必要がある、崩れている場所から適当に飛び降りて3階へ、通路を進み渡り廊下を越えた

ここから先はあまり来た事がない

『最上階です、とにかく昇ってください』

インカムからの指示に従い階段を探す。幸い階段としての機能は保っていた

一番上まで昇って、角を曲がる前にエイプールから停止のジェスチャー

「万が一を考えまして……」

何か帯状のものを引っ張り出して床に設置しておく。恐らく爆薬だ、

起爆させれば階段が崩れ落ちるだろう

さらに柵などを倒し遮蔽物を作っておく

「行きましょう」

「……歩兵戦やった事あんの？」

「座学だけですよ」

少し歩いて指令室まで到達、例によってマスターキーでこじ開けた

やはりパソコンが1台、中央のテーブルで稼働している

「中身をコピーします、見張っててください」

「了解」

廊下に戻って窓から外を見

「……うお？」

自分の機体と目が合った

勝手に移動している

「そついえば俺の機体はいつの間に遠隔操作可能になったんです？」

『野球やってた頃に』

ずいぶん早いな

『今のところキーコードはリリウムしか知りませんのでご安心を』

いやそれが一番怖いんだが

『びるびるびるびるぴーLOOPY』

ごめん意味わからない

あけおメールは迷惑です、あけオメールにしましょう

「わっ……」

機体とにらめっこしている内に後ろで声上がる、振り返るとエイ
ブルがキーボードを乱打していて、モニターはなぜか真っ黒

「ロックされました」

数秒回復を試みたのち、これ以上は無理だと判断してメモリースティックを引き抜き、陸に渡してきた

長居するのはまずい、すぐに部屋から出て作っておいた遮蔽物に身を隠す

「熱源反応は？」

『建造物内各所で機械の始動らしきものを探知、恐らく無人兵器です。隣部屋に1機』

バゴン！と、ドアが内側から破壊された

キャタピラを回転させて廊下に現れたそれは上部をまるごと回転させ左右両側に装備した機銃をこちらへ。全高1メートルほど、超小型のACに見えなくもない

「うわまつず！」

隠れている棚は金属製だがあの機銃掃射に耐えられるとは思えない。だがエイプールの対応は早かった

無人兵器を視認してから1秒足らず、棚から踊り出てアサルトライフルを照準、発砲

センサーが集積された頭部が小爆発を起こした

「その銃すごいね！」

「そっちこそその骨董品はどこで手に入れてきたんです！？」

いやこれは師匠がジャンク屋でして、とか言っている間にエイプー
ルがスイッチを押し込む、轟音と共に階段が崩落した

「非常階段から出ましょう！先行します！」

来た方向とは反対に廊下を走っていく。その間にアンフィスバエナ
はブースターをゆっくり吹かして後退し、右腕のライフルを照準

『支援攻撃のスタンバイ完了、地上の掃討を開始します』

地震が始まった

「こちらヴェーロノーク！ポイントアルファで敵部隊と遭遇しまし
た！リーダーには何か映ってませんか！？」

壁の外側に繋がるドアを開け非常階段を駆け降りる。ゾンビのよう
に群がる無人兵器、撃ちまくるアンフィスバエナ、爆発、爆発。走
りながらエイプーが管制機か何かと連絡を取り始め周辺情報を要求

『未確認機2！？早く確認してください！』

2階を過ぎたあたりから下に向かって連射を始め、降り切る前に1
機を撃破、その後ショットガンに切り換え手近のもう1機へヘッド
ショット

「ごめん機体寄せて！」

『了解しました、ですが30秒ほど援護射撃ができなくなります』

めくれたアスファルトの影に隠れてアンフィスバエナの接近を待つ。
ものすごく遅い、50km/hも出ていないのではないか

そうこうしている間にも無人兵器がゾンビのように群がって来るため、片端から頭部を破壊して黙らせる。なお、ここまですべてエイプールの戦果である

このまま何もしないのは情けない、持っているサブマシンガンのセイフティを確認してコッキングし、瓦礫の端から発砲を開始した。
音はパパパと軽い感じ、エイプールのアサルトライフルよりは弱いだろうが予想以上に反動があり、しっかり押さえてなんとか無人兵器に照準を付ける

カンカンカンカン！

貫通力がまったく足りていない

「駄目だ役に立てない！」

「当たり前ですよロールアウトから何十年たつてると思ってるんですか！！」

首根っこ掴まれて瓦礫の影に戻り、途端にさっきまでいた場所が銃弾の雨に晒された。1人だったら確実にミンチになっている所だ

後方でブレーキ音、アンフィスバエナが到着した

「機体どこに停めたの!？」

「一番端の発電所の方に!」

なら送るべきだろう、援護射撃を受けながら乗降ワイヤーを出し足をかける。それからエイプールを抱きかかえてコクピットへ

『で、この狭いコクピットに2人も入れない事を知った上で連れ込んだんですか?』

「知ってたといえそうだけどね」

GAグループの機体はある程度の余裕があるだろうが、極限まで軽量化されたライールのコクピットは戦闘機並に狭い。もし2人乗りするとするなら膝の上か、いや膝の上しかない

まず陸が座席におさまり、その上に座ってもらう

「ちょっと我慢してね、できればしっかり掴まっというて」

「い、いえこちらこそ…」

人生トップクラスに入る密着具合だが甘酸っぱい青春をしている場合ではない。目的地は発電所裏、ネクストに乗ってしまえばこっちのもの

ブースト最大出力、無人兵器が石ころのように蹴り飛ばされていく

と、レーダーに反応

「友軍部隊の情報だと、識別信号不明の機体が2機こちらに向かっています、急ぎましょう」

「もう遅い……！！……いや速い……！！」

レーダーパネルの端に映ってから目視確認するまで数秒、オーバードブーストだ、それも超高出力の

『自律型ネクスト2機確認』

横へのブーストで突進を避ける、その後地面から足を離して反転、しかし進路はヴェーロノークのまま

相手は減速したものの高速を維持して旋回し、再度こちらへ接近してきた。まだ判断できるほど交戦していないが、何かが違う、この間戦った自律型ネクストのような陳腐なものではない

コジママシンガンのような何かを回避しつつ後ろへのクイックブーストで一気にヴェーロノークへ

中堅リンクスくらいの戦闘能力はあるのではないか、急加速にも突き放されず追いついてくる。困った、エイプールを降ろす暇が無い

「……インテリオルに増援とか、頼めない？」

「うー……ネクスト戦力は基本的に単独行動ですから……」

最近はリンクス戦争並に戦闘が大規模だったため忘れていたが、本来ネクストとは単機での運用を主とするハイエンド兵器である。そんな陸の王者が増援を必要とするなど、師団規模の部隊と遭遇した時くらいで

逃げ回りながらどうするか考えていると、解決策を出したのは通信機の向こう側

『増援についてはリリウムが手配しておきました、ちょうど近くを徘徊していたので』

「徘徊？誰が？」

『ダガーアークです』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7564k/>

It might be there

2012年1月5日22時47分発行